



案山子



2016年冬号

新潟大学文芸部

目次

◆お題作品『金』

・ Hello, Goodbye	哲	
3		
・ 一文無し	三ツ葉 葵	
4		
◆一般作品		
・ 白の忘却	文部 蘭	
6		
・ 白昼、夢と消ゆ	三ツ葉 葵	7
・ 金色の守護者	七乙女昴	8
・ 英雄	文月遼、	
9		
・ 黄昏時、迫る宵闇	夏村晋	10
・ パルティール考古堂業務報告書 II	幼夏	11
・ 立てど座れど歩けども	如月 杏	12
・ 異戦士イダテン	今畑 鏡	13
・ 聖母	鰐沢 増穂	1
4		
・ 清教徒	鰐沢 増穂	
15		
・ ゼロの零乗	夏草 こくりこ	
16		
・ ああ緒は愛より出でて相寄り……ああ、惜しい。	蒨谷アツムネ	17
・ 小人	Puney Loran Seapon	1
8		
・ 黒棲まう千年楼閣 Je m'appelle Nuit. 高天美月		19
・ 修羅が靡く	松本惇暉	
20		
・ 箆筒集（三）	松本惇暉	21

お題作品集 お題「金」

Hello, Goodbye (哲)

Hello, Goodbye

哲

「佐藤瑠衣図か。最近はやりのキラキラネームね。つまらん。こんな名前を付けられた子供がかわいそうだ。証明写真がない。こんなものがよく通ったな。こりゃ、後で鈴木野郎に雷を落としてやらにゃならん。薄汚いなあ。折り目が目立つ。履歴書ぐらいちゃんと出せ、馬鹿。ええと、一応大卒なのだが、聞いたことない大学だな。どこだこりゃ。おっ、俺と地元が同じだ。高校は、地元の底辺高校だな。あの高校は全国でもかなりひどいと聞いたことがある。さしずめ大学は地方の三流以下といったところか。これで、ウチのような大手に挑戦しようとはなかなかのチャレンジャーだ。げっ、こいつ転職歴がある。えっと、読めない。字ぐらいもう少しキレイに書いてくれないかな。字面から考えるに製造業かな。二年で辞めているな。区分的には第二新卒といったところか。さてさて志望動機は、えっ、何でこれが一次選考通ったんだ。小学生並じゃないか。これは本格的に鈴木にお灸をすえてやる必要がある」

藤原裕貴はそう思いつつ、黒ずんだヨレヨレの履歴書をデスクの右側に払いのけた。

「次の方、どうぞ」

あくび交じりに言った。小会議室のドアから、背の低い女性が登場した。刹那の後、隣に座っていた部下に小突かれて、初めて我に返った。口が半開きになっているのをごまかすように赤面し、大きく咳払いをした。その後の採用面接はほぼ滞りなく進んだが、一つだけ見るべきところがあった。それは、今となっては書店に並んでいるマンガのラッピングは無意味かつ時代遅れという意見である。藤原も以前から、マンガはとっくに市民権を得ているため、漫画のラッピングはかえって売り上げを落とす原因になると考えていた。いろいろ聞いてみても、出版界の最前線で議論されていることがポンポン出てきた。佐藤に商才があると思った。面接終了後、いつもの飲み会を断って、急いで帰宅した。ただ佐藤瑠衣図の容姿が頭に焼き付いて離れなかった。

佐藤瑠衣図は無事、沙石社への入社を果たした。売り上げが落ち目になっている少年マンガ雑誌の編集部配属された。新人研修の時点で同僚とはあらかじめ仲良くなっているようだった。沙石社の人事部は少年マンガ雑誌編集部の真向かいに位置していた。毎日、藤原は佐藤が遅くまでデスクで残業している様子に一瞥を投げてから帰宅していた。佐藤瑠衣図を一目見た瞬間、惚れていたのだ。スキのない男であったから、そのことが社内に知られることはなかったが、少なからず知られかけることはあった。それは、佐藤が編集の初歩的なミスで上司から叱責を受けている時のことであった。

「何事だ。おい、このフロアの責任者はいないのか」

藤原が明らかにイラついたような表情で、編集部に入ってきた。佐藤を叱っていた男の姿を認めると、大股でその男のところに向かって、男が何か言い始める前に言った。

「人事部の藤原裕貴だ。君、何もこんな公衆の面前で叱ることはないんじゃないか。それも大きな声で。隣の人事部まで聞こえてきたぞ。うるさい。何でもっと人目につかないところで叱らないんだ」

「それは教育的効果を考えてのことです。こうすれば、ほかの社員に反省を促すことができるじゃないですか」

佐藤を叱っていた時とは打って変わって、ゆっくりと言葉を選んで話した。男の言葉から間髪入れずに言った。

「だとすれば君の考えは間違っている。いいか、人間は他人の失敗から学ばない生き物なんだ。他山の石なんてクソくらえだ。それに、反省って何だ。反省っていうのは、失敗の原因を分析して、二度と失敗しない方法を考えることだ。『あーあ、アイツ怒られてるわ。俺も怒られないように気をつけなきゃ』で済む問題じゃないんだよ。だって、そんなの許したら上っ面だけ上司の機嫌を窺って、本質的な問題には気づかない連中ばかりになってしまうじゃないか。そういうことだ。おい、君。こっちを向いて話を聞きなさい。確かに本人に過失があったことを自覚させるために、叱りつける必要はあると思うよ。でもさ、こんな大勢の前で叱りつけて佐藤が極端に劣等感をもったらどうするんだ。失敗を恐れて百パーセントのパフォーマンスを発揮できなくなったらどうするんだ。クリエイティビティは企業の生命線だぞ。若い芽を潰すようなマネはくれぐれもやめていただきたい。もう一度言うが、人間は当事者にならないと物事を自分のこととして引き受けられない生き物だ。もう二度と、みんなの前で、人を、叱り飛ばすような、マネは、しないでくれ」

声量は、いつの間にか男が佐藤を叱責していた時のそれと同じぐらいになっていた。右手で男の胸のあたりを指さしながら、最後の言葉を突き刺すように言った。形相を見るに、今にも手が出そうであった。言葉を切ったとき、オフィスに沈黙が訪れた。男はすっかりけおされ、目に涙をためていた。佐藤もただ申し訳なさそうに俯いているばかりであった。オフィスには一瞬気まぐずい空気が流れたが、コピー機の機械音がどこからか流れてきた。我に返ったように表情を緩めて言った。

「私としたことが、我を見失っていた。君、何か反論は」

「いえ、ありません。失礼します」

男は涙声でそう言った後、大慌てで荷物を片付けて出社してしまった。モジモジしている佐藤に仕事に戻るように言った。

「おい、諸君。これは見世物じゃないぞ。君たちの仕事を邪魔して本当に悪かった。邪魔者は失礼するでしょう」

職員に陽気に笑いかけながら部屋の戸を閉めた。一点に注がれていた職員の視線は、姿が見えなくなってようやくパソコンの画面に戻った。

藤原が編集部の中堅社員を叱り飛ばした件は、たちまち社内の噂になった。その中でも、実は藤原裕貴は佐藤瑠衣図に気があるのではないかという憶測が最も幅を利かせた。しかし、その事件の一月後に、佐藤が人事部とトラブルを起こしかけて、藤原に叱られている様子が目撃された。そのことがきっかけとなって、噂は収束していった。

藤原は自身のアパートに帰って、小さな箱をコタツの上に置いた。荷物を一通り片付けて、崩れ落ちるように座った。丁寧に箱の封を解くと、よくあるモンブランが姿を現した。おもむろに歌いだした。

「ハッピーバースデートウーユー、ハッピーバースデートウーユー、ハッピーバースデーディア自分。ハッピーバースデートウーユー。ああ虚しい」

悪態をついてモンブランを頬張った。アパートの中にはひげ面の男がモンブランを食べていること以外には別段変わったことはなかった。皿の隅から隅までスプーンでほじくりまわした後、ベッドに倒れこんだ。佐藤のことを考え始めた矢先、電話機がけたたましく鳴り出した。ゆっくりと体を起こして、受話器を手を取った。すぐに耳から遠ざけた。

「もしもし、藤原裕貴だけど。母さんだよ。うるっさいんだよ。もう少し小さな声で話してくれない。で、何」

「裕貴、もうあんた三十五でしょ」

「そうだよ。何か問題でも」

「ずっとぼけんじゃないよ。結婚はどうすんのよ。まだいい子見つからないの。いい加減にしないと、こっちで見合いの予定組んじやうよ」

「それだけは勘弁してくれ。俺は恋愛結婚をしたいの。前にも言ったけど、今はまだ状況が落ち着かないだけ」

「いつ落ち着くのよ」

「さあ」

「さあ、じゃないよ。このバカ息子。来年いい子が見つかっていなかったら今度こそ見合い婚をしてもらいますからね」

「だから、俺もあせってるの。結婚ぐらい自由にさせてくれよ」

一言一言強調した。こんな調子で売り言葉に買い言葉。議論は三十分くらい続いた。しびれを切らせてムリヤリ話を終わらせようとした。

「もう見合い結婚は時代遅れなの。こっちじゃ誰も見合い婚なんてしてないよ。ほら、最近政府が男女共同参画社会なんて言い出したでしょ。女の子が社会に出てきて、共働きの世帯が増えてきたんだよ。だから、これまで以上に夫婦の絆が重要になってくるわけ。親の意向で生涯の伴侶が決まっちゃうんじゃない、たまったもんじゃない。それに、俺にも今ちょうど付き合いたいなど思っている子がいるんだ。頼むから来年までは待ってくれ、来年までには必ずいい話をもってくる」

藤原の母はこの話で納得して受話器を降ろした。藤原は右手で受話器を降ろしつつ、左手で髪の毛をかきむしった。再びベッドに倒れこんで、寝込んでしまった。

佐藤瑠衣図はプライベートの面では人気者で、遊びの約束には事欠かなかったが、仕事はほとんどできなかった。業務上のミスは日常茶飯事で、雑用をやらせても全然ダメだった。部長のパソコンを壊して、危うく減給処分になりかけたこともあった。周囲からは典型的なドジっ子だと目されていた。しかし、沙石社の編集部は忙しく、構っている暇のある社員はいなかった。

四月から佐藤の業務成績が大幅に改善されて、それなりに仕事のできる人間になった。佐藤の隣に座っていた武田誠という社員が佐藤に仕事を手とり足とり教え始めたのだ。武田の、仕事を根気強く教えてくれる様子に惹かれていった。

藤原は額の汗を袖で拭きながら、汗臭い社員食堂に入った。隅のほうで食事をしている佐藤を眺めながら飯を食うのが日課となっていた。七月ごろから佐藤は社員食堂に姿を見せなくなった。食事場所を変えたのだろうかと思って、会社の正面にあるファミリーレストランに顔を出した。適当なテラス席に腰を降ろして、何となく右側に顔を向けた。少し遠く離れたテラス席に佐藤溜衣図が見知らぬ男性と楽しそうに話しているのが目に入った。すぐにそこに焦点を合わせた。聞き耳を立ててみたが、ファミリーレストラン内はランチタイムで人が多いため、一切会話の内容が聞こえない。佐藤と話している男は藤原に対して背中を向けているため、男の顔がわからない。注文の時に、一瞬だけ男が横顔を見せた。藤原はため息をついた。

八月のある日、いつものファミリーレストランで、武田誠が佐藤に何やら小包を渡しているのを目撃した。いよいよ気が気でなくなってきた。

佐藤は大変に仕事が遅く、毎日のように編集部が空になるまで仕事をしていた。そんな佐藤の様子をわざと仕事を遅らせながら、窓越しにチラチラと見ていたが、このころは上司として帰り際に佐藤に声をかけるようにしていた。

「佐藤、仕事の調子はどうだ」

「おかげさまで順調です」

愛想よく言った。

「それはよかった。そうだな、今度……、いや、何か飲み会の用事などはないのか」

「私ですか。そうですね。金曜日に木村君の誕生日パーティーがありますよ……」

「私も参加したい。当たり前だが、私のようなおっさんと若い連中と一緒に飲みに行くことなんて滅多にないだろう。これを機に私も若い連中の趣味を知ってみたいんだよ」

佐藤はあっけにとられたような顔をしていた。藤原は頬を紅潮させた。

「わ、わかりました。私佐藤溜衣図、誠心誠意幹事に連絡させていただきます」

藤原は頬を緩めたが、慌てて右手で口を覆った。佐藤はバツが悪いような表情をした。

「ありがとう。私の電話番号は5423-516-6551だ。詳しいことがわかったらここに掛けてくれ。い
いか、5423-516-6551だぞ」

そう言い残して、背を向けた。

「ちょっと待ってください。まだお名前を聞いていませんでした」

慌てて言った。振り向いて笑みを浮かべながら言った。

「藤原裕貴だ。よろしく頼むよ」

ドアから出る前に、振り向いて佐藤に一礼した。不思議そうな顔をしたまま礼を返して、仕事に戻った。

金曜日は仕事が立て込んでしまい、会社から出たときには二十一時を回っていた。パーティー会場であるアメリカ料理店に入ると、佐藤は藤原のシルクハットにすぐに気づいて呼び止めた。メンバーはほとんどできあがってしまっていた。とりあえず佐藤の隣に座らせてもらった。木村君の誕生日パーティーだと聞いてきたが、主役の木村君と思しき人物は見つからなかった。藤原はとりあえずサラダとステーキを注文した。お冷がなかったので、お冷を頼んで、それを飲みながら佐藤とその友人が話しているのを聞いていた。我慢しきれなくなって、佐藤に何の話をして

いるのか尋ねた。

「『グリアド』ですよ」

「ん。何て言った」

素で聞き返した。あきれたような気持ちを隠しながら囁いた。

「『グリアド』ですって。『グreekアドベンチャー』の略ですよ。最近はやりのTRPGです。私と同世代の人なら、たぶんみんなやっているとします」

聞いたことがなかった。というよりも一単語もわからなかった。さらに聞いてみた。

「TRPGって何だ」

「えっ、それは、ちょっと私にもわかりません」

さも困ったような顔で、先ほどまで話していたショートカットの活発そうな女の子に目配せした。

「私？ あっ、どうもはじめまして。私、沙石社週刊少年キック編集部で原信弘先生の担当を二年務めさせていただいております堀内瑠美と申します。あなたは三十代にして人事部長を務めていらっしゃる藤原裕貴さんですよ。お会いできて光栄です」

ちょっと不意を突かれたような声を出したが、あとは爽やかな笑顔で言った。藤原は表情を正して言った。

「いかにも私は沙石社人事部長の藤原裕貴と申す者です。しかし、お褒めいただいて申し訳ないのですが、三十代で人事部長など大したものではありません。私よりもはるかに若くして、私よりもはるかに重い責任を負っているビジネスマンもざらにいます。ですから、気負わずに気軽に声をかけてくだされば幸いです」

「そんな、ご謙遜なさらないでください。そういえば、藤原さんはTRPGのことが気になっておいででしたよね。TRPGというのは、少なくとも日本では、テーブルトークRPGの略称です。ちょっと説明しづらいのですが、プレイヤー一人ひとりがルールブックというものを参照して、キャラクターを作っていくんですね。で、一人ひとりが自分の造形したキャラクターを演じて物語形式でゲームを進めていくわけです。ゲームのジャッジはGM、たしかゲームマスターだったかな、がします。でもまあ、遊びですので、やったみたほうがよく分かるかと思います。面白いですよ」

ここまでのことをすらすらと説明した。藤原は口をすぼめながら聞いていた。話が終わったところで、低いうなり声を上げた。右手で自分の側頭部を掴んで、離した。

「なるほど、ありがとうございます。じゃあ、ちょっと私はお手洗いに失礼しますので、私のことは気にせず、佐藤さんとお話しててください」

申し訳なさそうにそう言った。

便所から戻ると、注文した料理が出てきていた。思った以上にボリュームがあったので、思わず瞬きをした。席を回って、人の話に耳を傾けることにした。

「『オレオト』の十話見た？ いやー、まさか田中君が——なことになるとは。あれは反則だ。でも——ちゃんは普段以上にかわいかった。春さん調子良かったんかな。前の作画がひどかった分ますます……」

「いやいや、アレだよ。ほら、前あったじゃん。田中君と……」

「あー、アレか。田中君と――君がね。いや、でも公式はギリギリそう見えないような描き方してると思うよ」

「ダメだろアレは。また――がわいてくるぞ」

「美香ちゃん。もうアレ終わった？ みせてくれない？ ありがとー。わっ、ちょっと美香ちゃん。防御薄すぎない？ ちょっとコレだとアトラクティブコマンドを入れてチャンスタイムに持ち込むしかないんじゃない。でも、エイドを大量買いしておけば少しは……」

「先週、会社の近くにおいしいラーメン屋できたんよ。明日の昼暇やから一緒に^け来えへん」

「うん、一緒に行こ」

「ほら、昨日、村上さんがさ。まった朝礼で、『注文取れたら三億円』って言ったんだよ。あの独特のリズムで。あの人絶妙な時期にぶっこんでくるよな。つまんねえからいい加減やめてくれてって思ってるんだけど……」

「それな」

藤原は自分の席に戻って、何とはなしに上を見上げて目を閉じた。ステーキを食べているうちに少しずつ頭が痛くなってきた。佐藤を呼び止めて、言った。

「佐藤、楽しいところ邪魔して申し訳ない。今日の仕事が多すぎたせいか頭が痛くなってきた。私はこの辺で上がろうと思う」

「そうですか。お大事にしてください。お代は一人二千元です」

そう言って、愛想笑いをした。照れながら二千元を手のひらの上にのせて、店を出た。

三月、藤原は両手をコートポケットに突っ込みながら、夜の街を歩いていた。沙石社が位置する通りはこの界隈の目抜き通りであり、渋谷に比せられるほどの若者の街であった。この日も色とりどりの街灯が通りを彩り、時々男女二人が歩いている様子が見られた。この頃は健康とは言えないが、かと言って病気とも言えない体調が続いていた。頻繁にコートのポケットから右手を出して額を覆った。数メートル前方に、佐藤瑠衣図によく似た茶髪ボブヘアの女の子と背の高い男が一緒に歩いているのが見えた。進行方向が同じため、二人の顔がよく分からないが、妙な胸騒ぎがしたため尾行してみることにした。二人は人気のない公園に入った。公園のベンチに座って、親しげに話をしだした。その後ろのベンチに腰をかけて、懐に入れておいた缶コーヒーを取り出して、飲み始めた。上目遣いに二人の様子を窺った。突然、男が後ろを振り向いた。

「あっ、藤原さんじゃないですか。ご無沙汰してます」

缶コーヒーが手袋をした右手をすり抜け、ベンチのへりに当たって大きな音を立てた。右足に落ちて、靴がひどく濡れた。茶髪ボブヘアの女の子も後ろを振り向いた。二人は確かに佐藤瑠衣図と武田誠であった。ベンチから立ち上がり、武田に一礼をした。それから、足元に転がっていた缶をベンチのすぐ横にあったゴミ箱に投げ入れた。シルクハットを目深にかぶり、足早にその場を去った。

「大丈夫ですか。藤原部長」

人事部副部長の村上優大が心配そうに声をかけ、背中をさすった。

「大丈夫。単なる二日酔いだ。君は気にせず仕事に戻りなさい」

エチケット袋の紐を結びながらそう言った。手汗がひどい。息苦しい。昼休みの時間は社員食堂に入った。かけうどん普通盛りを注文したら、従業員のおばさんに不思議がられた。

「藤原さん、今日は大盛りじゃないのねえ」

静かなテーブルに腰を降ろして、ゆっくりとうどんを食べた。その途中で、テレビのワイドショーの音声聞こえてきた。

「『恋』ってね。全然わかんねえの。全然。こんなにわからない関係ってそうないよ。儂いよ。どこか『愛』だとか『友情』だとかを決定的に拒む何かがある。でもさ、俺思うんだよ。何が恋を生むかなんて誰にもわからねえんだから、恋する人は絶対にあきらめちやいかんって」

それは今年、年間アルバム売上ランキング一位のあるロック歌手に対するインタビューだった。「恋」という言葉に反応して、食堂の奥にあるテレビ画面を注視した。

「^{すなわ}くち^{あや}らば

こんな『論語』の一節を思い出した。なんだか過去の自分が滑稽に思えてきて、クスクスと笑い出した。体調もウソのように良くなってきた。どんぶりを返却口に放り込んで、食堂脇の廊下に出た。佐藤瑠衣図に電話をかけた。

「もしもし、人事部長の藤原だ。佐藤だな」

「はい。週刊少年キック編集部佐藤です。藤原さんですか」

声は怖がっているようであった。自分にできる限り柔らかめの口調で話しかけた。

「いや、緊急の話ではないから忙しければ切ってくれて一向に構わない。その、何だ。すまんこんなお昼時に」

「いえいえ、とんでもありません」

「その、そうそうあれだ。あの、行きつけの料亭があるのだが、^{おかみ}その女将さんがたまには若い子と話したいわあ、っていつもうるさいんだよ。それに今日は桃の節句だろ。だからさ、君のような華のある子が料亭に来てくれれば、きっと女将さん喜んでくれると思うんだよ。そういうわけでき、大変申し訳ないんだけど、今夜特に予定がなければ私に付き合ってくれないか。いや、嫌だったら全く断ってくれて構わないんだよ」

「私ですか。いや、予定は空いてますけど、堀内先輩とかの方がいいんじゃないでしょうか。堀内先輩の方が私よりもよっぽどコミュ力高いですし」

あつけにとられたような声で言った。極力熱が入らないように言った。

「いや、是非とも君の力が必要なんだ」

「わかりました。じゃあ、藤原さん、お仕事頑張ってください」

「ありがとう。詳しいことは折り返し連絡する。佐藤も元気でな。では失礼」

佐藤は電話越しに慌てふためいているようだった。体の震えが止まらなかった。止まりそうになかった。

会社の最寄り駅前で、佐藤と待ち合わせた。二人は料亭に向けて歩き出したが、別段話題もなく黙ったままであった。藤原が指さした料亭はかなりの老舗のようで、木造の一戸建て。外壁は

黒ずんで今にもはがれそうであった。立て看板には『^{ひわだ}檜皮屋』と書かれていた。引き戸を開けると、元気な声の女性が話しかけてきた。

「あら、裕貴ちゃん、いらっしやい。久しぶりだわね。さあ、座って座って」

「どうもご無沙汰しております。ではお言葉に甘えて」

照れながらそう言って、女性の前のカウンター席に座った。佐藤も一礼して、隣に座った。軽く俯いて、じっとしていた。お茶を用意しながら、さらに言葉を続けた。

「そちらの方は……。珍しいわねえ。裕貴ちゃんが人を連れてくるなんて」

「こいつは会社の後輩です。ほら、去年の夏場、女将さんしきりにおっしやっていたでしょう。たまには若い子と話がしてみたいって」

「そんな、いいのに。でも、裕貴ちゃんも悪い子ねえ。若い子こんなところに引っ張り込んで。ホントはデートがしたいだけなんじゃないの」

「まさか」

笑い顔でそう言いつつ、右手で胸の動悸を抑えようとした。

「じゃあ、早速女将さん。俺は『檜皮屋セット』一つお願いします。佐藤はどうする。お品書きはここにあるぞ」

初めて顔を上げた。

「わ、私は藤原さんと同じやつをお願いします」

声はかなり強張っていた。女将は厨房に下がった。料理ができるまでの間、二人はお茶をすすりながら考え込んでいた。十分^{じっぶん}ぐらい言葉を交わさなかった。おもむろに佐藤が口を開いた。

「ちょっとおそくないですか」

笑みを浮かべながら、佐藤の目を見て言う。

「そうだねえ。ここは女将さんとお弟子さんの二人だけで切り盛りしてるからね。確か七代目だったかな。ご主人が一昨年亡くなられて。跡継ぎがまだ見つかっていないらしい。いやあ、もう全く女将さんは女丈夫だよ」

佐藤は真剣に聞いているようだった。再び話題が尽きて、二人は黙り込んでしまった。藤原の湯飲みが尽きたところで、ようやく女将が料理を持ってきた。

「お二人とも何もお話しなさってないじゃないの。お嬢さん」

「はい」

「そんなに緊張しなくていいのよ。全部そこにいるエロおやじのせいだから。まったく何のために連れ込んだんだか」

皿を並べながらはきはきしゃべった。

「ひどいや女将さん」

酒も飲んでいないのに、顔を真っ赤にして言った。

勝手に若い女の子を見知らぬ料亭に連れ込んでおきながら、何を話すか全く考えていなかった。刺身を口に含みながら左手で頭を抱えた。横目で見ると、佐藤は静かに食事をとっているようだった。動きがぎこちない。頼みの綱だった女将も他のお客の対応に行ってしまった。

「さ、佐藤。仕事の調子はどうだ」

何でもない言葉のはずなのに、イントネーションがおかしくなる。

「はい、大丈夫です。今のところ納期にも遅れていませんし、堀内先輩からもいよいよ作家先生のもとで働けるような話を聞いています」

「ふーん。誰のところに配属になりそうなんだ」

調子を取り戻したように軽快にしゃべった。

「森孝之先生です」

「彼か。そうか彼なのか」

思わず大きな声を出してしまった。

「ご存じなんですか」

「ご存じも何も、私は二十代のころ君のいるキック編集部の編集者で、森先生の担当編集だったからね。うーん。彼の生態は独特だから気を付けたほうがいい。そうだな。彼の話をしてもいいかな」

「本当ですか。ぜひお願いします」

目を輝かせているように見えた。満面の笑みを浮かべた。興奮気味に話した。

「そうなるよ、うん。これは今でも意味が分からないと思っている話なんだけどな、彼は数いるキックのマンガ家の中でも遅筆で有名で、締め切りなんか全く守らなかった。ある号の納期がなぜか一日前倒しになって、私は真夜中に彼の原稿を取りに行く羽目になった。ところが、こんな時に限って彼は自宅にいない。これには頭をかかえたよ。一時間ぐらいアパートの扉に背中を預けて待っていた。睡魔に耐え切れなくなって崩れ落ちる寸前に、彼はようやく帰ってきた。どこに行ったのか聞いてみたんさ。呆れたよ。どうやら彼はコンビニに、から揚げを買いに行っていたらしい。結局売ってなかったから店員さんに新しく揚げてもらったんだってさ。もちろん原稿はちゃんともらった。あとはそうだな。こんな話もある。あの日は……」

こんな調子で、二十分ぐらい自分が編集をやっていた頃の^{とうとう}ことを滔々と話し続けた。女将が戻ってきたところで、気恥ずかしくなってお茶をすすった。

「裕貴ちゃん。あなたばかりしゃべってないで、佐藤さんにご趣味でも聞いてみたらどうですか」

「いやあ、全くその通りです。女将さんには敵わない。佐藤、趣味は何だ」

藤原はすっかり上機嫌になって言った。佐藤は明らかに困ったような顔をした。

「えっと、まあ、特に趣味と呼べるようなものはないです。休みの日はずっとアニメ見ってますし」

「いやあ、趣味なんか全然なくていいんだよ。むしろない方がいいぐらい」

変な調子で声を張り上げてしまった。味噌汁をずっとかき回しながらまた言った。

「ええとなあ。アニメか。きっと漫画のことだな。佐藤はどんなアニメを見るんだ。私はガキの頃、『鉄板二代目』が大好きだったが。あれは名作だ。あの漫画が料理をエンターテインメントにしたと言っても過言ではない。そうだな。佐藤の代なら、『SAMURAI』か『カラー』あたりか」

乱れた口調だった。佐藤は恥ずかしそうに答えた。

「『地球滅亡の日に捧げる鎮魂歌』です」

息を吐いて、瞬きをした。思わず女将に聞いてみた。

「聞いたことあるかい」

「あらやだ、裕貴ちゃん。最近若い子の中で大流行りしているアニメじゃないの。あなたも業界人ならそのぐらいのことは知っておかなきゃならないんじゃないの」

さも当然のように言い放った。首を細かく左右に振った。

「佐藤、悪かったな。うーんと。それはどういう漫画なんだ」

「そうですね。まず主人公は夢の中で何者かに世界の危機を告げられます。でも世界を救うためには、この世界のどこかにいる特別な力をもった六人の人物を探し出して、仲間にしなければなりません。で、主人公は右も左もわからないまま旅に出て奮闘する。そういうアニメです」

「ほうほうほうほう。なるほど」

首を小刻みに上下に振った。それから慎重に次の質問をした。

「そういえば、ずっと前に聞きそびれたことなのだが、確か佐藤は『グリークアドベンチャー』なるゲームが好きだったと思うが」

「はい」

口調が思いのほか快活なように聞こえた。

「私も少し調べてみた。これは極端にデフォルメ化された古代ギリシャ史上の将軍が軍を編成して、エーゲ海の統一を目指すゲームだね。正直見た目がげげげげし過ぎて、ちゃんと見たわけではないのだが。佐藤はなんで『グリークアドベンチャー』が好きなんだ」

すると、人が変わったように熱心に語り始めた。

「キャラクターがめちゃくちゃ好きなんです。トロイア戦争編にヘレネっていう王妃がいるんですけどね。そのヘレネがめちゃくちゃかわいいんです。もうトロイア戦争編は終わっちゃったんですけど、もう一度あの時に戻りたいぐらいです。ヘレネと言えば、トロイアの王子パリス様もイケメンで。もうパリヘレのカップなんて好きすぎて、どうにかなっちゃいそうです。来週も即売会に行ってパリヘレのアンソロ買う予定なんです。今はペルシア戦争編に入っていて、堀内先輩と白熱したバトルを繰り広げているところです。でも今はちょっと重装歩兵が足りないですかね。SPも落ちてますし、このままだと詰んじゃうかなあって思います。あと、アニメも好きですね。もちろん『鎮魂歌』もめちゃくちゃ好きですよ。でも『グリアド』はそれ以上に好きなんです。もう毎週パリヘレ来ないかなあ、来ないかなあって気持ちです。それから……」

努めて目を見ながら、頷いた。佐藤の話も藤原に負けず劣らず続いた。佐藤は話の途中で大きなあくびをした。女将が口をはさんだ。

「裕貴ちゃん。佐藤さんもお疲れのようですし、もうお上がりになった方がいいのでは」

腕時計を見ると、二十二時を回っていた。

「わかったよ、女将さん。今日もありがとう」

あくび声で言った。佐藤は藤原の肩に頭を預けて、寝息を立てていた。佐藤の肩を軽くたたきながら言った。

「佐藤、もう行こうか。眠いだろう。私も眠くなっちゃったよ。勘定は全部私でもつから安心

してくれ」

目を閉じながら頷いた。勘定をすませた後、佐藤の肩を支えながら、店外に出た。

あまりの寒さに、コートをきつく体に巻き付けた。起きているのかいないのかよく分からない足取りに合わせて、ゆっくりと歩いた。白い息が時々視界を邪魔する。空気は澄んでいる。ビルの間隙から星空が見える。

「佐藤、君はアパート暮らしか」

「はい」

「どこに住んでいるんだ」

「蛟龍駅の近くです」

「私が送ろう。案内してくれ。何ならタクシーでも呼ぼうか」

「いえ大丈夫です。歩きます」

そんな一通りの問答をした後は、人気のない都会の夜道を歩き続けた。黙りこくって。

佐藤の案内によると、アパートまであと五分というところまで来た。息遣いが荒くなってきた。おもむろに口を開き、言葉ともつかぬ声を出した後、真面目そうに言った。

「佐藤、少し休むか。今日は星がきれいだ」

藤原に促されるままに、バス停のベンチに座った。コートの内ポケットにたまたま栄養食品が入っていたので、佐藤にあげた。夜空を見上げた。

「オリオン座か。佐藤、ごらんよ。オリオン座だ。ふたご座も見える。おうし座もだ。でもな。昔の人はよくもまあこんなくだらないものを考えたもんだよ。目をじっとこらさないと見えない星まで無理矢理つなげて、何かに例えようとするんだ。その並び方もどこかいびつで、言われないとそれだと気づかない代物だ。でもね。何か^{なん}ね。何か美しいんだ。何なんだろうね。でも、まあ、その、何だ。要は.....、私は、君を、好んでいる」

絞って、落とすように言った。短く、声を出して笑った。

「何ですか、それ。面白いですね。おかげで目も覚めましたよ」

笑いをこらえながら言った。不満げな口調で応えた。

「そんなつもりで言ったのではないが」

しばらくして、自分の発言を思い出して、藤原も笑い出した。二人は顔を見合して、また二人で笑った。

いよいよ別れる段になった。アパートの近くで佐藤が手を振りながら別れを告げると、藤原は突発的に言った。

「佐藤、ちょっとだけ待ってくれ」

佐藤のすぐ近くまでスタスタと、行進か何かのように近づいて行った。何の前触れもなく、抱き寄せ、抱きかかえ、抱きしめた。拒否する体力がなかったのかされるがままであった。数十秒間、抱きしめ続けた。離して緊張した面持ちでたどたどしく言う。

「私は西洋かぶれだからこんなこともできてしまうんだ。すまなかったな。今日はよく休んで、明日も仕事頑張れ」

佐藤に背を向けて、早足でその場を去ってしまった。佐藤は茫然とその場に立っていた。

数日後、佐藤瑠衣図が正式にマンガ家森孝之の担当編集になることが決まった。記念に佐藤をまた『檜皮屋』に招待しようかと考えた。今度は森先生と一緒に。同僚にカップのコーヒーを渡ししながら、微笑んだ。

仕事終わりに、一人の若者が人事部を訪れた。感じの良いその男は藤原に恭しく敬礼をした。その顔に一切笑みはなく、極めて冷静だった。藤原は朗らかにその男に話しかけた。

「武田君じゃないか。人事部に来るとは珍しい。佐藤瑠衣図に編集作業のイロハを教えてくれたそうじゃないか。支えあう人材。素晴らしい。ところで今日は編集長にまた面倒な書類でも任されたか」

「あなたは佐藤の保護者にでもなったのですか」

辛辣な口調で言った。

「そういう風に勘違いされても仕方がないな」

そう答えて、笑った。

「今日は藤原部長にご覧になって頂きたいものがあります」

武田はスーツのポケットからスマートフォンを取り出した。右手でそれを制止して言った。

「社内での携帯電話の使用は禁止されている。でも、まあ、今は勤務時間外だから別によかろう」

「いいのですね」

そう言って、唐突にスマートフォンの画面を藤原の眼前に突き付けた。その顔から笑顔が消え、青ざめた。スマートフォンを払いのけた。先ほどとは打って変わって、驚嘆とも叱責ともとれぬ調子で叫んだ。

「た、武田君。何だねその写真は」

「出版業界四天王の一角として名高い沙石社の人事部長ともあろうお方が十歳以上も年の離れた若手社員と夜デートですか。笑わせますね」

皮肉たっぷりに言った。その写真はまさに藤原裕貴が佐藤瑠衣図に抱きついている写真であった。背景が真っ暗闇だけに、藤原の恍惚とした表情がますます目立っている。

「これだけではありませんよ」

スマートフォンの画面をスライドさせると、藤原がバス停のベンチで佐藤の肩をたたいている様子を正面から撮った写真、二人が寄り添って歩いている様子を高台から撮った写真などが次々と出てきた。本能的にスマートフォンの画面をのぞき込んだ。武田はスマートフォンをスリープモードにして、再びポケットにしまった。

「さて、僕はこれをネットに流すことができます。週刊誌に売り飛ばすことも。そうしたら、何が起こりますかねえ。藤原部長ならわかるはずですよ」

武田はそのままの口調で言った。その後、数十秒間互いに黙っていた。重い口を開いたのは藤原だ。

「君の望みは何だ。何でこんなことをする」

「藤原部長、あなたにはこの会社を辞めて頂きたいと考えています。後者の質問には答えることができません。僕自身よくわかっていないんです。ただ、部長には今後一生、佐藤瑠衣図と接触をもってほしくないとは思いますが」

早口に言った。藤原は口を閉じ、しばらく固まっていた。口を開いた時には、長くため息をついた。その調子にはどこか物悲しいものがあった。仕切り直すようになり声をあげた。背筋を伸ばして、武田と向かい合った。目を見て、はっきりと言った。

「武田君。わかった。私は会社を辞める。それでいいのか」

「部長、ご決断に感謝します。では、明日の仕事終りに僕に退職届を見せてください。この辺で僕は失礼します」

その言葉はあたかも最大の敬意がこもっているように聞こえた。帰り際に、最敬礼をして、人事部のドアを閉めた。

人事部の名札掛けから、藤原裕貴の名札が消えた。後任には副部長から繰り上がって、村上優大がついた。沙石社創立以来、異例の大出世を遂げた人事部長藤原裕貴の突然の辞任は、大ニュースとなって社内のみならず、出版業界全体を駆け巡った。佐藤は社員食堂でこんな話を小耳にはさんだ。

「惜しかったなあ。噂には聞いていたが、実際に会ったことはなかった」

「あのはずっと人事部に引きこもっていたからね。俺、たまたまだけどあの人がアドバイスをもらったことがあるんだ。いやあ、目からウロコが落ちたよ。やっぱあの人は天才だ」

社員食堂から飛び出して、仕事に戻ろうとした。エレベーターの中で武田誠と鉢合わせた。

「瑠衣図ちゃん、おつかれ。涙でてるよ。何かあったの」

優しく話しかけた。何も答えなかった。袖で急いで涙を拭^{ぬぐ}った。エレベーターを降りて、佐藤が武田の前を歩いている時に、振り向いて言った。

「武田君、これからも私の相談に乗ってくれるかな」

「もちろん」

武田は軽く微笑んだ。

沙石社で藤原裕貴の行方を知る者は誰もいなかった。しかし、敏腕ドキュメンタリー記者を自負する私はそんなことであきらめる気など毛頭なくありとあらゆるツテやコネを活用して、徹底的に行方を追った。数カ月を費やして、ようやく地方の紫^{むらさき}出版という小出版社に再就職していたことを突き止めた。残念ながら本人の取材は叶わなかったが、社員の一人からこんな話を聞いた。

冬の寒い日の昼休みにその社員は会社近くのコンビニの飲食コーナーで、藤原が一人でアイスコーヒーを飲んでいるのを見かけたようだ。声をかけたら、こう応えたという。

「至福の時だ。邪魔しないでくれ」

一文無し (三ツ葉 葵)

一文無し
三ツ葉 葵

引き摺る
今日の朝飯

凍みる
手足の感覚

見上げる
ラジヲの音

灯る
山の影

口遊ぶ
午前五時

ど真ん中を往き偉くなった気分の愚か者

一般作品集

白の忘却（文部 蘭）

白の忘却

文部 蘭

雪解け水に覆われたアスファルトに反射する日光が、私の頬を照らす。革靴の音が軽快に鳴るのを確かめながら、私は目的地を目指す。通りを吹き抜ける風がいつもより冷たいが、晴れ空が広がるせいか清々しさすら覚える。

目的地に到着する。一見すると西洋風の建築物だが、よく見ると和の要素が随所に散りばめられており、明治時代の館のような雰囲気をも併せ持っている。濃いブラウン一色によって塗り固められたその壁は、ただならぬ歴史を内包しているかのような気迫に満ちていた。

「お待ちしておりました」

無言で立ち尽くしていた私の目の前に、紳士服を纏った背の高い老人が姿を現す。おそらく、主の執事か何かだろう。

「どうぞ、中へお入りください」

そう言って彼は、片手で玄関を指し示した。

建物の中に入ると天井の高い、広々とした空間が眼前にあった。インド調の絨毯が私を迎え入れる。

執事の老人に促され、とある一室のドアを開く。不意に緊張が走り、私は生唾を飲み込む。が、耳に入ってきたのは、そんな緊張感すら掻き消してしまう程予想もしないものだった。

「やあ。君は、バニラが好きかい？」

私の目の前にいたのは、端正な顔立ちの男だった。全身純白のスーツを身につけ、黒い椅子に腰かけている。

「あ、あの。わたくし……」

「ああ、いいから、いいから。書類で君のことは知ってるよ。写真で見た通り、男前だねえ。俺はこの事務所の所長、雲川。それよりさ、君はバニラが好きかい？」

「まあ。嫌いじゃないですけど」

「そっかあ。そりゃあ良かった。じゃあ次の質問だ。君はバニラを甘いと思うかい？」

雲川と名乗ったその男の不可解な質問に、私は疑念を抱いたが、素直に述べる。

「私は基本バニラを甘いものと知覚していますが、ごく稀に苦味を感じる時があります。それがバニラを食べ続けたことによる舌の麻痺によるのか、甘味に味覚が支配され過ぎた結果によるものなのか、自分では理解できない、反動の苦味が到来する瞬間が私にはありますね」

それを聞いた雲川はどこか嬉しそうだった。私の言い分に納得し、笑みを浮かべている。

「君に内定をあげといて本当に良かったよ。今の答えを聞いて、いつそうそう思ったよ」

「どういうことですか？」

「簡単に言うとさ、柔軟な考え方を持ってるってことだよ。甘味の中に苦味を見出す、ひいては表に裏を感じとれるということ。君がこれから行う仕事は、まさにそういった類のものだよ」

雲川は立ち上がり、窓の外を見つめる。その眼光は透明感に満ちており、外からこぼれる日光に照らされた景色を反射している。

私は雲川に問いかける。

「あの、私はまだ仕事の内容を詳しくは聞かされていないのですが」

雲川は静かに笑う。

「まあ、そう焦るなよ。おっと、君の同僚がやって来る時間だ」

彼がそう言うと、不意にドアが開いた。

そこにいたのは、茶色く艶のある髪をした女性だった。

「お疲れ様です、所長」

彼女は丁寧に会釈をし、雲川に笑顔を向ける。

「お疲れ、櫻木君。こちらは、新入りさんだ」

雲川が私を紹介すると、櫻木と呼ばれたその女性は、よろしくと私に滑舌良く告げた。雲川が戸惑いを見せる私に歩み寄る。

「彼女は、俺の秘書の櫻木君だ。非常に優秀でね、俺の右腕的存在だ」

「あの、雲川所長」私は動揺した。

「そうだったね、君は全てが初見だから混乱するよね。今から俺たちがやってる仕事についてゆっくりと説明するよ。櫻木君」

櫻木は雲川に促されると、二杯のコーヒーを淹れ、テーブルに置いた。私はテーブルの目の前にあるソファに腰を下ろし、姿勢を正す。雲川もソファに腰を下ろしてコーヒーを一口飲み干すと、ゆっくりと口を開いた。

雲川は語る。

「俺たちは、自殺を企てている者を説得し、それを未然に防ぐ仕事をしている。自殺は今や大きな社会問題となっている。他からの暴力・虐待、いじめなどの社会的排除、過労、借金、過度の自己嫌悪、愛する者の不倫。それぞれ理由は違えど、実生活において極度の挫折を経験した者は死を望むことが少なくない。俺たちはその社会の闇にメスを入れ、そういった人々を矯正させている」

淡々と話す雲川の瞳がさっきまでとは異なり、真剣なものだったので私は思わず尻込みする。

「ちょっといいですか。私は業務内容を一切知らされずにこの事務所に配属となったのですが、何で私とその役目を？」

「それは、俺が君の力を必要だと思ったからだ。元警視庁の刑事だった君の力をさ」

雲川は話しながら、どこか楽しげだった。

「まあ、この仕事も段々と厄介になってきてさ。そろそろ新しい潤滑油を入れてやらないと。それだけ俺たちの存在も以前より大掛かりになっちゃってさ、俺たちが外部から何て呼ばれるようになったか、分かる？」

雲川に促され、私は考えを巡らせてみるが、答えは見つからなかった。

「名を『ホワイトスーサイダー』」雲川が重たい声を放つ。

「自殺志願者の自殺欲そのものを自殺させることに由来するんだと。それで、正義の自殺屋ってわけで、『ホワイトスーサイダー』さ」

雲川はコーヒーを一口、喉に通す。

「まあ、まだ君は周辺情報を知らないだろうから、俺の口からちゃんと説明しなきゃいけない。そうだな、まずは一番面倒なことから話すか」

雲川は硬い表情を微塵も崩さず、ゆっくりと呼吸を整える。これから話すことの重大さが理解できる。

「俺たちは自殺志願者の矯正を主目的とする。だが、その人たちの生活状況を改善したり、その他周辺に関する環境を変えたりすることは許されていない。つまり、国から許可が下りている業務内容は心理的なものだけにとどまっている」

「物理的に影響を与える事まではできない、ということですか？」

「ああ、そうだ。それも個人の意思を尊重してのことだ。要するに、俺たちは自殺志願者に対して私情を挟む余地がない。ただ、それをいいことにして俺たちを脅かす存在が出てきた。櫻木君」

はい、と櫻木は短く返事をし、バッグからタブレットを取り出す。少しの間があったかと思うと、そのタブレットを私の眼前に置いた。

「これは？」

画面を見ると、赤と黒を基調としたウェブページだった。中央に蜘蛛のイラスト、その下にはIDとパスワードを入力する空欄がある。どうやら、不法サイトのログイン画面らしかった。

櫻木が告げる。「このサイトは、いわゆる自殺サイトです」

「自殺サイト？」

言葉が出なかった。今までにそういった類のものをテレビドラマなどで見聞きしたことはあったが、まさか現実に存在していたとは思わなかった。警視庁にいた頃にさえ、目にしたことなど一度も無かったはずだ。

「雲川所長、これは？」

「これは、ある無法集団が運営している自殺サイトだ。やたらと自殺を誘発させるような事ばかり書いてある。加えて、サイトユーザーとネットを介してチャットをし、次々に自殺を勧めてるらしい」

「そんな無法集団が存在するんですか」

「ああ。ネット上では『オニグモ』と呼ばれている」

「オニグモ……。そいつらの事はどこまで？」

「俺たちが知り得ている事は少ない。ただ、自殺による甚大な被害をもたらしているのは間違いない。それに、オニグモの内部構成も今までの調査で把握してる」

雲川はカップに残るコーヒーを飲み干す。

「オニグモのリーダーは薔薇崎という男だ。赤髪が特徴で、暴力団とのつても持つ。そしてその下に二人の構成員がいる。一人は沼田という若い男で、指定薬物の常習者。もう一人は三國という長髪の女性だ。この三人に関しては顔写真がサイト内で公開され、組織の上位層ということ

もあって、多くのサイトユーザーからは神格化されている」

私はサイトにアップされている三枚の画像に目を通す。いずれも悪辣な表情をしているが、薔薇崎という男だけは異質な陰気に満ちているように見えた。

「構成員はその三人だけですか」

「いや、その下にさらに十数人の人間がいるらしいが、オニグモの中心に腰を据えているのはこの三人だ。しかし、現在の法律では奴らを裁くことはできない。自殺に利する情報を与えるが、それを強要することは決してない。自殺幫助罪に当たらない、ギリギリのラインの上で奴らは活動している」

「まさにホワイトスーサイダーの対極ってわけか」私は軽い頭痛を覚え、気分が悪くなる。混沌とした世の中に対する、一種の拒絶反応かもしれなかった。

私は懐疑的だった。オニグモの動機は一体何なのか。他人に自殺を勧めることが奴らにとって何の利益になるのか。ひよっとすると、世の中の真っ黒な濁流に身を奪われ、苦悩に満ちる人々に対し、自殺という逃げ道を示すことで救済したつもりになっているのかもしれない。だとしたら、それは大きな誤解であり幻想だ。

唐突に電話が鳴る。事務所の電話だ。櫻木が対応する。

「お電話ありがとうございます。雲川自殺対策事務所です」

「ま、雅紀さんを……助けて」女性の声だった。

「ご依頼でしょうか？」

「お願い……早く、早くしないと、雅紀さんが」

「落ち着いてください。我々はあなたの味方です。ご依頼でしたら、落ち着いて話をさせていただきますか？」

「あ……はい。取り乱してすみません。実は夫が自殺するつもりみたいで」

「動機はご存知ですか？」

「わかりません。最近まではずっと元気だったのに。今朝、急に置手紙を残して家を出て行っちゃって。そこに自殺することが書かれていたんです」

「そのほかには何か記されていませんか？」

「そのほかですか……。特に何も。あ、ただ……」

「ただ？」

「雅紀さんの手帳がテーブルの上であって。そこにURLがメモされてあったので、検索してみたんです。そしたら、自殺サイト『オニグモ』って書いてあって」

不穏な空気が部屋中に満ちる。私はオニグモという単語により、事の重大さをさらに実感する。重力が普段の何倍にも感じられた。

櫻木は依頼主との会話を続ける。

「お手数ですが、旦那様の本名をお聞きしてもよろしいでしょうか」

「はい。神川雅紀です。私は妻の雪美といいます」

その瞬間、私の全身から力が抜けた。

何なんだ、この茶番は。誰が用意した？

櫻木と依頼主の会話が電話越しに続いているが、私の耳には全く入ってこない。あまりの驚愕に聴覚が正常に機能しない。突然、何者かに両手で耳を塞がれた気分だった。

「どうした、そんな青い顔して。まあ、初めての仕事だから緊張するのは分かるけど」雲川が私に言う。

「違うんです」

「違うって、何が？」

「神川雅紀は……私の弟なんです」

「それは本当なのか？」雲川が目を丸くする。

「はい……。実は弟とは半年間、連絡を取っていなくて。最近どうしてるのか、気になったことはあったんですが。まさか、自殺を考えてたなんて」

あいつが自殺する理由なんてない。私は咄嗟にそう思った。あいつは学生時代から美術の才能に恵まれ、藝大卒業後は画家としての道を選んだ。その時あいつは自分の長年の夢が叶った、と大層満足げだったのだ。そして結婚をし、妻からも支えられていた。とても自殺を選択する者の有様とは思えない。

櫻木は雪美からさらに情報を聞き出そうと努める。

「オニグモのサイトを訪れたのですよね。そこには何か、旦那様について書かれていましたか？」

数秒の沈黙の後、受話器から声が洩れる。

「夫はオニグモの薔薇崎という人とメールでやり取りをしていたみたいで。その記録には明日の正午、S Bビルの地下倉庫で自殺を行う旨が綴られていて」

翌日の正午、私は雲川、櫻木と共にS Bビルへと向かった。そしてエレベーターを使い、地下倉庫へと急ぐ。

地下倉庫は蛍光灯が数本ある程度で薄暗かった。ちょうど駐車場ほどの広さで、木材などが壁に立てかけてある程度の空虚な場所だった。煙草の煙のような乾いた匂いが鼻をつく。

雅紀はその中央にいた。天井から降りている鉄骨にロープを通しているらしく、今にも首吊り自殺を断行しようと、梯子を立てて作業をしている。

彼の顔は悲壮に満ちていた。血の気が無く、虚ろな瞳だ。だが、画家として臨終の時を迎えたかっただろう。茶色のトレンチコートを身に纏い、帽子を深く被っている。せめて自らがのめり込み、愛した芸術に相応しい姿で末期に臨みたいと考えたようだ。その様はまるで大正ロマンを具現化したようなものだった。

「雅紀！」私は叫んだ。倉庫中に声が反響する。

「に……兄さん？」雅紀は驚き、作業する手を止めた。

「いいか、雅紀。俺は本当はこんな事を言いたくはないが、言わせてもらうぞ。ふざけるな！」

雅紀は黙ったままだった。立ち尽くし、呆然と私を見つめる。

「雅紀、お前に何があったか俺は知らない。だがな、自分の命を簡単に捨てるようなことは許せない。自殺するなんて、兄として恥だ！」

「兄さんは……何も知らないだろ！」

「何だと？」実の弟に対し私はとびかかりそうになったが、雲川が片手で制止する。彼は私に目配せすると雅紀に向き直る。

「君が神川雅紀だな。私はホワイトスーサイダーの雲川だ。君を自殺から救いたいんだ。どうして自殺しようと思ったのか、話を聞かせてくれないか」

雅紀は一瞬ためらった後、梯子を下りて私たちの方へ来た。

「はあ。まさか死ぬ時までうまくいかないなんてな」雅紀はため息をつき、帽子を被り直す。

「正直、今は誰とも喋りたくないんですが、死ぬ前に誰かに俺の人生を語るのも悪くないかもな。いいでしょう、手短かに話します」

異様な空気が辺りを包み込んでいた。地下ということもあり、異常に室温が低い。少しずつ体温が奪われていくのを感じた。

雅紀はゆっくりと口を開く。

「俺は藝大を卒業した後、画家としての道を選んだ。小さい頃からの夢だったし、そりゃあ嬉しかった。俺の人生、予定通りだなんて思い上がってた。けれど、現実とは次々と俺を疲弊させていった。妻こそいたけれど、もちろん画家だけでは食っていけない。俺はバイトを三つも掛け持ちしながら、画家の活動を続けてた。けなされようと、馬鹿にされようと、自分は自分を信じてたし。でも、俺はいつまでたっても画家としての地位を確立することなんてできなかった。作品展に出品しても入賞すらしない。個展を自費で開いても客ひとり来ない。そんな状況が嫌だったんだ。もう、自分が生きる価値なんてないんじゃないかってそう思えてきて」

「それが自殺の動機かい？」雲川が冷静に尋ねる。

「最初はそれだけだった。けれどその後にあの人とネットで知り合ったんだ」

「あの人？」

「薔薇崎っていう人だ。俺は薔薇崎に救われた。行き場を失くした闇をあの方は引き受けてくれた。そして、この世のありとあらゆる理不尽から俺を解放してくれる選択肢を、あの方は教えてくれた！」

「それが、自殺ってわけか」雲川は呆れたように、後頭部を搔く。

私は自らの胸の内で、沸々とマグマのようなものがせり上がってくるのを認めた。それは、自殺を行おうとした実の弟に対する怒りというよりは、その弟にここまで低俗な倫理を植え付けた、薔薇崎という男に対する怒りだった。

突然、雲川の低い声が響いた。「君は、生きてるか？」

「は？」雅紀は言葉を詰まらせる。

「君にもう一度聞く。君は、今生きてるか？ 生きていたとしたら、何をしている時に、生きていると感じる？」

雅紀は不安定な笑みを浮かべる。

「なんだよ、それ。生きてるに決まってるだろ。どういう時に、それを感じるかって言われれば.....。そりゃあ、宇宙人のこと、考えてる時だ！」

あまりにもこの状況に相応しくない単語が宙へと投げ出されたためか、一瞬の沈黙が下りる。息を呑むほどの裁判の最中に、突如として大道芸が始まったみたいだ、と私はそんなイメージを思い浮かべる。

「宇宙人って、あの宇宙人？」雲川はそう言って、右手を喉元にあてる仕草をし、ワレワレは宇宙人だ、と今にも言い出しそうな恰好をする。

「そうさ、その宇宙人だ。俺は昔から、空想するのが好きなんだ。ああでもない、こうでもないって、普通の人からしてみれば下らないことを考えるのがさ。答えのない議論って、魅力的だし」

雅紀は語り続ける。

「やっぱりさ、真面目なことばかりじゃあ、つまらないだろ。人生って。無駄なことがあって、下らない事で本気になって。そういうのも必要でしょ？」

雅紀の表情には活気が満ち始めていた。ついさっきまで、自殺を企てていた者の顔ではない。そうか、これが雲川たちホワイトスーサイダーの巧みな話術か、と思い至った。

「いい顔だ。それが君の本来の姿だよ」

雲川は諭すように、雅紀に笑顔を向けた。雅紀はふっと我に返り、前言撤回を主張するかのようになり悪そうにしている。

「それでいい」雲川は雅紀に歩み寄る。

「君は、それでいいんだ。空想し続けていけばいいんだ。.....だから、自殺なんて難しいこと考えるのはよそうよ」

雅紀は唇を噛みしめる。それが、自殺を止められたばつの悪さを表すのか、照れ隠しなのか、私には分からなかった。ただ、雅紀がすでに自殺欲を喪失しきっているのは、明らかだった。

「ありがとう、兄さん。俺の負けだ」

結局、雅紀は自殺を止められた。というよりは、雲川たちの説得によって正気を取り戻し、自らの意思で生きる道を選んだ。私は内心ほっとし、安堵のため息をつく。

その時だった。

地下倉庫に十数人の黒装束の男たちが姿を現した。彼らは各々が金属バットを手にしており、即座に私たちを取り囲んだ。

「何なんだ、こいつらは？」

私たちは警戒した。円を描くようにして立ち並ぶ彼らは、不敵な笑みを浮かべ、首や手の指の関節で音を鳴らし、鋭い視線を私たちに向けている。

「はっ、見逃してください……今回は」雅紀が男たちに懇願した。その内の一人が雅紀に歩み寄り、胸ぐらを思い切り掴む。

「今さら、何言ってやがる」

その男は、柔道の背負い投げをするかのごとく、雅紀を勢いよく肩に担いだかと思うと、大きな奇声を発しながら雅紀を壁の方へ投げ飛ばした。

雅紀は一瞬、宙に全身が浮いたが、すぐに壁に衝突して気絶したらしく、その場に倒れ込んだ。それと同時に、二つの人影が彼の目の前に姿を現す。

「なあんだ、今回はスムーズに行かねえなあ」

「ホント、凶々しい人たち」

男女二人組だった。私は彼らの顔に見覚えがあった。男の方は、無造作な茶髪パーマを人差し指でいじくり、生気の欠片もない瞳をこちらに向けている。女は透き通った黒の長髪で、妖艶とも言える表情をしていた。

急に、雲川が震えた声で断定する。「オニグモの、沼田と三國だ」

「あんたらさ、邪魔くさいんだよねえ。いちいち俺らの活動を妨害してさ」

沼田が茶髪をいじりながら言った。

「お前たちオニグモがやっている事は、反社会的だろ。それを俺達が阻止しようとするのは当然のことだ」雲川が応える。

「そうそう、それぞれ。それが気に食わねえって言ってんだよ、正義なんか気取りやがって。まあいい、コイツは預からせてもらうぜ」

沼田はそう言い残し、倒れていた雅紀を肩に担ぎ、地下倉庫をあとにした。

私は何が起きているのか、さっぱり理解できずにいた。ただ呆然とし、頭が真っ白になる。

「追え！」不意に雲川が私に向かって叫んだ。「兄貴なんだろ、追え！」

「しかし、こいつらは」

私は周囲の黒装束の男たち、そして三國の存在を警戒する。だが、雲川は躊躇うことなく、助けに行け、と私に指示した。

「ここは俺と櫻木に任せろ。お前はとにかく弟を助けろ、いいな！ これは命令だ」雲川は語調を強めた。

私は無言で頷き、雲川と櫻木が相手達と格闘を繰り広げる中、その隙間を縫うようにして走り、地下倉庫の外に出た。

ビルの玄関から出ると、そこには黒のセダンの荷台に雅紀を押し込む、沼田の姿があった。彼は手際よく作業をし、運転席へと身体を滑り込ませる。

「待て！ 止まれ！」

私は喉を絞り、ありったけの音量で叫んだが、沼田はそれを無視して車を急発進させた。やがて雅紀を乗せた車は、後から懸命に追いかける私を振りほどくように、スピードをぐんぐんと上げて前進し、視界から姿を消した。

私はとある工場の廃材置き場にいた。あの後、しばらく思考が停止しかけたが、次第に冷静さを取り戻し、事態を打開する方法がないか、考えを巡らせた。その時、私は手にしたスマホのGPS機能の事を思い出し、即座に雅紀の居場所を特定した。その場所というのが、ここだった。

鼻をつく腐臭が気にかかる。それが散乱する錆びれた鉄くずや年季の入ったペンキ缶によるものなのか、床を覆っている埃によるものなのかどうかは分からない。ただ一つ分かっているのは、私の目の前には沼田の姿があるということだけだった。

私は詰問する。「雅紀はどこだ」

沼田は下品な笑い声をあげ、背後の鉄の扉を指さした。

「お前の弟はあの扉の奥だ。安心しろ、まだ呼吸は止めてねえ」

私は沼田に殴りかかった。彼は私の殴打をかわし、蹴りを入れてきた。私はその衝撃と痛みに耐え、沼田の両肩をがっちりと掴む。そして勢いのままに、思い切り頭突きをした。

軽い脳震盪を起こしたかのように体が揺れる沼田に対し、私は強い蹴りを一発放つ。悲鳴と共に沼田は後方へ蹴飛ばされ、鉄くずの山に突っ込んだ。ベーキングパウダーのように、周囲に埃が舞う。

「てめえ、調子に乗りやがって……」

沼田は身体を自力で起こし、私めがけて突進してきた。うらあ、と怒声を発しながら不規則に拳を振るう。そのうちの何発かが、私の顔面に直撃し、痣や傷を形成していく。必死の思いで私は抵抗するが、全てを防ぎきることはできず、防戦一方の状態が続く。

だがそこで、不可解な事が起きた。沼田が拳を振るうのを突然止め、悶え苦しむように頭を抱え、その場にしゃがみ込んだのだ。

「何だよ、死神が何の用だよ！」

沼田が言っている意味がさっぱり分からなかったが、その一言を受けたその瞬間、私は彼が薬物の常習者であることを思い出した。とすれば、彼は薬物中毒者特有の幻覚症状に陥っているということが予想される。

私は今だ、と言わんばかりに足元にあった大量の水色のペンキを沼田に向かってぶちまけた。ペンキは沼田の上半身を包み込み、彼は街中の静止像のように、鮮やかな水色に染まった。

「何だ、目が！ 目がああ！」

ペンキが目へ沁み込んだらしく、沼田は絶叫する。視覚が奪われたことをいいことにして、私は全神経を右手に込め、力の限り彼を殴り飛ばした。

沼田は地面に叩きつけられ、その衝撃で埃が飛散する。彼は完全に気を失ったらしく、そのまま仰向けになった。

私は鉄の扉を勢いよく開けた。

「雅紀、ここにいるのか！」

「ようこそ、俺の空間へ」

言葉を失った。

そこには意識を取り戻してはいるが、ロープにより身動きが封じられている雅紀の姿と、紅にも似た赤髪をした目つきの鋭い男の姿があった。そして何より驚くのは、床一面が真っ赤な薔薇の花びらによって埋め尽くされていることだった。それらは足場がない程に、地面を深紅に染めている。

「に、兄さん……！ 助けてくれ！」雅紀が叫ぶ。

「ああ、必ず助ける。死なせやしない」

私は握った拳に力を込める。そして、あらためて眼前に立ちふさがる男に視線を向ける。間違いない、こいつがオニグモのリーダー、薔薇崎だ。これまで数多くの者に自殺を推奨し、それらの命を消滅させた、全ての元凶だ。

薔薇崎はふん、と鼻を鳴らし、無表情に私を見つめる。全身真っ赤なスーツに身を包み、それ自体で刺々しい大輪の薔薇をアーティスティックに表現しているかのようだった。深呼吸をし、ゆっくりと口を開く。

「ここは俺が普段、自殺志願者の死を最後に見届ける空間。そいつらが自力で自殺をすることが出来なくなった場合のみ、この場所で俺が手を貸すことになっている」

私は奮い立つ精神を必死に抑え、冷静さを保つことに努める。「手を貸すだと？」

「そうだ。といっても、精神を極限まで削り、生きる気力を完全に一掃し、意識を死に近づけるだけだな。そういう意味では、俺がやることは洗脳に近い」

薔薇崎は足元の花びらを一枚手に取ると、ぎゅっと力強く握りしめる。

「そのため、この空間に相応しい呼び名を俺は考案し、オニグモの中ではその呼び名を一般化した。その名は……紅華絶命往生魔庭」

薔薇崎は握りしめていた花びらを宙に放つ。

「お前たちホワイトスーサイダーが現れてからというもの、俺たちの活動にも支障が出るようになった。この紅華絶命往生魔庭は、そのための対策だ。お前たちがいかに自殺志願者を説得しようとも、そいつらはこの場で無条件に裁かれる」

淡々と語る薔薇崎に対し、私は怒りの声を上げる。「させない」

「何だと？」

「そうはさせない。俺が、薔薇崎、お前を止める」

「止める？ お前は身の程を知らないようだ」

「黙れ！ 止めると言ったら、止める。雅紀は、俺が助ける」

「兄さん……」

雅紀は弱々しい瞳をこちらに向け、がたがたと震えている。私は長く息を吐き、呼吸を整え、全身に力を込める。

薔薇崎は私を凝視したまま、左手の袖をまくった。

私の背中に冷や汗が伝う。

薔薇崎のその腕は生身のそれではなく、明らかに人工的に作り上げられた、無機質なものであった。窓から差し込む日光を存分に反射する透き通った白さで、その周囲には肉眼でも確認することのできる電流が、バチバチと音を立てている。

「その腕は、何だ？」私は恐る恐る薔薇崎に尋ねる。

薔薇崎は手首から上がプラスチック状になっているその腕を、誇示するように私に向ける。

「俺は……人間ではない」

私は黙り込んだ。あまりにも衝撃的な一言だったため、全身から力が抜ける。雅紀も驚きを隠せないらしく、目を丸くしている。

薔薇崎が続ける。

「俺は、ある天才数学者が造り上げた、アンドロイドだ。まあ、外見こそそこらの人間と何ら変わりはないがな」

「アンドロイドだと？」私は頭が混乱する。

「そうだ。そして、その数学者の気まぐれによって、俺はIQ140程度の人工知能を手に入れた。だからこそ、こうして人間と同等の振る舞いができている」

青天の霹靂だった。それは、乳白色の液体にただ一滴、墨汁がしたり落ち、火山の大噴火にも似た灰色の混合を見せるかのようだった。薔薇崎がアンドロイド？ それも数学者の気まぐれによって造られただと？

奴の腕を見る限り、それは嘘ではないらしい。何より、火花のような音を立てている電流が、その事実を物語っている。

薔薇崎の表情が強張る。

「愚劣なお前に教えておいてやろう。俺の体内には常に十二万ボルトの高圧電流が流れている。そのため、俺に一ミリでも触れれば、その瞬間にお前は感電死する。さらに、この紅華絶命往生魔庭を埋め尽くす無数の薔薇の花びらには、その一枚一枚に特殊なチップが埋め込まれている。俺が電気信号を流せば、花びらには四億ボルトの電流が流れ、やがて自然発火する。つまり、お前はあらゆる策を講じようと、俺には触れる事すらできん」

不意に薔薇崎が赤いスーツの内ポケットから、注射器のようなものを取り出す。中には、紫色の得体の知れぬ液体が入っている。

「それは何だ？」私は問う。

薔薇崎はお気に入りの宝物でも眺めるかのようにその注射器を見つめ、不敵な笑みを浮かべる。

「これは、促鬱剤だ。この薬品を体内に打ち込まれた者は、例外なく極度の鬱状態に陥る。救いようの無いくらいにな」

そう言って、薔薇崎は雅紀に視線を移す。

「やめろ！」私は叫んだ。「そんな事したら、俺は本当にお前を許せなくなる」

私は平静を打ち破り、怒りを燃やす。だが、それを受けても当の薔薇崎は微塵も動揺することなく、真っ直ぐに私を見つめるだけだった。

「許す？ 一体、何のことを言っている？ お前の弟のことか、それともこれまで俺が自殺に追

いやった者たちのことか？ いずれにしろ、お前が我々オニグモの活動に私情を挟む余地はない。それに、今のお前に何が出来るというのだ。そこを一步でも動けば、お前は火だるまになるだけだ」

雅紀は震え、完全に顔が青ざめていた。だが、薔薇崎は構うことなく、促鬱剤の入った注射器を固く握り、雅紀に歩み寄る。

「お願いだ、見逃してくれ！」雅紀の声が反響する。薔薇崎は、慣れた手つきで雅紀の右腕に促鬱剤を投与しようとする。

「やめろ！」

私の一声も無視し、薔薇崎は雅紀の右腕に注射器の太い針を食い込ませた。そして、促鬱剤が雅紀の体内に打ち込まれてしまった。

「うわああああああ！」

突如、雅紀が絶叫した。薔薇崎が雅紀のロープをほどくと、彼はこの空間から脱出しようと、出入り口の扉の方へ一目散に走り出した。

私は、雅紀に向かって叫ぶ。「やめろ、雅紀！」

雅紀の足は止まらない。案の定、薔薇崎が電気信号を送ったのか、雅紀が走るその前方の、薔薇の花びらが次々と発火した。その炎は予想していたよりも勢いが激しく、深紅の花びらを途端に焼き尽くしていく。

薔薇崎は、雅紀のもとへと駆け寄ろうとした私に対し、警告ともいえる事を言い放つ。

「安心しろ、促鬱剤を打ち込んだところで自我までは崩壊しない。その鬱状態は一時的なものだ。だが、ああやって発狂した状態でこの部屋を走り回れば、全身に大火傷を負い、どの道助かりはしない。あきらめろ」

「黙れ」私は引き下がらなかった。

「薔薇崎、お前が何と言おうと、雅紀はこの俺の手で必ず助けきる。お前がそれを邪魔するなら、止めるだけだ」

私は、薔薇崎めがけて突っ込んでいった。私が踏みつけた薔薇の花びらが次々に発火し、背後に炎の道が出来上がる。さらに、薔薇崎は自身の目の前の花びらも全て発火させ、一枚の大きな炎の壁を作った。

私は構うことなく、その炎の壁に突進する。スーツが焼け焦げる匂いがしたが、気にも留めずに薔薇崎の眼前に辿り着く。薔薇崎は私の行動を予測できなかったのか、反応が追いついていない。

「薔薇崎、お前の思い通りにはさせない！」

「そうか、ならばお前ごと全て焼き尽くすだけだ！」

薔薇崎は咆哮にも似た雄叫びを上げ、何やら両手を動かし始めた。すると、彼の手の動きに連動するかのように部屋中の花びらが宙に浮き始めた。幾万枚もの花びらは浮遊し、上昇を続け、やがて天井のやや手前でぴたりと止まった。

「どういうことだ、これは一体？」私は固唾を呑む。

宙に浮いている薔薇の花びらを静かに見つめ、薔薇崎は告げる。

「花びらには各々特殊なチップが埋め込まれていると言った。そして、俺の電気信号により、それらは発火させるだけでなく、自由に動きを操ることも可能だ。こんな風にな！」

薔薇崎は宙に浮く花びらを次々と発火させ、地面めがけて急降下させ始めた。

「なっ？」私は目を見開く。

その様はまるで炎の雨だった。降り注ぐ灼熱の雨粒は轟音と共に落下し、地獄の音色を奏でる
アコーディオン
手風琴のような低音が空間内に響き渡る。

薔薇崎は左手を天にかざすようにし、余裕の表情を浮かべた。

「紅華絶命往生魔庭 炎魔鬼魚雷封殺滅間」

一向に止む気配もなく、炎の雨は降り続く。私は俊敏な身のこなしでそれらを一つ一つかわす。だが、そのように動く度、縮めたはずの薔薇崎との距離が開いていく。

「どうした？ この俺を止めるんじゃないのか」薔薇崎は鋭い視線を私に向ける。

その時、視界の端に雅紀が部屋を出ようと、発狂しながらも扉を開け、外へ出て行くのが目に入った。

「追わなくていいのか？」薔薇崎が私に尋ねる。

私は一瞬逡巡した後、すぐに我に返る。

「お前とのケジメをつけるのが先だ、薔薇崎」

私のスーツは所々が焼けただけ、いくらか穴も空いている。奴との攻防ももうあまり時間をかけられないことは明らかだった。

「薔薇崎、お前は何故人間を闇に陥れるんだ？」私は問う。

薔薇崎は無機質な表情を崩さない。「お前には関係のない話だ」

「関係はあるはずだ。現に、弟が巻き込まれた」

「お前のような輩に打ち明けた所で、所詮理解出来ずじまいだと言っている。俺はこの世に充満するあらゆる闇を一掃するために、自身の闇を使っている。だが、その道理はお前には決して分かるはずもない。お前からすれば、それを理解しようと努めることは、神のけいがい警咳に接するようなものだ」

「それでもいい。薔薇崎、お前の考えていることを全て話してくれ。俺だったら、お前を更生させることができるかもしれない」

「一介の男がこの俺の思想を理解しようとする、か。……だがしかし、そんな柔なことで俺のけいかく圭角が取れることはない」

「それでも、俺は引き下がらない」私は薔薇崎を拘束し、必ず自らの手でこの闇の負の連鎖を断ち切ることを頭の中で再確認する。ホワイトスーサイダーに選ばれた以上、自分に出来ることはただそれくらいだった。

緊張が続く。まさに命懸けの戦いだった。私は天命にすら祈りを込め、事態を打開しようと思考を巡らせる。

薔薇崎はふっと冷徹な眼差しを向ける。

「いいだろう。お前がそこまで俺の中の闇を紐解きたいのならその気概すら完全に消し去ってしまえば早い話だ」すると、薔薇崎は両手を華麗に動かし、花びらを不規則に浮遊させ、発火さ

せた。その炎は巨大な龍の形をしている。

「紅華絶命往生魔庭 翼龍演舞 愍懃之定」
いんぎんのさだめ

炎の龍は今にも雄叫びを上げそうな気迫に包まれ、空間を威圧する。熱気が充満し、思うように呼吸が出来ず、私は息苦しさを覚える。

「お前たちの抵抗もここまでだ！」薔薇崎の声が響く。

龍がこちらへ向かってくる。全身に灼熱の炎を纏い、怨恨の形相で近づいてくる。だが、私は避けようとは思わなかった。自らがたとえ死んだとしても、その死が後世の安寧の役に立つならばそれで構わない、そう思った。

「だが、そうもいかないか」

私は超越した。人間としての存在をではなく、怒りの沸点を超えたその臨界点を、だ。私はゆらゆらと燃え盛る炎に包まれ、その場に立っていた。

「なっ、……お前は一体？」

薔薇崎は一步後ずさりし、私の全身を確認する。通常の間では耐えられないほどの灼熱、その矛盾は彼の人工知能では決して計り知れないものであるようだ。私は炎に焼かれている。だがしかし、雅紀をはじめ、多くの人間を自殺に追い込んできた薔薇崎に対する怒りの熱量が、はるかにそれを上回っていた。私にはもはや科学は通用せず、精神の塊そのものが身体を支配している、そんな状態だ。

「薔薇崎ィィ！」私はありったけの音量で叫び、奴めがけて突っ込んでいった。薔薇崎は事態を呑み込まずに、ただ呆気を取られている。その顔は力が抜け、存分に血の気が引いていた。私は彼の右頬を思い切り殴った。その拳に纏わりついていた炎が薔薇崎に伝わり、やがて彼の全身をも包み込む。

「こんな、こんなところで消えてたまるかああ！」

炎の波は無機質な彼の肉体を次々に焼き尽くしていく。そんな苦しみに喘ぐ姿を、私は切ないとさえ思った。自らが巻き起こした闇が、巡り巡って自分のもとへと帰り、そして苦悶を提供する。その惨劇が今、目の前で起こっているのだ。

私はその光景を眺めるうちに、ふと学生時代に自らが尊敬する教師が言っていた真理を思い出した。

ブーメランの法則、って知ってるか。

要は、好感は好感を、嫌悪は嫌悪を引き付けるという一種の格言だ。自分がやってきたことは、必ず同じ質量を伴い、我が身に返ってくる。それは一つの教訓であり、真理だ。だからこそ、常々自身の振る舞いや言動には注意するように、と。そう、その教師は力説していた。

当たっていた。

眼前の男の姿がそれを物語っている。叫び声を上げながら、非人間的な表情を浮かべ、薔薇崎はその場に倒れ伏した。

そこでようやく、私は自分に気が向いた。このまま焼かれて死んでしまうのか、それともかろうじて生きながらえるのか、それすらももう分からない。ただ言えることは、とりあえず雅紀の自殺は止められた、ということだけだ。

結局、薔薇崎の闇に私は突き動かされ、そのブーメランを手にしてしまった。法則に操られた心持ちだ。雅紀は、理屈や法則が一切必要のない、そんな領域は魅力的だと言っていた。当たっていた。

終

白昼、夢と消ゆ (三ツ葉 葵)

白昼、夢と消ゆ

三ツ葉 葵

柔らかい月明かりの下で、彼女はよく本を読んでいた。

彼女の美しい髪は闇夜に溶けてしまいそうなほど黒く、彼女の陶器みたいに白い肌は夜空に浮かぶ月よりも存在感があった。

整った顔立ち、ガラス玉より澄んだ瞳、鮮血のように赤い唇。

ただ、こちらに気づいてニコリと笑いかける瞬間だけが彼女を人であると証明しているようだった。

しかし、ある晩。突然朝がやってきて、この世の全てを夜に溶かしていった。もちろん、彼女も。

*

ある晴れた日、頭が痺れそうなくらいに纏わりつく生暖かい空気と、そんな息苦しさも吹き飛ばすようなジリジリとした日差しの中、僕は彼女に問う。

「小夜、今日は一緒に街へ出掛けようか」

彼女はいつも通りにこう答える。

「うーん、そうだねー、君の言うとおりにしよう」

彼女は、例え黒い雨が降っていたり、鎌鼬でも暴れてそうなくらいの風が吹いていたたりする時でも、決まってこう答えるので少し困りものなのだが、今日みたいに一緒に出かけられる日には、僕も決まって上機嫌に鼻歌を歌いながら、彼女の手を引いて目的の場所へと繰り出すのであった。

小夜とのウィンドウショッピングは、とても有意義でかけがえのない時間であった。僕が頼むと、彼女は少し恥ずかしがりながらも、流行のワンピースや鈍く光るシルバーイヤリング、僕好みのゼンマイ式の時計なんかを身に着けてくれた。アーケードで、薄汚れたガラスから降るキラキラとした光と行き交う人々の中、僕と彼女は二人ぼっちのショーを楽しんだのだった。

「ねえねえ、見て、すごいよ！ ここのガラス、ただのガラスじゃないよ！」

露店を冷かしながら少し奥まった小路に入った後、追いかけてこた、と僕をからかって一人楽しそうに駆けていった小夜の背を見送っていると、突然彼女が立ち止まって、こちらを向き、そう叫んだのだった。僕は彼女を早足で追いかけて、ガラスの前で何やらポーズをとって見せる彼女の視線を目で追う。

「おお、デジタル着せ替えか。 あ、カーディガン、今度はニットワンピースだな」

僕は、こんな少し寂れた街にもハイテクなものが入ってきたんだなあ、と感心しながら、ガラスの前で踊るように様々なポーズをとる小夜を微笑ましく見つめていた。少しして、前に後ろに、と回るようにしながら楽しんでいた彼女は、動き疲れたのだろうか、僕にもガラスの前に立つよう誘ってきた。

なぜか、ほんの少しだけ嫌な予感のした僕は、その場で踏み止まって小夜に作り笑いをして見せたけれど、少しムツとした彼女にグイグイと鏡の前まで連れてこられてしまう。笑顔で押される僕、頬を膨らませながら押す彼女、この瞬間は間違いなく幸せな時間だった。

そして、僕はガラスの方を向いてしまった。

*

僕はハッと息を呑んだ。今、目に映るものと、さっきまで見ていた世界との差に、思考が停止する。

僕の後ろにうず高く積まれている、瓦礫、瓦礫、瓦礫――

割れ残ったガラスに映る僕の姿は、お洒落な洋服なんかではなく、所々破れた黒い防護服に、ゴーグルの片目が壊れたガスマスク姿。奥に見える僕の瞳は、死んだ魚のように白濁している。

そして、今、一番気にかかること。

「小夜は」

さっきまで僕を押していた彼女の姿が見えない。ガラスから目を離して、彼女を探すために周りを見回してみる。

しかし、そこにあるのは溶けて変形したブリキの玩具や、割れたガラスの破片、辛うじて跡形もなくなっていない建物群。

「小夜！　お願いだ、姿を見せてくれ！」

大声で彼女の名前を呼ぶが、後に残るのは重苦しい静寂だけ。雑踏の音も消え、しんと張り詰めた空気が僕を責めているように思えた。

あまりに唐突な、悪夢のような出来事に、僕は頹れ、その場に蹲ってこの悪夢が早く冷めるように祈った。お願いします神様、と普段信じもしない神様に、みっともなく縋りながら。

*

「ねえ、そんなにあたしに会いたい？」

ブツブツと何かを呟きながら蹲り、ちょうど全身の皮膚がビリビリと痺れてきた頃だった。小夜の声が聞こえた。

僕はバツと顔を上げ、首を振って彼女を探す。勢いよく顔を上げすぎたせいだろうか、鼻血が出てきた感覚があるが、そんなことを気にしている場合ではない。両膝をついたままの格好で彼女を探そうとする。

すると、また、彼女の声が出た。

「ねえ、そのまま聞いて。　信じられないかもしれないけど、あたしはもう君とは会えないの」

彼女の残酷な言葉に、僕は胸の奥が詰まっていくような感じがした。

「どうして、これでお別れなんだ。　これからだって、きつともっと楽しいよ。　秋が来て、冬が来て、春が来て、そしてまた、夏が来るんだよ。　僕と小夜の子供だって、まだ……」

「君はさ、あたしのために一生懸命でいてくれたよね」

小夜は少し突き放したように僕にそう言った。少し声が上ずっていたから、きっと、彼女がプロポーズの返事を、空を見上げながら言った時のように、今日も空を見上げながら、穏やかな顔

をしているのだと思った。

そして、彼女は続ける。

「ホントはさ、君はもう気づいてるんだよね。 あの晩、あの光を受けて、あたしが無事でいられる訳が無いってこと」

「分からないよ！ どうして、どうして……小夜は僕をおいていったりなんかっ……ずっと一緒だって言ったじゃないかあ」

僕はあふれる涙を抑えきれずに、息も絶え絶えにそう言うと、ギッと奥歯を噛みしめた。力に耐えきれず歯が一本抜ける。

僕が泣きながらまた蹲ると、肩に何か触れるものがあった。冷たい指先と、細く柔らかな手のひら、小夜の手だ。僕はゆっくりと彼女の手を手繰る。

「ごめんなさい、あたしはもう行かなくちゃいけない。 自分勝手なあたしを呪ってもいい、せめて君自身の人生を、運命を呪わないで」

そう言うと、彼女は肩から手を放し、それきり姿を現すことはなかった。

*

柔らかい月明かりの下で本を読む彼女を、僕はよく見ていた。

彼女の闇夜に溶けてしまいそうなほど黒く美しい髪に見惚れ、彼女の陶器みたいに白い肌を夜空に浮かぶ月と比べた。

整った顔立ち、ガラス玉より澄んだ瞳、鮮血のように赤い唇。

ただ、こちらに気づいてニコリと笑いかける瞬間だけが彼女を人であると証明しているようだ、と、そう思った。

この晩、僕は夢と消えた。

(完)

あとがき

漫研の某友人に原作を頼まれ、無事に受けることを決めました（僕には過ぎた話だったかもしれない）。要求されたのは、短い話ということだけ。お話考える機会が増えるよ！やったね！

金色の守護者 (七乙女昴)

金色の守護者

七乙女昴

東西南北そこかしこから威勢の良い声が聞こえる。商人の巧みな話術に誘われて商店へ出入りする買い物客。路上で芸を披露し食い扶持を稼いでいる大道芸人。あるいは物珍しそうに周囲を見渡す観光客。それから世間話に興じている人、人、人……その雑多な喧騒を聞いているだけで、疲れてしまいそうだ。

ここは相変わらず賑やかだな、とトウヤは呟く。

商業都市メルカド。南大陸でも屈指の活気を見せるこの都市には、世界各地から人と物が集まる。人が集まれば、情報も自然と集まる。近年世界中から注目を浴びている都市の一つだ。

トウヤがここメルカドに来るのは実に半年振りになる。現在進行形で目覚ましい発展を遂げているこの都市は、以前訪れた時に比べてまた一回り大きく発展したように見える。

時刻は正午を少し過ぎた頃。街の中心部をざっと一周したトウヤは、大市場から離れて昼食を摂れる店を探すことにした。

「さて、本日の目玉商品はこちら！」

ふと視界の隅に人だかりを見つけたトウヤは、その盛り上がり様が妙に気になった。トウヤの位置からは距離が離れていて群衆が何を見ているのか分からないが、派手な服装をしている男性が多いような気がする。トウヤは大通りから路地裏へ進路を変更し、その群衆へ近付いた。

「北の大陸より連れてきた没落貴族の一人娘、アインです！」

白いスーツ姿の男性が群衆に語り掛けている。不穏な言葉が耳に入ってきて嫌な予感を抱いたトウヤであったが、近づくにつれてその予感は確信へと変わった。

男達の視線は、檻の中の少女へ向けられていた。

「どうです、この眩い金色の髪と品のある顔！ 私がこれまで取り扱ってきたどの`商品、よりも美しい！」

少女を見て感嘆と欲望の声を漏らす男達。そんな中、トウヤただ一人が少女の姿を見た途端に強烈な胸の痛みを感じた。

心の奥底に閉じ込めていた記憶が一瞬で脳内を駆け巡る。トウヤはいつの間にか駆け出していた。

「さて、いつもは『十』からですが、この`商品、かなりの値打ちものなので『百』からスタートさせていただきます。では……どなたか購入者はいらっしゃいますでしょうか？」

スーツの男が言い切るや否や、`競り、が始まった。黒縁の眼鏡を掛けた初老の男性がまず『百五十』と宣言する。すると、今度は恰幅の良い男が『二百』と大声で言い、更に黒いタキシードを着た細身の男が『二百五十』と競り上げていく。後はもう、怒号のような数字の応酬だった。

間髪入れずに応酬が続く中、『六百四十です』と赤く輝く宝石を身に着けた男性が口にしたところで周囲一帯が静まり返った。

「……さて、『六百四十』以上の方はいらっしゃいませんか？」

スーツの男が群衆に問いかけるが、反応は無い。その時、それまで俯いたままだった少女がようやく顔を上げた。おそらく、自分の「主人」となる男の顔を確認しようとしたのだろう。群衆の中では頭一つ身長が抜き出ているトウヤは、偶然その少女の目に留まった。トウヤと少女、二人の視線が交錯する。

瞬間、トウヤの心が再びざわつき始めた。

「六百五十だ」

無意識にトウヤは口にしていった。

《 I 》

「トウヤ、本当にこっちで合ってるの？」

深い霧に覆われた森の中。アインは転倒しないように足元を注視しつつトウヤの後に着いて歩いている。

「心配するな。俺を信じろ」

「それで信じられたら苦労しないわよ。はあ、やっぱり素直に街道を進むべきだったのよ……」

「馬鹿言え。呑気に街道を歩いたら丸二日はかかるんだぞ。それよりかは森を突っ切って半日で着く方が良いに決まってる」

「それで迷ったら元も子もないじゃない！」

「だから迷ってなんかねえって。……多分」

「そうやってサラッと不安になる一言を付け足さないでよ……って、ちょっと待ちなさい！」

ねえ、待って！ 待ちなさいってば！ こらーっ！」

薙ぎ倒された倒木や折れ曲がった枝などの障害物を物ともせず、軽々と避けて先へ進むトウヤ。対して額に汗を走らせつつ彼の後を追うアイン。ただでさえ濃霧のせいで視界が悪いのだ。加えて、道らしき道が存在しない天然の森である。アインは彼に置いて行かれないように着いて行くだけで精一杯だった。

太陽が西に傾き始め、青空が夕焼け色に染まる頃。トウヤは依頼をこなすためにアインを連れてヴィラ村へ向かっていた。

依頼主はヴィラ村の村長。内容は作物を荒らす魔物の退治。

村といっても、ヴィラ村は小規模な都市と同等の面積を誇っている。主要産業が農業ということで「村」という括りになっているが、商業都市と港町の間地でもある以上、自然と人の行き来が盛んになる。現在では行商人向けの宿なども新たに造られ、宿場町としての機能も併せ持つようになった。

「トウヤはもうちょっと女の子に優しくするべきよ。具体的に言うと、身近な女の子、たとえば私に優しくするべき」

軽い息切れを起こしつつもトウヤをしっかりと睨み付けるアイン。その様子をトウヤは鼻で笑って一蹴する。

「お前を拾ってやった時点で相当の優しい奴だぞ、俺は」

三日前の檻に入っていたアインの姿が頭をよぎる。あの時、彼女の絶望に染まりきった瞳をトウヤは無視できなかった。彼女を購入した後、自身の今後の身を案じて怯えていた彼女に衣服をはじめとした生活用品一式を買い与えた。そして、彼女の「主人」として最初の命令を与えた。

「――お前が一人で生きられるようになったら教えろ。それまでは俺が主人として面倒を見てやる。

「.....解ってるわよ。私がこうして何の不自由もなく生きているのはトウヤのおかげなんだから、ことくらい、解ってる」

食事はトウヤが作るか店に連れて行ってもらえる。睡眠はアイン個人の寝室が用意され、トウヤに起こされるまで熟睡することができる。そして、魴り者にもされない。アインからすれば、今の待遇は奇跡に近いものだった。

「おい、そういう湿っぽいのはナシだって最初に言っただろ」

「.....そうね。こんなに歩き続けたのは初めてだからちょっと疲れちゃったのかも。あー、やっぱりトウヤに着いて行くなんて言わなきゃ良かった」

「今さら後悔しても遅いぞ.....っと。ほら、そろそろだ」

視界が開け、二人を覆っていた霧が徐々に薄まる。森を抜けたのだ。森から離れていくにつれて、土の匂いが強くなる。

「あそこが今回の目的地だ」

「あれがヴィラ村.....」

森を抜けてから五分も経たないうちに、目的地であるヴィラ村が見えてきた。

村の外壁は頑丈なレンガで囲われており、物見やぐらと思われる高さのある建造物が東西それぞれに設置されている。その二つの物見やぐらの間に、他の建物よりも頭一つ抜けた大きさの建物、ヴィラ村自慢の大きな宿が遠目からでも見える。

二人が村の入口に到着した時には、既に物見やぐらからの報告を受けていた村長が門前で待ち構えていた。

「お待ちしておりました、トウヤさん。それと、お連れの方も」

アインは村長からの視線に気付き、慌てて頭を下げて自身の名前を告げた。

「メルカドから徒歩でやって来たということできぞやお疲れのことでしょう。一先ず宿へ御案内いたします」

村長の背中に着いて行く二人。辺りを見回すと、方々の田畑に荒らされた痕跡が幾らか見られる。

「いつ頃から被害が？」

「先月の中頃からです。おそらく、たまたま迷い込んだ奴が味を占めたのでしょう」

その後もトウヤは幾つか依頼に関する質問を続け、それから、二人の会話は徐々に世間話へと移り変わっていった。

アインが所在無さそうに前を歩く二人の後ろを黙々と歩いていたところ、不意に袖口をクイッ

と引っ張られた。アインは不思議に思って振り向くが、視界にそれらしき人物は映らない。袖口を掴んでいる腕の先を辿って視線を下ろすと、水玉模様の赤いワンピースを着た幼い女の子がアインを見上げていた。

「おに一ちゃん？」

「.....お兄ちゃん？」

女の子が指差した先には、真剣な面持ちで村長と会話をしているトウヤがいた。短く切り揃えられた金髪が風に吹かれて微かに揺れている。

「おね一ちゃんのおに一ちゃん？」

「.....ああ、なるほど。トウヤが私の兄なのかってことね。ううん、トウヤは私の兄じゃないわ。髪は同じ金色だけどね」

「ふーん。おね一ちゃんのおに一ちゃんじゃないんだね.....」

あまり釈然としていないような表情を浮かべていた女の子であったが、母親らしき人を見つけるや否や表情を輝かせて猛然と駆けていった。途中で思い出したかのようにピタリと止まり、アインの方へ振り向いて手を元気よく振ったものの、アインが手を振り返すよりも先にその小さな姿は往来する人々の影に隠れて見えなくなった。

「兄妹、ね.....そんなに似てるかしら？」

走り去った女の子の素早さに苦笑しつつアインは呟いた。振り向いた彼女の視線の先にはここ数日ですっかり見慣れたトウヤの大きな背中。女の子と話していた間にだいぶ距離が離れてしまったらしい。

さてトウヤを追いかけなければとアインが思った矢先、彼が立ち止まり、周囲をキョロキョロと見回し始めた。不味いと思ったアインが慌てて全力疾走するが、時すでに遅く。結局、合流した際に一人で勝手にぶらついた罰として、アインはトウヤから全力のデコピンを浴びせられた。

《Ⅱ》

「トウヤ、このヴィシソワーズ物凄く美味しいわよ！」

「そりゃ、採れたて新鮮の野菜だから美味いに決まってるだろ」

一口食べる毎に美味しい美味しいと声を上げて顔を綻ばせるアインに対し、トウヤは落ち着いた様子で応える。

「このポトフも.....こっちのフォカッチャも！ トウヤの料理も美味しいけど、やっぱりプロは一味も二味も違うわね！」

「その道のプロとただの自炊レベルを比較するんじゃないわねえ」

そう言いつつも、トウヤの口元から時折悔しそうな漏れ息が出ているのをアインはしっかり聞いていた。それを指摘したらトウヤが不機嫌になることは容易に想像がついたので敢えて口には出さないが。

「こんなに美味しいものが魔物のせいで食べられなくなるのは確かに困りものね」

「今のところ被害は小規模に収まっているが、今後ますます増えていくのは間違いないからな。」

だから俺達がここに居る」

魔物が襲撃する前の腹ごしらえという事で、トウヤとアインは地産の野菜がふんだんに使われた夕食を食べていた。一流のシェフが腕を振るう料理の数々も、宿の魅力の一つである。

「私は武器の心得が無いから戦うのはトウヤ一人だけだね。うーん、せめて後方支援でも出来ればいいんだけど」

「……今度、初級魔術の本でも買ってきてやろうか？」

トウヤとしては、アインが戦闘に加わるのは正直不本意なのだが、いざという時にはやはり自衛の手段があるに越したことはない。彼のように傭兵を生業とする者の近くに居るなら尚のことだ。彼がいくら強いとはいえ、一人の人間である以上どうしても手の届かない距離は存在する。

「うーん、やるならとりあえず治癒術からよね。それから、便利そうなのは火属性かしら。……うん、やっぱり美味しい。野菜の優しい甘味のおかげでいくらでもお腹に入っちゃいそう」

「おいおい、食べ過ぎには気を付けろよ」

トウヤの憂慮にも全く気付かず、食事の手を休めないアイン。しかし、そんな彼女の幸せそうな表情を見ると、自然と彼の口元も緩んでしまう。

「なにニヤついているのよ、気持ち悪い」

いつの間にか、アインは食事の手を止め、トウヤの顔を怪訝そうにじっと見ていた。

「……隠し味に何を使っているのか想像してただけだ」

どこか自分の妹に似た雰囲気少女。自分と五歳差なのも妹と同じ。同じ金髪。同じ碧眼。同じ目鼻立ち。そして、同じ笑顔。性格こそ真逆と言っていいほど活動的だが、時折、彼女に妹の幻影を重ねてしまっていることは否定できない事実だった。そして、彼はそれを自認する度に胸の奥に痛みを覚え、息が詰まりそうになるのだ。

食事を終えた後、先に部屋に戻っているようアインに言ってからトウヤは宿の外へ出た。煌々と輝く星空を見上げつつ、今夜やって来るだろう魔物のことを考える。

足跡と目撃情報から考えるに、おそらく大型の熊種。今はまだ農作物しか被害は及んでいないが、村人を襲うようになる可能性だって十分に考えられる。なにしろ、トウヤはその前例を実際に目の当たりにしたことがあるのだ。

いつの間にか固く握りしめていた拳を持ち上げて見る。『あの時』の細く頼りなかった身体は成人の逞しいそれになった。今の自分には武器もある。力もある。『あの時』とは違う。

呑気に部屋で寛いでいるだろう少女のことを想う。今度こそ護るのだ、とトウヤは心の中で誓うのだった。

《Ⅲ》

日付が変わる直前、それは唐突に現れた。巨大な身体を支える為の太く筋肉質な四股。野性的な低い唸り声。微かに開いた口から覗く鋭利な犬歯。体長四メートルを優に超える黒い影が森の方角から姿を現した。

「トウヤ、来たみたいよ」

物見やぐらからの報告を受けたアインがトウヤに駆け寄る。

「分かってる。……アイン、さっきも言ったが絶対に北門から絶対に外へ出ようとするな。危険だと思ったら俺を置いて迷わず逃げろ。これは主人としての命令だからな」

「う、うん」

珍しく真剣な面持ちで見詰められて、アインは思わず頷いた。彼女の視線の先、およそ五百メートル先には、のそのそと歩く巨大熊が一頭。群れで行動していないのは幸いだった。

「うっし。じゃあ、一仕事してくる」

愛用の双剣を腰に携え、トウヤはアインに背を向けて村を離れる。その背中に着いて行きたい気持ちをグツと堪え、アインは必死で言葉を探して紡ぐ。

「……怪我しないように頑張りなさいよ」

アインの言葉にトウヤは左手をひらひらと振って答えた。

野花が丸太のような四股に踏み潰された。微かな風に乗ってトウヤの鼻腔に届いたのは花の芳しい匂いではなく、獣の臭い。

ビッグベア

巨大熊はすぐにトウヤの存在に気付いた。彼が己にとって敵であることを本能的に感じ取ったのだろう。隠すことなく殺気を放出し、ゆっくりと、そして着実に間合いを詰めてくる。

対するトウヤは、弧を描くようにして巨大熊との間合いを測っていた。巨大熊の一挙一動を見逃さないように彼の視線は四股へ向いている。

「焦るな……焦るな……まずは相手を動かせ……」

正面から殴り合えば、分が悪いのは明らかにトウヤの方だ。あの屈強そうな肉体から繰り出される攻撃をいちいち受け止めていては身体がもたない。だからと言って、ただ単に持久戦やスピード勝負をしてもただの人間が魔物に勝てる見込みは限りなく低い。ならば、何がトウヤにとって最善手なのか。

距離にして十メートル。痺れを切らした巨大熊が遂に唸り声をあげて突進してきた。狙いはトウヤの左肩。一撃で仕留めるつもりなのだろう。地響きを起こしながら肉薄し、跳びかかる。

「……ここっ！」

トウヤは腰を落とし、右足へ重心を傾けつつ双剣を構える。目の前にはトウヤのものとは比べようもないほど太い巨大熊の左腕。それを懐へ潜るようにして躲し、次いで眼前に迫る左脚に対し、双剣を交差させて防御の姿勢をとる。

鈍器同士がぶつかり合ったような、重量感のある音が衝撃と共にトウヤを襲う。吹き飛ばされそうな衝撃を左半身方向へ受け流すようにしてどうにか堪えたトウヤに対し、空中でバランスを完全に崩した巨大熊はつんのめるようにして倒れ落ちる。

「覚悟しろ、このデカブツ！」

先に動き出したのはトウヤの方だった。素早く反転し、巨大熊が起き上がるより先に右脚の関節部分を接近した勢いそのままに斬る。肉を裂く確かな手応えを感じる一撃だった。

猛烈な痛みに襲われ、堪らず絶叫を上げる巨大熊。追撃をしようとするトウヤを両腕で追い払い、四股を地に着けてから先程以上の殺意を込めて睨み付ける。しかし、その右脚は既に巨体を支えて突進できるほどの力が入らない。勝負は既に決していた。

ろくに動けない身体を幾度となく斬り刻まれ、とうとう巨大熊は倒れた。濃厚な死の臭いが徐々に周囲へ充満する。トウヤは赤黒い血を滴らせている剣先をおもむろに振り上げた。

「……ふう。流石にもう動かねえだろ」

地に伏せたまま弱々しい唸り声を上げる巨大熊の首にとどめの一撃を入れ、ようやく安堵の息を吐いたトウヤ。対人戦こそ経験豊富ではあるが、実のところ魔物討伐は経験がそこまで無かったので緊張していたのだ。

依頼完遂の証拠品として巨大熊の頭を麻袋の中に入れ、剣先の血を拭ってから村へ戻るトウヤ。帰路の道中、彼はメルカドを発つ前より考えていた計画を思い返す。魔物に対する苦手意識はあったものの依頼は無事に完遂した。後はこれを村長に届け、報酬金を貰う。そして、明日の朝には村を発って港へ向かい、北大陸行きの船を探そう。そして北大陸でアインを……

「助けてトウヤ！」

不意に聞き覚えのある少女——アインの叫び声が網膜に飛び込んできた。慌てて周囲を見渡そうとして、村の門前まで到達していたことにトウヤはようやく気付く。方角を考えるに彼女は西側の物見やぐらの近くだろう。同じ方角から複数の男の怒号も聞こえることに嫌な予感を覚えつつ、トウヤは全速力で駆け出した。

トウヤが物見やぐらに到達した時には、既にアインの姿はどこにも見当たらなかった。更に村の奥の方へ進むと、村人が南門付近で人だかりを形成していた。トウヤはその中に村長の姿を見つけ、掻き分けるようにして近付く。

「アインの叫び声が聞こえた。アインは何処へ行った！」

「……む、トウヤさん」

村長に駆け寄るや否や、邪魔な麻袋を投げ捨てて問い詰めるトウヤ。その剣幕に思わずたじろぐ村長だったが、すぐに申し訳なさそうな表情を浮かべて口を開いた。

「申し訳ありません。どうやらお連れ的女性、アインさんは盗賊集団に攫われてしまったようです」

「盗賊集団、だと」

トウヤの表情が一段と険しくなる。

「はい。私が聞いた限りの目撃情報をまとめますと、商人風の格好をした六人ほどの男達が縛られた少女を荷台に押し込んで南門から出ていったようです。……おそらく、メルカドへ向かう商人に変装していたのだと思われます」

トウヤが巨大熊と戦闘していたのは北門方面であり、メルカド方面とは真逆だった。トウヤにはどうしようもできなかつたとは言え、激しい後悔の念に駆られる。

「ねえねえ」

不意に服の裾を引かれ、トウヤは視線を下ろした。服の裾を握りしめていたのはまだ年端も行かぬ幼子だった。

「おに一ちゃんは、おね一ちゃんのおに一ちゃんなの？」

一瞬何を言っているのか全く解らなかったが、アインと自分のことを指しているのだという事に気が付き、トウヤは表情を幾らか和らげて答える。

「.....そんな感じだな」

「おね一ちゃん、いなくなったの？」

「お姉ちゃんはちょっと迷子になっちゃったんだわ。だから、お兄ちゃんが今から探しに行ってくる」

「.....おに一ちゃん」

「ん？」

「がんばって」

「.....おう」

自分より一回りも二回りも幼い女の子に励まされて思わず苦笑したトウヤだったが、すぐに顔を引き締める。南門からメルカドへ続く一般街道に車輪の跡が無いことを確認した後、森の方角へ一寸の迷いなく駆け出す。目標はただ一つ、一刻でも早くアインを救出することだ。

《IV》

星空が明るいのは幸いだった。森の中は完全な暗闇というわけではなく、注視すれば走りながら障害物を避けられる程度の視界は確保されていた。

五感を最大限研ぎ澄ませて荷車を探すトウヤ。メルカドへ着くまでに迫り着くことができなければ、捜索は一気に困難になる。何としてでも道中でアインを救出しなければならない。

倒木や枝葉などの障害物により、生身の人間でも通り抜けるには一苦労する森である。それが荷車ともなれば、獣道のどこかで必ず何かしらに引っかかるはずだ。

森に突入して暫くも経たないうちにトウヤは捨て置かれた荷車を発見した。念のため荷台の中を確認するが、人の気配はしない。どうやらこの先からはアインを歩かせているようだ。

脳をフル回転させつつトウヤは全速力で駆け抜ける。攫った人間が逃げないように注意しつつ動いているなら、おそらく速度は速くはないはず。こちらが速度を緩めなければアインを見つけるのにそう時間はかからないはずだ。

トウヤの想像通り、荷車を発見してから十数分後には盗賊集団の姿を見つけることができた。茂みに入って周囲を警戒する盗賊の目を掻い潜りつつ、着実に距離を詰める。

「親分、コイツまだ暴れるんで、一発殴ってもいいですか？」

アインに頭突きをされた男が頭を押さえながら先頭を歩くガタイの良い男に話し掛けていた。猿轡をかませられ、両手を縛られていても尚威勢の良いアインの様子に、トウヤは少し安堵の息を漏らす。自身でも気付かないうちに緊張していたのだろう。幾分か肩が軽くなったような気がする。

「駄目だ。ミンチェの旦那からは傷一つ付けるなってオーダーなんだ。ちったあ我慢しろ。なあと、あと数時間も我慢すれば俺達あ貧乏暮らしから解放されて大金持ちの仲間入りさあ」

親分、と呼ばれた男は緊張感の欠片もない様子で鼻歌交じりに大股で歩いている。どうやら追手が来ている心配など全くしていないらしい。

「我慢しろ、って言われましても……おわっ！ んにやろ！ 俺が手を上げないからって調子に乗りやがってえ！」

アインが男に足蹴りを喰らわせた。男は落ち葉の絨毯に頭から突っ込み、それを見た仲間達はドッと大きな声で笑う。何とも緊張感の無い連中だ、とトウヤは心の内で呟く。

トウヤは今すぐにでも飛び出したい衝動を堪えて、茂みの奥から慎重に盗賊団を観察する。

得物は全員ナイフ。遠距離から攻撃できる者はおそらくゼロ。隊長格は先頭を歩く大柄な男。その他の五人も含め、注意力は散漫しているのでこちらから仕掛ける限り後手に回ることはないだろう。敵の陣形は五角形。アインはその中心に居る男に引かれて歩いているので戦闘は避けられない。アインを連れて逃げるには最低でも三人は行動不能にする必要があるだろう。

左後方からじりじりと近付きつつタイミングを計るトウヤ。アインが再び男を蹴り飛ばした。視線が五角形の中心に集まる。それを見定めるが否やトウヤは茂みから飛び出した。姿勢は低く、身体全体の動きを最小限に抑えつつ最高速度を維持する。

「なっ！ お前どこから——」

擦れ違いざまに一番近い位置にいた男の右足首を斬る。殺す必要はない。この手の小物は最低限の機動力を奪えば十分だ。

「くそっ、コイツ素早い——」

続けてナイフを取り出そうとする男の左足首を斬る。斬られた男は悲鳴を上げて膝をついた。蹲る二人の方へ慌てて駆け寄った親分を無視し、今度はアインの傍にいた男の腹部に飛び蹴りを浴びせて吹き飛ばし、アインの両手を縛っていた縄を素早く斬り落とす。

「———ぷあっ！ トウヤ、遅すぎよ！」

「うるせえ！ とにかく邪魔だからさっさとここから離れろ！」

解放された両手で猿轡を外し、トウヤに向かって怒鳴り声を上げるアイン。そんな彼女を背中にかばいながらトウヤも負けず劣らず声を張り上げる。彼の怒声を聞いてようやく状況を理解したアインは慌てて脱兎の如く後方へ下がった。

背中越しにアインの気配が遠ざかるのを感じつつ、トウヤは改めて現状を分析する。視界に映っている敵の総数は六。行動不能がそのうち二。今は隊長格と別の男がついているので向かってくるのは実質二人。得物はナイフだから近付かれない限りは問題ない。左右から徐々に距離を詰められているが、腰が引けている上に全く二人の動きが噛み合っていない。どうやらこういった荒事に関しては素人のようだ。それなら先手を取って早々に片付けるべきだ。

「止めてくれ！」

トウヤがナイフを構えた二人に突撃しようとした瞬間、野太い男の声が森の中に響き渡る。声の主——盗賊集団の親分の方を見ると、彼は怪我を負った男を抱えながら涙を流していた。

「金に目が眩んで誘拐なんぞに手を出した俺達が悪かった！ この通りだ、どうか許してくれ！」

「許せって……お前正気か？」

頭を下げた親分に倣い、動ける残りの三人も慌てて頭を下げた。あまりにも無防備な彼らを見て、思わずトウヤは聞き返す。その眼光は未だ鋭く、一分の隙も見受けられない。

「女を攫っておいて言う台詞がそれかよ」

「本当に悪かった。ミンチェの旦那に言われちゃったら断れなかったんだ」

「ミンチェ……そいつが首謀か？」

「そうさ。俺達あミンチェの旦那に雇われてる運び屋なんだ。けど、一昨日の夜に突然そのアインって名前の女を攫ってこいって命令されて……」

アインをわざわざ狙ったということは、そのミンチェという名の男はあの時の競りに参加していたのだろうか。

神に赦しを乞うが如く、天を仰いで語り始める親分を、トウヤは無言で睨み続ける。

「最初は俺達も断ろうとしたさ。けど、出来ないんだったらクビにするって言われちゃって……」

「……………」

「本当はやりたくなかった。やりたくなかったさ。でも、俺達が一生かかっても稼げるか分からないくらいの金を見せられちゃって……それに、それにさ、聞いてくれよ。コイツには婚約相手がいるんだ。だけど、なにぶん貧乏なもんで相手の親御さんから反対されてて……って、待てい！ どこへ行く！ まだ話は終わってねえぞ！」

トウヤは深い溜め息を吐くと、それまで親分へ向けていた視線をふっと外し、懐から液体の入った瓶を取り出して親分へ投げつけた。そして、慌てた様子をそれを受け止める親分の方を見向きもせず、現状を理解できずに後方で棒立ちしているアインの方にスタスタと近付く。

「行くぞ、アイン」

「……えっ？ ちょっと、その……いいの？」

「元より必要以上に殺すつもりは無かった。アイツらに戦う意志が無い以上、ここに留まる理由もねえよ」

そう声をかけるや否や、元来た道に引き返そうとするトウヤ。アインはそんな彼の背中と親分の涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった顔を交互に見た後、彼の背中を慌てて追いかけた。

「……っ！ ありがとう！ この恩は一生忘れねえ！ 忘れねえからな！」

後に残された親分は、トウヤとアインの姿が見えなくなっても感謝の言葉を森に響かせた。その手に応急薬を握りしめて。

《V》

「……ねえ」

「何だよ」

「なんていうか……その……あ、ありがと」

「……ん」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………怪我」

「えっ？」

「怪我、してないか？」

「あっ、うん。大丈夫。ちょっと縛られた時の痕が残ってるだけよ。あの人達、本当に何もしてこなかったから」

「……そうか」

「……トウヤの方こそ、怪我してない？」

「俺は大丈夫だ。心配いらない」

「そっか。よかった」

「……………」

「……………」

「……あの人達、これからどうするんだろう」

「知らん。……あの手の中は悪運だけは強いつて相場が決まってるからな。死なない程度に生き延びるだろう」

「そっか……」

「……………」

「……………」

「村に戻ったら、すぐに北門から港へ向かうぞ」

「すぐに、って、仮眠も摂らずに？」

「北大陸行きの正午の便を予約したいからな。まずは港まで向かうのが先決だ」

「さ、流石に私も疲労がピークなのだけど……」

「船室で好きなだけ寝ればいい。心配するな。ヴィラ村から四時間も歩けば港に着く」

「よ、四時間も！ ね、ねえ、そんなに急がないと駄目なの？」

「……さっさとメルカドから離れた方が良い。今回は素人集団だったから良かったものの、このまま呑気にメルカドに戻ったりなんかしたらいつ同じようなことが起きるか分かんねえだろ」

「……そう、よね。うん、解ったわ。我慢する」

「良い子だ。ほら、森を抜けるまでもう少しだぞ」

「……………」

「……………」

《VI》

「此度は本当に御苦勞をお掛け致しました。いやはや、御無事で何よりです。御詫びと云っては何ですが、報酬金を倍に増やさせてもらいました」

村長がトウヤに麻袋を手渡した。袋一杯に詰め込まれた金貨のずっしりとした重みを感じる。

「ありがたく頂戴します。それでは、そろそろ俺達は此処を出ようと思います」

「せめてもう一晩だけでも……などと悠長なことを申し上げるわけにもいきませんか。どうぞ、向こうに馬車を用意してあります。運搬用の馬なのであまり速度は出ませんが、それでも歩くよりかは随分良いでしょう」

「重ね重ねのご厚意、恩に着ます」

長く深かった夜がもうすぐ明けようかという時間。村へ無事に戻ってきた二人は村長から依頼完了の報酬を受け取り、そのままヴィラ村を発とうとしていた。

「ここから港まで、馬車なら三時間もかからないはずです」

「そうですね。港へ到着したら、北に渡ろうと思っています」

トウヤの言葉を聞いて村長は少し顔を^{しか}顰めた。

「……そうですか。既に『革命』は終焉を迎えたとはいえ、まだまだ治安の悪い地方はたくさんあると聞きます。どうか無理はなさらぬよう」

「はい、お気遣い感謝します」

北門に到着すると、緑色のツナギを着た若い男がブラシを片手に馬の世話をしていた。トウヤとアインの姿に気付き、頭を下げる。この青年が二人を港まで運んでくれるらしい。彼に促されるまま、トウヤとアインは馬車に乗り込んだ。

「村長さん、お元気で！」

アインが村長に手を振ると、村長もそれに答えて手を小さく振る。その瞳はとても優しいものだった。

「では、出発しますよ！」

荷馬車の前方に座った青年が左手を振り上げる。直後、キレの良い鞭の音が聞こえたと同時に馬車はゆっくりと動き始めた。村長の視界から少しずつ馬車の姿が遠ざかり、やがて見えなくなった。それを確認して、村長は小さな欠伸を一つした。

舗装されたなだらかな街道を、規則的な小さな揺れを起こしつつ二人を乗せた馬車は進む。

「疲労感と乗り心地の良さで今すぐにでも眠れそうだわ……」

「……辛かったら、寝てもいいんだぞ？」

馬車が動き始めてからものの数分も経たないうちにアインがうつらうつらと船を漕ぎ始めていた。

「ん……もうちょっと……この眠気を楽しみ……たい」

「……ったく。本当にガキみたいな奴だな、お前は」

夜更かしをしようとする駄々をこねる幼子のような動きを見せる彼女の肩に手を掛け、トウヤは優しく寝転がした。幸い、大人が横になって寝られる程度の空間は十分に存在する。間もなくして、アインは穏やかな寝息を立て始めた。

込み上げる眠気を堪え、トウヤは今後のことに思いを馳せる。長らく一人旅を続けてきたが、こういうのも悪くないのかもしれない。アインは記憶にある妹とは違って驚くほど口が悪い。今後、喧嘩をすることは何度もあるだろう。それでも、きっとこれまで以上に充足感の得られる旅になることは確信していた。いつまで続くか分からない二人旅だが、せめて一緒に居る間はこの小

生意気で呑気な少女を護ってやろう。そう気持ちを新たにしたところで、トウヤは猛烈な睡魔に襲われ、ゆっくりと瞼を閉じた。

夜が明け、港へ到着するまでの時間、二人は寄り添うようにしてぐっすり眠っていた。

了

—— あとがき ——

メ切ギリギリで修正を加えようとしてはいけない（戒め）

昂にしては珍しく、ファンタジックな話でした。題名もそれっぽくしたものの……今作品だけでは何か題名詐欺っぽい。

ちゃんと続編を書けるようにフラグを撒いておいたものの、多分続かない。続編は適当に妄想して脳内補完してください。

ともあれ、何とか無事に書き終えたので昂は先日購入した『うたわれるもの偽りの仮面』のプレイに集中します。以上。

0

かつて栄華を誇ったニューヨークの街並みは、見る影も無かった。エンパイアステートビル、クライスラービル、ツイン・タワーの貿易センター。無数にそびえ立つビル群は全てへし折れ、その残骸をあちこちに晒している。

あちこちで炎が吹き上がっている。普通なら聞こえてもよいはずの救急車や消防車のサイレンの音は聞こえない。当然のことだった。すべてが人工の街には既に、助けるべき人などはどうにいないのだ。

遠く、数キロ先のリバティー島にはその身を横たえた自由の女神が見える。その表情は穏やかだ。常に傍にいた人々がいないことを知って休息を享受しているかのように見えなくもない。そのお腹の辺りに、何かの巣が作り上げられ、禍々しい卵のようなものが産みつけられていること。それを守るようにいる、鱗をまとった無数の異形の生物、`カイジン`の姿を除けば。

崩れて、瓦礫の丘と化したビルから、おれたちはリバティー島を見ていた。振り向くと、三人の男女がぼろぼろの出で立ちでおれと同じように巣と化した自由の女神を見ている。

「天下御免のM・A・M・∞も今じゃ四人か。丸を一個除いた方が良いかもしれねえな」

指先から炎を灯し、`バックドラフト`はタバコに火を付けばやく。彫りの深い顔に浮かぶ疲労を笑みで覆い隠す。かつてはぱりっと糊付けされていた防弾の紳士服はよれてあちこちがほつれ、^{アナライザー}解析装置の入った眼鏡にはヒビが入っている。

バックドラフトが煙草を啜えた瞬間、音も無く少女――^{バオフェン}暴風が彼の懐へと飛び込む。勇ましい名と裏腹に子供っぽい鋭角的ツインテールが揺れる。一切の無駄の無い足さばきと体重移動、踏み込みが、小柄な体躯からは想像もつかぬ俊敏さを見せる。タバコをフィルターギリギリで両断する青龍刀。落ちた煙草をチャイナドレスの深いスリットから覗く足が踏み消した。彼女も無傷では無く、白磁の様な脚には無数の細い傷が走り、胸当てはざっくりと切り裂かれている。

「それじゃゼロになっちゃうじゃん。後、アンタ未成年っしょ」

「ちびっこが、ヤニ嫌いってだけだろう」

「そこまでにしておいたほうが良いですよお」

間延びした少女の声。それと同時に、いがみあうバックドラフトと、^{バオフェン}暴風の間の空間が揺れる。陽炎が徐々に像を結び、二メートルほどのサイズの鎧が姿を見せる。テクノロジーによって再現された、現代のニンジャがそこにいた。彼女は両手に小型の拳銃を構え、二人の喉元へと突きつけている。ゾウだって一瞬で昏倒する量と威力の麻酔ダーツが装填されていることをバックドラフトも、^{バオフェン}暴風も良く知っている。

^{アクティブ}能動的ステルス、弾道ミサイルにすら耐えうる装甲。そして鎧からは想像も出来ない携行量の兵器を備えた^{エグゾスケルトン}強化外骨格。彼女を怒らせれば現代テクノロジーの全てを相手取るに等しい。

「じゃれあいだよ、`クノイチ`。な？ おちびちゃん」

「う、うん。そだね。仲良し仲良し。うははは」

「そうでしたかあ。それなら、良かったです」

カシャリと頭部のアーマーが展開し、クノイチの顔が見えるようになる。どこか眠そうな表情のまま、彼女は装甲の中に麻酔銃を格納。そのまま両腕に大口径の機関砲を取り出す。

おれは思わず苦笑する。この中のだれも、彼女には逆らえない。バックドラフトの解析装置や防弾スーツ、^{バオフェン}暴風の青龍刀といったガジェットも皆、彼女のお手製だ。

「それで、作戦とかはあるのか、`スレイブ、`」

話を切り替えるように、バックドラフトはスレイブ、つまりは俺に問い質す。

「ここが`カイジン、`どもの最後の、最大の砦だ。小手先でどうこうできる相手じゃあない……総力戦だ。どちらが先に倒れるかの、地力勝負だ」

一瞬の沈黙。それを破ったのは^{バオフェン}暴風だった。

「いーんじゃない。決死隊。思いっきりカイジンどもをぶった斬れるんだったら、文句ないよ」
少ししてから、バックドラフトも、軽く肩を竦める。

「薄々勘付いてはいたよ。作戦立案出来るメンバーは、もういないんだ」

「計画とか、私もやっていたんですけど。分は悪いですけど……希望的観測で、7対3が良い所でしょう」

ほんの少し肩を落としてクノイチも答える。けれども、そこに躊躇いは無い。三人へと軽く拳を突き出した。三人もそれに応じて拳を突き出す。声をそろえて、おれたちは宣誓する。おれたちを繋ぐ絆だ。くじけそうな時に何度も救われた言葉だ。「前に進む者のみが、勝利を手にする」

全員の顔を見渡す。疲労、苦痛、そして希望のないまぜになった、いつも通りの頼もしい表情だ。自然とおれのからだにも力が漲って来るのが分かった。何でもやれるという全能感に浸りながら、おれは続ける。

「……そう言えば、おれたちはずっと本名を名乗らずにここまで来た。全部終わったら、名前を教えあおう」

「へ？ いいけど……ああ、なるほど。シボーフラグってやつ？」

^{バオフェン}暴風の言葉にバックドラフトが眼を剥いた。

「バカ野郎。台無しじゃねえか。誰に教……クノイチ、^{ギーク}テメエだな！ ガキに変な事吹き込みやがって！ くそおたくめ！」

一気に肩の力が抜けてしまった。少し遅れて、笑みが浮かぶ。他の三人も同じだった。安心感が胸を満たす。最後の戦いを終えても、帰って来れる。そんな思いが湧き上がる。

「緊張がほぐれたな。よくやった、^{バオフェン}暴風。真っ先にお前の名前を聞いてやる……皆、行くぞ！」

2001年、9月11日。それはニューヨークを含め、世界全土8つの都市に突然現れた。まるで日本の特撮の悪役の様な姿をした`カイジン、`は、瞬く間にその都市を破壊しつくした。

それが俺たちの生まれた日だ。8つの都市にいた生き残り。おれを含めた8人は、ある超人的な力に目覚めた。おれと暴風は卓越した身体能力。バックドラフトは発火能力、クノイチはスーパーコンピューターも打ち負かす頭脳に。そしておれたち8人は終結して、`カイジン、`たちへ復讐を誓った。

組織の名は^{マン・アフター・マン・インフィニティ}M・A・M・I^{マン・アフター・マン・エイト}。最初はM・A・M・8と呼ばれていた筈が、いつの間にか8は∞、無限へと変わっていた。

個人的な復讐は、^{きぼう}世界を救う無限の可能性へと変わったのだ。

おれたちは、誰からでもなく、力強く地面を蹴った。カイジンもおれたちに気付くがもう遅い。クノイチの両手に構えた機関砲から放たれる無数の弾丸がカイジンの足を止め、バックドラフトの放つ業火が消し炭に変える。炎を突破してきたカイジンは、^{バオフェン}暴風の振るう青龍刀が両断する。それさえも潜り抜けて来る猛者はおれの相手だ。

「スレイブ！ 抜けて来たよ！」

「任せろ！」

近づいて来たカイジンがあぎとを開き、鋭い牙を剥いて襲い掛かる。前に出て、おれは腕を盾にするように突き出す。鋭い牙が、腕に軽く食い込む。だが、それだけだ。

「邪魔だ！」

空いている腕でカイジンの頭を掴み、地面に叩き付ける。そのまま頭めがけてストンピング。

いかなる兵器も、武器も。俺の前には無意味だ。

「怯むなよ！」

おれたちは前へと進み続ける。ゴールである、カイジンの巣へと。憎むべき敵へと。

ふと脳裏へあることが浮かぶ。カイジンを絶滅させたら、それから俺たちはどうなるだろうかと。

おぼかなハリウッド映画であれば、エアロスミスだとか、エミネムだとかの曲が流れてエンドクレジットだ。売れば続編も作られるかもしれない。

でも、現実はどうだろうか。

多分、これから世界は平和になって、おれたちのような人間は必要なくなるだろう。おれたちはどうなるのだろう。先は見えないが、みんな同じの筈だ。倒すことで全てが解決する存在など、あり得な。いや、あり得てはならない。

おれたちは叫ぶ。憎きカイジンを前にして。全てを奪われた怒りを発散させるために。己を奮い立たせるために。そして。

かくして、世界は救われた。

エミネムもエアロスミスも、流れなかった。

1

ぴぴぴ、とアラームが部屋に響いたことで、今まで見たものが夢であったようやく気付く。同時にこうも思った。すべてが夢であってくれたらいいと。

チープな電子音の鳴る目覚まし時計を叩くと、金属がへしゃげ、安っぽいプラスチックの割れるいやな音が響く。アラームよりもその音の方が目覚めに効いた。

「……ああ、くそ」

ゆっくりとベッドから身を起こし、俺は叩いた目覚まし時計へと視線をやる。正確には、加減を間違えてスクラップと化した目覚まし時計の残骸へと。これで何度目だろう。

見慣れた部屋を見回した。壁にかけられた無数のトロフィーや勲章。ポスターや2001年、9月11日、すべてが変わったあの日を初めとしたいくつもの新聞の切り抜き。日に焼けて乾き、茶色くなった記事をそっと撫で、冷蔵庫へ向かう。

シリアルに牛乳を注ぎ、スプーンでかき回して流し込む。ただそれだけに、随分と時間がかかった。少なくとも、CNNのニュースをたっぷり半時間見れるほどには。ワインレッドのスーツに、ブロンドの髪をしたアナウンサーがニュースを読み上げている。マンハッタンでバイク泥棒が急増している。捜査にも関わらず、犯人は捕まらない。エトセトラ、エトセトラ。

「"アイアンマン"が現実になる時が来たのかもしれませんが」

そこで俺は顔を上げてニュースに集中した。もしかして、とも思った。分厚い強化外骨格に身を包んだ少女を思い出す。最初に会った時の彼女は『オズの魔法使い』に出て来るブリキのような不細工な鎧を身を纏って空を飛んでいた。確か、2002年のはじめだ。

「とっくの昔に現実になってるぜ。十年以上前に」

思わずぼやいた。返事をする者はいない。独り暮らしの間に身に着いた悪い癖だった。

「サムライ・コーポレーションが昨日発表した多目的補助スーツ「ゲニンⅠ型」は、社長であるサヨコ・ヤカモト自身が纏ったアーマーから着想を経たものであり、強力なパワーアシストから、幅広い分野での活躍が期待されています。マンハッタンでの発表では――」

説明と共に、ばかでかいスクリーンに映像を映しながらプレゼンを行う女性の姿があった。クノイチ、サヨコ・ヤカモトだ。アーマーに身を包んでいたローティーンの頃の面影を残しながら

らも、大人の女として、ぱりっとしたスーツに身を包んで、多くの人々を前に話をしている。自信で疲れを覆い隠した、あの時と同じようにどことなくゆっくりとした口調。

「ここまで来るのに、随分と苦労しました。なにせ、昔のように放棄された最新鋭の戦闘機や戦車を分解なんて、もう出来ませんから」

クノイチ、もといサヨコの言葉に会場がどっと沸いた。おれも思わず唇の端を歪めた。ノーテンキな聴衆はグラウンド・ウォーを忘れ去っている。だから、冗談だと笑える。

全て事実だった。堂々と犯罪行為を言っただけの彼女の肝っ玉の大きさには感心するしかない。

テレビ越しの再開を懐かしむ一方で、彼女の視線から逃れたいと思うようになった。液晶の向こうにいる以上、その視線はカメラへむけられたものであると理解したうえで。

気が付くと、リモコンの電源ボタンに手を伸ばしていた。指先でつつくように、そっと電源を落としたのは、これからの出勤に備えて、現代の鎧たるビジネススーツに着替える必要があったからだ。そう思うことにした。

外に出て、目の前に広がるのは二つ。海近く都市部へと近づくにつれて高さを増す建物。内陸の郊外へ広がるのは、キャンピングカーややプレハブ小屋といった粗末な家屋の並ぶダウンタウン。おれの家はその中間、正確に言えばぎりぎり都市部というような場所だった。少なくとも、ちょっとした庭が合って、中型のスポーツバイクを維持できるくらいには、まともな生活を送れている。莫大な褒賞の使い道が分からないのだ。

そう言えば、と。このバイクも彼女の産物ということ思い出す。複雑な心持になりながら、鞆に押し込んであったハンドルキーを差し込んだ。チタン合金製の、伸縮可能なそれは時に警棒代わりにもなる優れものだし、バイクそのものもM o t o G Pで優勝を狙えるだけのスペックがあるという。今ではその機会も無く、おれの最低限の手入れによって通勤用の足となってしまっている。

「悪く思うなよ」

ぶんとアクセルを吹かし、発進。良い加速だし、素人のおれにも良いバイクであると分かる。ほとんどの日を家と職場の往復で終えるそいつに同情を覚えなくも無い。

「使える場所があるだけ、マシなんだ」

小さく呟いた言葉は早朝のスクランブルに飲み込まれた。

通勤時間は、そのバイクの性能もあいまって、それほど時間はかからない。目指す場所は、海沿いにある、海兵隊の基地であるキャンプ・グラウンドゼロ。遠くに倒れたままの自由の女神像が見えた。倒れた左半身は波に洗われてほとんど削り取られた結果、単なる細長い筒のようになっている。

マンハッタンも随分と様変わりしたものだと思う。なにせ、経済の中心から、世界を変えた災禍の中心へ。そして今では自由と平和のシンボル——有体に言えば、軍のシンボリックな位置へとリバティ。アラモを忘れるな。真珠湾を忘れるな。そして、自由とマンハッタンを忘れるな。新たなスローガンのお題目へと変わったのだ。そのおかげで、志願者は減ることが無い。それが良いことなのか悪いことなのかは、おれの考えるところではなくなってしまった。

門が見えて来る。と言ってもフェンスのような簡素なものだった。ゲートのようなものはなく

、入り口に二人、小ぎれいな野戦服姿でライフルを肩に引っかけている、若い警衛の兵士が二人いるだけだ。速度を落とすと、警衛は大儀そうに近寄ってきた。

「民間人の方は許可証を。軍関係者なら I D カードを」

気の抜けた声だった。マンハッタン。惨劇の地を守る者がこんな有様で良いのだろうか和一瞬思う。けれども、そんなことを言う資格もおれにはない。

「ほら、早くして」

警衛の急かす様子に、おれも I D カードを渡す。衛兵は右腕に取り付けた、古めかしい S F に出てくるようなウェアラブルデバイスを起動し、リーダーに I D カードを通す。ロゴをちらりと見ると、サムライ・コーポレーションの名があった。

やがて警衛の男はふんと笑っておれを見た。ずけずけと、プライバシーもくそもなく踏み込んでくるような気安さ、そしてねっとりとした好奇の目だ。またか、とおれも小さく鼻をならした。

俳優を見る目だった。それも、大ヒットした奴では無い。家を舞台に泥棒退治をするコメディ映画とか、予定を大きく遅れて完結した有名スペースオペラ映画の子役(赤いサーベルと黒いマスクとマントのあれだ)。その何年後かを見ているような視線と言うと一番しっくりと来るかもしれない。

「今日は何の用事だい、ヒーロー」

ほら来た。I D カードを突き返しながらか、警衛の男はにやりといやらしい笑みを浮かべてくる。

「そうだな。ドーナツとコーヒーを胃に収めて、それから対カインジンの講習だ」

「そりゃいい。頑張ってくれよ」

警衛の男はいやらしい笑みをさらに深くして、おれの肩をパンと叩いた。

「ありがとう」

精一杯の余裕、言い換えるならば虚勢を張って、おれは警衛達を残して、バイクを走らせる。

この風景も、普段通りだった。若い、様々な人種の兵士たちが フィジカルトレーニング P・T の一環として、アスファルトで舗装された基地の内部を走り。即席の倉庫のような安っぽい建物の中で射撃演習に励み。地面にチョークで描かれたフィールド、そして車輪の付いた即席のバスケットコートでゲームに興じる。いつも通りの風景が流れてゆく。

じわりと、地面からしみ出す水のように感情が滲むのが分かった。けれども、それをどう表現するか悩んでいるうちに、自身のオフィスへと着いてしまった。

バイクを適当なところに停め、公共の建物らしい、簡素ながら権力を発散させる建物へと足を踏み入れる。

ジェームズ・"スレイブ"・スコット特務大佐。それがあの戦争の後、おれに与えられた立場だった。カインジンドもとの戦いを終えたおれたちを待っていたものは、次なる選択だった。

すべてを捨て、市井の中に戻るか、国連(実質的には、ステイツだろうが)、管理された兵器として生きるか。もしも第三次大戦が起こるとすれば、それは M・A・M・∞ の力が振るわれるだろう。誰もの中に、そんな予感があった。

クノイチは前者を選び、俺は後者を選んだ。しかし、バックドラフトと^{バクドラフト}暴風は姿を消した。正確には、事故で死んだことにされた。

シビル・ウォーのようにヒーロー同士が戦うような未来も、当然なくなった。

そして、社会は平和とは言い切れないまでも、ある種の安定があった。あちこちをカイジンに破壊しつくされ、復興に追われることで、戦争などという余裕は、ほとんどの国でどうに消え去ってしまった。

想像通り、ヒーローの必要ない世界だった。大きな危機は話し合いによる折り合いや妥協と言った政治的駆け引きで解決し、そして戦争が起こったとしても、冷戦構造終結後の民族対立のようなものがほとんど。アメリカをはじめとするPKFの出動でなんとかなるようになるものばかりだった。

直線ならば自動車並みの速度で走れる脚力も、戦車を軽々と持ち上げることの出来る腕力も、その砲にすら耐えうる頑強さも、必要のない世界。

おれだけが、2001年のあの日に置き去りにされている。そんなズレを捨てきれずに、おれは生きている。

けれども、死ぬにはこの世界はあまりに優しくかった。あまりにも、^{ヒーロー}英雄の肩書は重たく、強かった。自殺でもすれば国葬になるんじゃないと思うくらいだ。さすがにそれは面目ない。

広い講義室。その教壇に俺は立っている。席には、一様に頭頂部を残して髪をそり上げた、逞しい精悍な男たち。海兵隊の兵士だ。

何人かは眼を輝かせているが、ほとんどは退屈そうにおれの方を見ている。いや、聞いてくれればありがたい方で、ほとんどは聞き流しているようだった。それを悪いとは思わない。今では使うことの無い知識だからだ。

「カイジン。そう呼ばれた者は、現在では倒せない相手ではなくなっています」

「ヒーローがいるものな」

口の悪い兵士の一人の言葉。それに笑いがあちこちで起こる。そいつを無視して、話を続ける。

「適切な装備と戦いさえ身に着けていれば、普通の兵士でも」

おれに与えられた、唯一と言っても良い仕事がこれだった。カイジン対策専門家。世界で最も——いや。3番目くらいにカイジンを知るおれは、こうして教壇に立ち、時には下品なバラエティ番組の雛段や三流ゴシップ誌で、カイジンについて語る。

「彼らの鱗は強靱で、動きも素早い。拳銃弾程度であれば、ものともしない。けれども、強力な弾丸を連続でぶつければ、動きを鈍らせることが出来る。ショットガン、大口径のマシンガン。動きを止めて、グレネードなどの爆発物でとどめ。これが基本戦術になる。1匹の怪人に対し4人があたれば上手く行く」

言っていて、乾いた笑いが込み上げて来そうになることをどうにか堪えて話を続ける。数年前までならば真に迫るものだったかもしれないが、今ではこんな話をまともに受け取る人間などどこにもいない。カイジンなど、どこにもいないのだから。

まるで、ゾンビの研究者にでもなった気分だ。もしくは、ヴィラン研究者か。いないものにつ

いて大真面目に語るコメディアンたち。彼らは「そんなものはない」と自覚しているだけ、おれよりマトモだ。

最前列に座り、やたらと眼を輝かせる数人を除き、にやにやとしながら、あるいは退屈そうに兵士たちは講義を聞いている。

これも慣れたことだった。最初の頃おれがここに立った時の、憧憬や尊敬にも似た視線はほとんどない。腕時計に目をやる。5分ほど早かったが、切り上げることにした。未来と才能ある若者を相手に、いつまでもノスタルジーに浸るのは悪い。

2

仕事を終えたおれは、軽いP・Tをこなしてから(当然、独りだ)すぐにダウンタウンの小さな中華料理屋へと足を運ぶ。

「まだ、準備中だ。時間通りに来てくれ」

人のいない店内。カウンター席に腰掛けて新聞紙を読む赤髪の店主が、顔を上げることもなく、ぶっきらぼうに告げる。それを無視して、店主の隣のカウンター席に座る。油があちこちに跳ねた、お世辞にもきれいとは言えない厨房では、忙しそうに、シニヨンでまとめた長い髪を、さらに頭巾に押し込んだ若い女性が料理の用意をしている。

「回鍋肉と酸辣湯、それから白飯も」

店主は顔を上げず、厨房の奥にいる女性に「リン!」と呼ぶ。女性はコクリと頷いて手際よく調理に回った。

「昨日の雑誌、読んだぜ。色々と口が回るじゃないか、ジェームズ……いや、ヒーロー様よ」

「そいつはお前もそうだろう。“バックドラフト”」

皮肉の込められた言葉。おれは苦笑で応える。「バックドラフト」そう言うと、店主は新聞紙から顔を上げて、露骨に顔をしかめてみせた。

「前にも言ったはずだぜ、ヒーロー様。そいつは死んだ。M・A・∞の美男子バックドラフトさまも、クソガキ ^{バオフェン} 暴風 も、とっくにおっ死んだ」

「よく言うよ、そんな髭面で。悪かったよ、トビー」

トビー・キングマンと ^{リャオリン} 廖零。それが、M・A・M・∞の生き残りである、バックドラフトと ^{バオフェン} 暴風の名前だった。

「悪いと思うなら、一時間ほど後で来てくれ」

「そうは言っても」

おれとトビーの前に、白飯と、赤いスープが並べられる。加えて、大皿に乗った回鍋肉もだ。取り皿も置かれている。

「もう作っちゃったから。ほら、アンタも食う」

ずいとカウンターから身を乗り出して零は笑う。右の頬は、うっすらと赤く、火傷の痕のようなものが残っていた。トビーは軽くその頬に口づけをして、いつも通りの憎まれ口を叩く。

「まったく。お前が甘やかすから、ヒーロー様は調子に乗るんだ」

「気にしないでいいよジェームズ。コイツは他の男に構うのを見て妬いてんの、最近ゴブサタしてるからさ」

零の意味ありげな笑みに、おれは苦笑を返すことしかできなかった。ぶつくすと、けれどもどこか楽しそうにトビーと零は話をする。曰く、ようやく料理屋が軌道に乗り始めた。曰く、夫婦生活は円満だ。曰く、兵隊どもはバカスカと食って量を増やせと要求してくる。

「そこで俺は言ってやったのさ。大盛を作るにや、火力が足りねえ。お前らがもっと食って、もっとデカイコンロでも買えるくらいに店を儲けさせろってな」

「っはは。お前も丸くなったな。前なら両手から炎でも吹き上げてただろうよ。薄い葉野菜を黒こげにしたはずだ」

「このバカ。マジでやりかけたんだ。慌てて向こう脛を蹴って止めてやらなかったら、ジェームズの苦勞もなくなってた」

「変わりにお前が本気を出した。見ろ、まだアザが残ってる」

「仲がよろしいようで何よりだよ。充実しているらしいな」

トビーは椅子に足を載せ、ズボンの裾をまくりあげておどけてみせる。食器を片付けながら、零も小さく笑った。

「手は荒れるし、おっばいは大きくなるし、あまり激しい運動が出来ないから、太っても来たけれど」

「あの時の傷か？」

マンハッタンでの最終決戦。巨大なカイジンを前に、零は脚に大きな怪我を追っていた。ほとんど、歩くこともままならないような怪我だった。それが功を奏して、二人を「死んだ」として表舞台から姿を消すのが上手く行ったわけだが。

零は「違うよ」と笑いながら言い、首を横に振った。その顔は、はねっ返り娘のそれではない。母親の顔だ。

「4か月なの。男の子」

「だから、これからしばらくの間は休業ってことになる」

じわり、また俺の腹の底に言い表せない、しみ出す水——いや、ドブかクソのような感情が滲んで広がってゆくのが分かった。無理やり押し込んで、冗談に変える。

「そうか。あの小生意気な娘と小僧が、パパとママか」

「まあな。考えたことも無かったけれど」

屈託の無い笑みを浮かべ、小突いて来るトビー。それがとても羨ましく思えた。歳はさほど変わらないし、しぐさも昔のまま。なのに彼らがおれよりもずっと成長しているように見えた。

「あ、ああ。そうだったな。名前は決めたのか？」

零はトビーと視線をかわし、今からとっておきのジョークを教えると言う風に、ふっくらとした唇を歪めて笑う。

「ジェームズっていうんだ。アンタも、知ってるっしょ？ 世界を救ったヒーローの名前」

「寝る前に毎晩、お前と、俺たちの活躍を聞かせてやる。現代のアラビアン・ナイトにしてやるくらいにな」

思わず、添えるように持っていたグラスに力が入った。ぱりんと、飴細工のようにしてそれが砕ける。即席の刃物と化したガラスの欠片は、手に刺さることは無い。痛みが感情の渦を和らげ

ることは無かった。

「ああ、おい！」

一瞬、怒鳴られるのものだらうと思った。けれども、トビーは驚いたように俺を見て、その手を引っ張った。

「零、ホウキを持ってこい。怪我は……なさそうだな。お前の事だから」

「ああ……こいつだけが取り柄なんでな。弁償するよ……じゃあ、おれはそろそろ仕事に戻るよ」

トビーの手を軽く押して、おれは立ち上がった。ポケットから数枚の10ドル札を机の上に置いて、そのまま背中を向ける。

「スレイブ！」

かつてのヒーローの名前、おれの名前。トビーの口から出た言葉を聞いて、思わず立ち止った。振り返りはしない。けれども、その声は中華料理屋の無愛想な店主、トビー・キングマンではなく、バックドラフトのそれだった。言葉を探るように呻き、彼はこう続ける。

「その……何だ。前に進む者が、勝利を手にする、だ」

「……前って、どこだろうな」

苦笑と共に出て来た言葉。口の悪い、不器用な彼の精一杯の励ましかと分かっている、意地悪な考えを口に出さずにはいられなかった。

前とは何だ。分かり切ったことだ。ヒーローであることに見切りを付け、ひとかどの平和を手に入れることだ。社長になって、大勢の前でプレゼンし、成果を世に広める事だ。あるいは、街の片隅に料理屋を開いて、そこを切り盛りして、夫婦になって子供をつくることだ。

だが、本当にそうだとしたら、おれのこの数年間は何だったのだ。三流の下劣で低俗なテレビファットキャットや雑誌に出て、ヒーローおたくやカイジンおたくを満足させ、見世物見世物になった。勲章や賞状、かつての活躍を切り取った新聞を見返して、静かな優越感に浸るのが唯一の楽しみだったおれがあまりにも惨めじゃないか。数年間をドブに捨てたと認めることになるではないか。

お前らはまだいい。年がら年中頭が良くて困ることは無い。人間たいまつになっても、元に戻ることが出来る。脚が速い？結構じゃないか。おれはひとかどの幸せを手に入れることさえ、難しいんだ。カイジンと戦う時よりもはるかに。ヒューマン・トーチ

ちょっと加減を間違えただけで物を粉々にして、肩をぶつけてしまえば相手を骨折させ、飯を食うにも時間がかかるなんてことはない。

コントローラーを握ってテレビゲームに熱中することも、女を抱くこともおれは出来ない。

ちょっとしたしぐさにも気を遣わないと生きて行けない。

ヒーローの身体は、力は。この平和な世界で生きるにはあまりにも強大すぎる。

底なし沼に入ってしまったような気分だった。どこまでも冷たい泥に沈んでゆくような感覚があった。

もしもこれがおバカなハリウッド映画の続編だったらと思う。そうであれば、カイジンの残党がこの辺りでやって来て、落ちぶれていたおれが活躍するとか、そういう展開もあるのかもしれない。やたらと眼を輝かせておれの話聞いていたあの兵士たちが意外な活躍を見せるかもしれない。

すべて、夢想だ。世界は続くし、変わらない。

この全てをぶちまけてしまえば、いくらかスツキリするかもしれない。けれども、そうしてしまえば全てを認めてしまうことになる。

ヒーロー

道化として生きてきたことさえ間違いだと認めてしまい、すべてを失うことになる。

それだけは、嫌だった。

言葉にすればこれだけ使うが、実際のところはほんの数秒の逡巡だった。トビーと零の視線が、背中に刺さるのが分かった。

ちょうど開店の時間だったようで、俺の脇を通るように何人かの男女が店内に入って行く。わざと明るい声を張り上げた。

「ごちそうさま。美味かったよ。赤ん坊が生まれたら、俺にも顔を見せてくれ……名前のことは、光栄に思うぜ」

「ああ。気をつけろよ、ヒーロー様」

返事変わりとして、おれは軽く手をふった。それだけでちょっとした風が吹き、ノレンがゆれた。

3

トビーの店から出たおれは、近場のコインパーキングに停めてあるバイクへと向かう。人通りのあまりない道路。それにも関わらず、おれの腰骨あたりを何か後ろから擦っていったような気がした。

一瞬、誰かがぶつかったのかとも思った。けれども、おれの周りに人影は無い。軽く首を傾げたところで、ポケットに挿し込んでいたアクセルキーの感触が消えたことに気が付いた。

ぶおお！ と力強いエンジンの音が響く。聞き慣れた音だった。ほとんど毎日乗り回すバイクの音を、忘れる筈がない。

うすっぺらい木の板の割れる音が聞こえた。コインパーキングの、バーが真っ二つになって、おれのバイクが飛び出す。少年が乗っていた。薄汚れた服に、細い体躯。几帳面に、ヘルメットを被っているから顔は見えない。ハンドルを握る少年の後ろには陽炎のようなゆらめきが、淡く細い輪郭を浮かべている。

もうひとりいる。透明人間だ。おれは確信した。なんてことだ。おれたちの知らない、^{超人}MAMが存在する。すくなくとも、ふたり。後頭部を殴られたようなショックだった――

当たり前のことになぜ気付かなかったのか。

誰が、異能を持つ人間が世界に8人、しかいない、と決めたんだ。

悔しい事に、その泥棒のほうがおれよりも反応が速い。もう一度アクセルを吹かせたかと思えば、まるで手足の延長のようにバイクを操っておれの真横を通り過ぎてゆく。

驚き、呆れ、己のうかつさへの罵倒。あらゆる感情が過ぎ去り、最後に喜びが来た。思わず込み上げて来る笑いを、どうにか抑えた。

――良い度胸だ。このおれに、スレイブにこそどろ紛いの行為をやるとは。

ネクタイを緩め、おれは軽く跳ねる。久しぶりの感覚だった。全身に込み上げて来る力を出し過ぎないようにセーブしながら、力強く一步を踏み出す。ブランクがあったとはいえ、それでも

軽快に速度を上げる事が出来た。カイジンと対峙した時と同じような高揚感がおれを満たす。

全能感だ。どこまでも行けるといふ歓喜にからだは震えた。

規格化されたフォードを、トヨタを追い抜く。交差点は信号が赤なのも気にしないで突っ込み、トラックの車体下を、スライディングで潜り抜ける。周囲の目を思い出す。完全にとは言えないけれども、全能感は薄れる。

何よりも、こそどろたちの運転はなかなかのものだ。事故も起こさず、バイクの小回りを活かしてちょこまかと逃げまわっている。おれの足を以てしても、追い付くのは難しい。

「なかなかやるじゃないか」

思わず笑みがこぼれる。けれども、おれを御するには程遠い。周囲の眼を避けることも兼ねて、手ごろなビルとビルの間にある路地に駆け込み、跳躍する。壁を精密な力加減で蹴り、反対側を蹴り、三角跳びの要領で一気に壁を駆け上る。

ものの数秒で、おれは屋上までたどり着いた。見晴らしは悪くないから、じきに見えてくるはずだ。

マンハッタンの郊外へと走る、粒のようなバイクをも、補足するのは難しい事じゃない。目当てはすぐに見つかった。速度は落ちていたし、通るルートも単調なものになっていた。

とはいえ、それなりに距離はある。道こそ綺麗に格子状になっているとはいえ、バカ正直に追いかければ、間違いなく逃げられるだろう。

ビルの高さ、感覚はまちまち。けれど、「いける」と思った。

軽く助走をつけ、一気にその縁を蹴って跳躍。隣のビルへと飛び移る。転がって勢いを残したまま立ち上がり再度加速。跳躍。次は少し高い。跳躍して窓の縁を掴む。

まだ夕刻というのに、若い男女がベッドの縁でキスをしている。それを見なかったことにして、背筋と腕の力で一気に飛び上がり、マンションの屋上の縁を掴む。

同じことを数セット繰り返し、バイクの向かう方向へ、先回りするように走る。距離はどんどん詰まって行ったし、彼らの行く場所は概ね見当がついていた。

徐々に低くなってゆくビル。豆粒ほどだったバイクと少年らの姿も大きくなる。最後に大きな跳躍をする。

後ろに乗っていた透明人間——いまは姿を見せているが、少女だ。が、落下してくる俺を見て眼を剥いたのが分かった。

「ちょっと、あれ何！」

運転する、浅黒い肌の少年はそしらぬ顔だった。良い事だ。運転中の余所見は事故の元だからな。

「鳥か、飛行機か」

お約束をありがとう。そう思いながら、おれは体勢を整え、身を丸めるようにして、片膝と両手の三転着地を決める。衝撃でアスファルトが割れるが、ここらあたりの通りであれば、気にするものもないだろう。運転する少年も、良い反応をした。バイクを横倒しにして、その窪みを避け、急停車をする。

「いいや。MAMさ。スーパーマンと言ってもいい」

古くから続くお約束の台詞を言いながら、おれはスーツについた埃を軽く払って笑う。少年は警戒して、アクセルキーを抜いて手首をスナップさせる、動きに連動して、即席の警棒になる。もう仕組みを理解するとは呑み込みが早い。

「誰だ、アンタ」

「そいつの持ち主だよ。返してくれないか」

「やなこった！」

少年が警棒を担ぐように構え、じりっと間合いを詰める。すぐに、得物の使い方を心得ている。それが、彼の才能^{ギフト}だろうとアテがついた。けれども、いかれた運転技術、マシンの癖を見抜くのはワケが違う。ケンカはからっきしなトビーなら翻弄されただろうが、間近で奴らと殺し合った俺には兇戯に等しい。

突き出した警棒を軽く体を捌いて避け、ぴんと伸びた腕を軽く叩く。加減はしているが、それだけで少年は苦痛の声を漏らし、警棒を取り落とした。

拾い上げようと身を屈めた瞬間、陽炎が揺れ警棒が一人でに持ち上がる――違う。後ろに乗っていた透明人間の仕業だ。

少年と同じく、容赦のない突きだった。だが、喉仏を狙ってのを避ける必要は無かった。

分厚い革を叩いた時のような音が響く。はっと、少女の息を呑む声が聞こえた。驚いたせいか、姿が露わになった。くすんだブロンドの髪、勝気そうな眼。ネコ科の動物のようなしなやかな体躯。そのまま警棒を掴んでドライバーを回すようにぐりんとやると、少女の身体ごと宙を舞って、地面に落ちた。

「透明人間に、凄腕レーザーか。バイク泥棒が捕まんわけだ」

先に起き上がって来た少年が、少女の前に立ちはだかつておれを見る。闘志に燃えている、戦士の眼だった。

「.....アンタ、何モンだ？」

「.....まさか本当に、スレイブなの？」

少女が底おうとする少年を押し退けておれに尋ねる。頷くと、くすくすとティーンらしい笑みを浮かべた。

「わお。ホントにバカみたいな力を持ってるんだ。実は、ファンだったの。映画は5回は見たし、フィギュアも買ったわ」

「メカを盗んで、バラした金でぐふっ」

突然少女から飛ぶひじ打ちに、少年は脇腹を押さえて呻いている。さっきのおれに叩かれた時よりも痛そうだ。

「そいつはありがたいが、泥棒ってのは感心しない。親御さんが悲しむぞ」

そう言うと、少年は一瞬視線を落とし、それからおれを見上げて肩を竦める。その表情に、眼に奇妙な親近感を覚える

「いたらもっとマトモだったかも。ハイスクールに行って、バスケでもして、可愛いガールフレンドは.....もういるけど」

「それは光栄。こいつだけならいくらでも大丈夫だって言ってるのにあたしに構ってきてさ.....」

少女が苦笑する。時折少女の身体が透けるのが分かった。それは右腕だったり、頬だったりとして規則性は見えない。それが、彼らの言うマトモを難しくしていることが分からないほど鈍感では無い。

彼らを追いかけようとした理由が分かった気がした。

こいつらは、おれと同じだった。マトモな生活にはありあまる大いなる力を抱え、その捌け口を見つけ出せないでいる。おれのように英雄の肩書を作る機会すら与えられず、ちんけな犯罪に手を染めるしかなくなっている。

そして今、彼らの眼を見てしまった。ヒーローへの憧れと、自らがそれを得られないことへの羨望、あるいは嫉妬の混ざった眼を。何度も見て来たはずだった。みなしごも、ストリートチルドレンも。莫大な富の使い道を考えめぐねて寄付だってした。けれども、その時とは違う感情だった。ヒーローになりたい。悪を倒したいわけではない。ましてや、あの時のような喝采を浴びたいわけではない。

少なくとも、目の前の二人には胸を張れるような存在でありたい。出来る事なら、彼らだけではなく、世界中にいる、おれたちにも。おれは意を決して二人へと声をかける、

「なあ、お前たち。おれと一緒に来てくれ」

「警察？ そうね、逃げたいとこだけど——」

「違う。確かに管理されるという意味では近いかもしれないが、管理するのはおれだ。世界中の、君のような人間を、おれがまとめ上げ、組織する。お前らは記念すべき、ナンバー2と3だ」

「まさか、そんなこと……」

「おれはこう見えても世界を救ってるんだ。だったら、お前たちを救うことだって出来る。おれはヒーロー、スレイブだ」

呆気に取られる二人を前に、おれは今まで感じたことの無い高揚感に包まれて未来を語る。難しいことは分かっている。トビーたちには迷惑をかけるかもしれない。けれど、おれは見つけた。人生を捧げるもの。奉仕者としての新たな生き方を。

前に進んでいるかは分からない。

だが、歩き続けたいと思える道を見つけることは出来た。

世界は少しばかりだが、おれたちが生きやすくなるという予感があった。良い方向か、悪い方向かは、まだ分からない。

F i n .

黄昏時、迫る宵闇

夏村晋

夏休み明けのその日、二人の男の間で、戦いの火蓋が切って落とされようとしていた。

黒髪に少し青が入った黒縁眼鏡を着用した男は、目の前の、人工的な金髪にシルバーピアスを覗かせる男を睨みつけていた。金髪の男も同様に、生まれつき悪い目つきを更に悪くして黒髪の男を睨みつけている。

高校二年F組教室。黒髪の男、アクエリアスと、金髪の男、リーブラは、二人以外のクラスメイト全員が固唾を呑んで見守る中、親友同士とは思えないほど割と本気な殺気を漂わせて相対していた。

空は晴れわたり、開け放たれた教室の窓の外では蝉が合唱し、時折強い風が吹き込んでカーテンを膨らませる。夏の気配はまだ堂々と居座っているが、夏休みが終わった以上、彼等には一つの命題が突き付けられていた。

教室前方の黒板には、女生徒の手による綺麗な白線で、幾つかの文字が記されている。

学級委員(男子)

アクエリアス 正正正一

リーブラ 正正正一

「アクエリアス！ 二学期こそはてめーにやらせるからな！」

「ぜってー嫌だ！ 引き続きリーブラお前がやれ！」

要するに、学級委員の押し付け合いだった。

学級委員の選出方法はまず立候補を募り、立候補者がいなかった場合は投票制になるのがこのクラスにおけるルールである。まず、このクラスにはあまり積極的に学級委員をやりたがる者はおらず、一学期の時点でそれは周知されているため、即座に紙に推薦者を記す投票制に移行した。そしていざ結果を開示してみれば、このようにアクエリアスとリーブラとで完全に票が割れたのである。アクエリアスとリーブラ以外の票が一票たりとも存在しないあたりに二人を除くクラスメイトの思惑が見え透いているが、アクエリアスとリーブラの両名はお互いに学級委員を押し付ける事しか考えていない。

他者を責めて投票自体に難癖をつけない美点を讃えるべきか、一方向にしか思考が向かないあたりを阿呆と称するべきかは判断に困る点であった。

ちなみに一学期は二人以外にもいくつか票が入った状態だったが、アクエリアスと一票差でリーブラが票獲得数一位に輝き、抗議する暇もなく学級委員が決定した。これはアクエリアスとリーブラは一年次から有名人であり、クラス替えがあっても最初からその人となりを知る人が多かったことが原因の一つである。またその知名度も、二年次開始時点ではプラスの意味でのもので、

悪意なく「面白そう」という理由で愉快犯的に票を入れる人が多かった。リーブラがアクエリラスより一票多く獲得したのは偶然だが、二人合わせて八割の票を攫っていったあたりに二人の人気度合がうかがえる。なお、アクエリラスとリーブラは当然のようにお互いに投票した。

さて、今回は八割どころか十割の票を攫っていった人気者二人は、結構真剣に自分が学級委員の任に着くことを嫌がっていた。

「アクエリラス、引く気はねえのか」

「学級委員からなら全力で身を引く」

「ばっそっちじゃねーよ！ つーか俺は一学期やったんだから休ませろよ。労われよ」

「お前を労わって何になるんだよ」

「部活の練習試合くらいなら応援しに行つてやる」

「いらねー！」

「傷つくだろ！ もう頼まれたつて応援行かねえからな」

「お前こそ頼み込んだつて応援来させねえからな。てゆーかそうだよ、俺は部活で忙しいんだよ。二学期つてちょっと長いしまじでやだ」

「は？ 長いのが嫌なのか？ だったらいつそ分けちまおーぜ、前半がアクエリラスで後半が俺」

そこで、完全に高みの見物を決め込んでいた担任から「登録上、それは無理」の横やりが入った。

あ、それは悪くないかと思ったアクエリラスと、名案を出した万事解決よっしゃと思つたりリーブラが同時によろめく。言い争いで終結するはずもない二人に残された道はやはり一つしかなかった。

「アクエリラス、男らしくじゃんけん一本勝負だ」

「乗った」

既に立ち上がつて机が作る通路に向かい合つていた二人は、わずかに腰を落として右手を握りしめた。瞬きすら忘れて、お互いの視線が交差する。にやにやしなながら二人の漫才を見物していたクラスメイトにも緊張感が伝染し、誰からともなく呼吸をひそめた。

アクエリラスとリーブラ。至つて真面目に学級委員をやりたくない両者の声が重なる。

最初は、

「グー！」

「チョキ！」

.....は？

今しがた起こつた光景に、担任を含めたクラス全体が呆気にとられていた。

蟬の声すらどこか遠く、数秒、完全に教室の時間が止まる。

時を再び動かしたのは、時間を止めた張本人だった。

「あああああ！ 間違えたっ！」

時を止めた張本人、リーブラが、右手の人差し指と中指だけを立てた状態、いわゆるチョコキの形を作った右手を保ったまま、膝から崩れ落ちる。

「うわあああ違う、違うんだ、“最初はパー”っていうあれをやろうとしたんだ俺は！」

どう考えても卑怯行為である計画から恥ずかしすぎる失敗までを自ら白状する親友であるはずの男の前で、アクエリアスは握ったままの、いわゆるグーの形を作った右手をゆっくりと、高らかに上げる。

勝利の二文字が、彼を華々しく祝福していた。

「おい、二学期の学級委員はリーブラに決定だ！」

書記の役割を担っていた女生徒が、アクエリアスの言葉にはっとして赤いチョークを手にとると、「リーブラ 正正正一」を大きな円で一息に囲った。

次の瞬間、クラス中に爆笑の渦に包まれた。その中央で、勝者は胸を張り、卑怯な敗者は地に膝をついている。

なお、三学期、いつぞやの繰り返しのように票が割れ、今度は厳正なババ抜き一本勝負の結果、正々堂々敗れたリーブラが結局、学級委員を務めることになるのは、また別のお話である。

了

あとがき

言いたいことは分かりますね。そうです。別に書いていたお話が書き上がらなかったのです。こんな時のこいつらの利便性やばい。初めて読む方もいらっしゃると思うので明記しておきますが、こいつらは名前がこうですが普通の日本の高校生です。単発作品も良いところですが、一応このシリーズお馴染みの登場人物早見表も載せておきます。読了感謝。

「四兄弟」

長女シャルロット(大学二年、ナイトと恋人)

長男イージス(大学一年、アプリコットと恋人)

次女エリーゼ(高校三年)

次男アクエリアス(高校二年)

「三兄弟」

長男ナイト(大学二年、シャルロットと恋人)

次男リーブラ(高校二年、エリーゼにぞっこん)

長女アプリコット(高校一年、イージスと恋人)

雪は、羽毛を真似るようにして、音もなく虚空を舞う。水を含んで重たくなった無数の羽は、私の肩に、腕に、しがみついてはコートを侵していった。パルティール考古堂の古びた小さな建物は、屋根に積もった雪に食われるようにして佇んでいる。

この町にも、冬がやってきていた。冬はじわりじわりと近づいてくるが、雪は案外、不意に戸を叩く。昨日の日暮れまで見えていた、枯れ草や針葉樹の色は、全て塗りつぶされている。いまでは、カーテンの隙間からこぼれる明かりが、外から視認できる唯一の「色」だった。

「おかえりなさい、ベニス嬢。今日は何か収穫がありましたか？」

私の名を呼ぶ彼は、バシラス・サブティリー——我らが店長だった。いや、今は、「ボス」と呼ぶべき存在である。

「いいえ、今日も接触できなかつたわ」

「そうですかそれは残念です」

ボスは、軋む椅子の背にもたれ、ほほ笑んでいる。私は思わず、ため息をついた。この三週間、メイドのまねごとを繰り返しているのだ。ボスにいくら愚痴をこぼしても、「ベニス嬢に侍女の装いは不似合いですね。僕が換わりましょうか」などと冗談を云うばかりで、話にならない。最近、グリシア・ストレプト——白髪少女である——に愚痴を聞いてもらうという、なんとも情けない有様になっていた。

私は、濡れて重くなったコートを脱ぎながら、三週間前、事の始まりを回想していた。

*

「失礼いたしますわ」

パルティール考古堂の前に、黒塗りの高級車が止まった段階で、察しはついていた。まだ雪が降る気配もなく、冷たい風が窓ガラスを撫でては、曇らせているばかりの頃だ。隠密の来店とは思えない人数の執事を引き連れ、彼女は店の中へと足を踏み入れた。

私の視界にその女性が入った瞬間、瞳が引き寄せられるのを感じた。押し黙った彼女の立ち姿は、どんな立体芸術をも凌ぐ存在感があった。ガラス細工よりも繊細で、白磁気よりも透明で、シルクの髪は束ねられるのを嫌うようにしなやかだった。

「こちらへどうぞ」

店長がソファへ腰かけるよう促すと、彼女は黙って席に着いた。執事が、事情を説明しようと口を開いたのを見て、店長は人差し指を口元に立てた。

「ご本人から、説明していただきますので」

店長がにこりと笑うと、執事は大人しく口を閉じた。

「妹を、殺していただきたいの」

彼女はゆっくりと、言葉を選ぶようにして語り始めた。

彼女の名前は、ヘルフェト・オーラン。オーラン伯爵家の長女だった。年頃になった彼女には、最近、縁談が次々と舞い込むようになっていたそう。しかし、縁談はどれも、まとまる寸前で破断しているという。

「訳を問いただすと、皆さん、おっしゃるの。『シフォンさんに心を奪われてしまった、君とはもう会えない』と――」

彼女は涙を堪えながら話した。うるんだ瞳はサファイアのようにきらめいて、つい目が離せなくなってしまう。丹念に結われた絹糸のまつ毛が、涙のしずくを拾い上げている。涙をぬぐう彼女の右手には、蝶の刺青が施されていた。

「シフォン・オーラン、その人が妹なのね？」

「ええ……ただ、シフォンがどこにいるのかは、存じ上げませんの」

「それは、どういうことでしょうか？」

「私、シフォンには、生まれてこの方一度も会ったことはありませんのよ」

＊

「ターゲット探しから始まる依頼なんて、初めてよ……」

私は疲労のあまり、来客用の柔らかいソファに横たわった。

「ベニス、子供じゃないんだから。はしたないよ」

ソファに近づいてきたのは、パルティール考古堂最年少メンバーである、ラクト・ガルビエだった。

「十歳児に注意されるなんて……私もおしまいね」

「相当荒んでるね、ベニス……」

少女に愚痴を聞いてもらい、少年に心中を察されてしまうとは。もうため息も出なかった。

「おれの方でもシフォン・オーランについて調べて見たんだ。でも、やっぱりおかしいんだよね」

「おかしい？」

「シフォン・オーランが、姉のヘルフェトよりも美人だって話は有名みたいなんだ。でも、彼女に会った人の話がどこからも出てこない」

ラクトは、訝しげに首をかしげる。

「本当にシフォン・オーランは実在しているのかな？調べれば調べるほど、おとぎ話を聞いている気分になるんだ」

「いいえ、シフォン・オーランは確かに存在している……はずよ」

私も実際、シフォン・オーランを目にしたことはない。しかし、どこにいるかは分かっているのだ。

「メイドが毎日、別棟の最上部に、シフォンの食事を運んでいるの。持っていく食事は、ヘルフェトに運ぶ料理と同じものだから、同格の人間であることに間違いないわ」

「じゃあ、その給仕役を買って出れば、接触できるじゃないか」

「それはそうなんだけど……」

無理なのだ。少なくとも、今の段階では。

＊

「面倒な仕事を押し付けてしまって、申し訳ありません」

ボスの声で、目が覚めた。どうやら、ソファに横たわったまま寝てしまったらしい。ふかふかの毛布が、私の体を覆っていた。

「いいえ、いつものことですもの」

「ありがとう、感謝しています」

もう、夜は明けてしまったのだろうか。締め切られたカーテンで、外の様子は伺えない。暖炉が、小さく音を立てていた。

「ヘルフェトさん、きれいな人だったわね」

私は寝ころんだまま、呟くように言った。

「そうですか？ 僕は、取り巻きの執事がやたらと若いことの方が、気になりました」

「ふふ」

「何がおかしいのです」

「なんでも」

再び、意識が薄らいでいく。胸元に、何かが差し込まれる。体が持ち上がる感覚とともに、暖炉の灯りが遠のいた。

*

「モニアさん？」

三度呼ばれて、ようやく自分のことだと気が付いた。もう三週間も「モニア」としてメイドをやっているが、未だに慣れない。

「なんでしょう」

「今日の午後から、ヘルフェトお嬢様のお世話についてね」

「はい、かしこまりました」

「がんばって」

がんばって、なんて初めていわれた。メイド長はいつも凜としていて、「何でもできて当然」といった雰囲気を持っている。

ようやく受け入れてもらえた、ということかもしれない。三週間前は、メイド間の結束の強さに、疎外感を感じたものだ。不思議なくらい、気持ち悪いほどに仲がいい。私だけが別棟の仕事を任せてもらえないことから、疎外の意を感じていた。

遅めの昼食を摂りに、休憩室へ戻る。するとそこでは、メイドの一人が昼食を摂っていた。

「おつかれさまです」

挨拶をしたが、一瞥されただけで、返事がない。そのメイドが、比較的古株であることに気づき、シフォンの話をふってみる。

「シフォンお嬢様は、とてもお美しいとお聞きしています。お会いしたことはありませんか？」

メイドはくすりと笑うと「ええ、なんども」とだけ答えた。

「私も、シフォン様にお給仕したいと思っていますのです」

彼女はしばらく私をじっと見て

「あなた、新人でしょう？」

と問いかけた。

「はい、そうです」

「シフォンお嬢様にお会いできるのは、うちのメイドになってからよ」

「メイドになってから――？」

「シフォンお嬢様は、本当にお美しいわ。ヘルフェトお嬢様もそれはそれはお美しいけれど、

シフォンお嬢様の足元にも及ばないわ」

彼女は先に昼食を終え、席を立った。

昼食を終えると、何人かのメイドが呼び出された。私を含め、どのメイドも今月中に入ってきた新入りばかりだ。ヘルフェト・オーランの世話に、初めてつく面々だとすぐわかった。やたらと人数が多いのが気にかかる。熟練メイドの一人に連れられて、ヘルフェトの部屋へと向かう。彼女の部屋へ近づくと、熟練メイドの表情が曇る。

部屋の前までたどり着いたところで、熟練メイドは去っていった。「あとはすべて、お嬢様のおっしゃるままに」とだけ言い残して。

困惑するメイドたちの先頭を切って、私はドアノブを捻る。

「いらっしやいませ、メイドのみなさま」

ほほ笑むヘルフェト・オーランの周囲には、多数の若い執事たちが並んでいる。

何をさせようとしているのだろう。彼女の身の回りの世話は、執事が執り行っていると聞く。

「さて、始めましょう」

彼女が手を叩くと、執事たちが動き出す。メイドの背後に一人ずつ執事が立つと、一斉に目隠しを施した。

突然視界を奪われたことで、困惑したメイドたちの小さな叫び声上がる。その中に、男の叫び声一つ、混ざっていた。いきなりのことに驚いた私が、思わず回し蹴りをしてしまったのだ。執事の一人を、のしてしまった。

「ご、ごめんなさい！」

目隠しを剥ぎ取り、倒した執事に近寄る。執事の腰には、多種のムチが据え付けられていた。

「ショーが台無しですわ！」

ヒステリックな金切声上がる。声の主は、ヘルフェト・オーランだった。彼女は、周囲においてある置物を、執事めがけて投げつける。

「邪魔者はつまみ出して！ 早く！早くして頂戴！」

部屋の奥からぞろぞろと現れる執事に、私は拘束され、外に出されてしまった。屋敷の、外である。

その日の夕方、「モニア」は解雇された。

*

「もう、なにしてんのさ」

「ごめんなさい……」

私は十歳児からお説教を食らっていた。ボスは、グリシアを連れてどこかへ出かけている。「おれは、直接シフォン・オーランの部屋に乗り込むのがいいと思う。『モニア』が解雇された以上、今まで通りの潜入調査を進めすことは出来ないよ」

「そうね……」

私の潜入捜査で、得られたことは少ない。シフォン・オーランの部屋の場所くらいのものだ。しかも、本当にそこにシフォンがいるかは明らかではない。

もう一つ分かったことといえば、「オーラン家のメイドになる」ということが、どういうことかということだけだ。ヘルフェトの部屋の中で、何が行われていたか、具体的なことは分から

ない。しかし、あれは一つの「通過儀礼」なのだと思う。

ラクトが私から目を逸らした。

「ベニスはさ、この仕事、向いてないよね。どうしてやってんの」

「それは、その……」

「おれは、ボスに恩を返すまで、この仕事を辞めないって決めたんだ。ベニスがどんないきさつで、この仕事を始めたのか知らないけど、もうやめた方がいい」

ラクトがこちらを向く。

「ベニスは、優しすぎる」

返す言葉もない。自分がこの仕事に向いていないことは、よくわかっていた。分かっているも——やめるわけにはいかないのだ。昨日、ボスから「差し入れ」られた小瓶を握りしめる。

私は、顔を上げた。

「ラクト、今晚、ついてきてくれる？」

少年は、面倒臭そうに頭を掻いた。

*

月夜だった。つい先日まで、重たい雪を吐き出していた雲は、跡形もなく消えていた。

侵入はそう難しくなかった。私は、細身の男性夜間警備員として、廊下を歩いていた。

『ベニス、聞こえる？ 聞こえたら、帽子を直して』

ラクトはどこから私を見ているのだろう。視線を正面から動かすことなく、帽子を据え直した。

『ベニス、オーラン家に雇われている夜間警備は十人。おれからは、その全員が見えてる』

夜の廊下は静かで、自分の足音が大きく聞こえる。廊下に敷き詰められた絨毯の毛足は長く、芝の上を歩いているかのように感じられた。

『ベニスは、おれのナビゲーション通り動いて。ベニスが別棟に入るとき、別棟に人がいないように調節する。だから、ベニスは別棟に入ったら、シフォンがいる部屋まで走るんだ。ベニスの調べ通り、別棟にシフォン以外の人間が住んでいないとすれば、今はどの部屋もからっぽのはずだよ』

私は再び、帽子を据え直す。そして、ラクトの指示に耳を澄ませた。右へ、左へ、階段を上って左へ——。

別棟に入ったのは、三十分ほど経ってからだったように思う。

『ベニス、走って！』

ラクトの声を合図に、私の足は駆け出した。心臓が跳ね馬のように暴れる。失敗への恐れか、核心へ近づく興奮か、単に走っているからなのか。余分な感情を振り切るようにして、私は懸命に走った。

部屋の前へたどり着く。一度呼吸を整えてから、静かに扉を開けた。

そこに、部屋はなかった。

そこにあったのは、地下へと延びる薄暗い階段だけだった。

*

階段を下る途中で、ラクトとの通信は途絶えた。地下に入ったことで、電波が届かなくなったのだと思う。壁際に並んだろうそくの、わずかな火だけで照らされた階段を、ゆっくりと降りて

いく。

どこまで降りてきたのだろう。階段の終結店には、一枚の扉があった。ドアノブを捻ると、鍵はかかっているようだった。

扉を開けた途端、「部屋の主」が声を上げた。

「どちらさまですか」

鈴の鳴るような声。声は、部屋の奥から聞こえてくる。部屋は、入ってすぐの場所から、幾重にも幾重にもレースカーテンがかかっている。二枚、三枚とめくっても、まだ先にカーテンがある。シフォン・オーランは、この奥だ。

「どなたなのですか、お客人、メイドの方と一緒にではありませんか？ お待ちくださいませ、お客人」

愛らしい声は、カーテンをめくるたびに近づいてきた。最後のカーテンを開けたとき、眼前に一人の女性が現れた。私は思わず、息をのむ。細身の彼女の顔が、あまりにも。

名状しがたく、醜かったからだ。

「ああ、なぜ、なぜ——」

目の前の女性は、とっさに顔を隠した。

「シフォン・オーランさん、ですか」

あきらめたように両手を下した彼女は、ゆっくり頷いた。

「なぜ……男性は、カーテンをめくらないはずなのに。同伴のメイドの方は、どうなさったのですか」

「同伴のメイドはいません。私一人です」

「もう、この戯れも、おしまいなのね」

シフォン・オーランはほほ笑んだ。笑った顔も、どうしようもなく、醜い。炙った鶏肉の皮に似ていた。

「あなたは本当に、ヘルフェトさんの、妹なのですか？」

思わず疑ってしまう。容姿が、似ても似つかない。

「シフォン・オーランは、もっと美しいはずだと、仰りたいのですか」

「いえ、そんなことは——」

本音を見透かされた恥ずかしさに、赤面してしまう。

「いいのです。誰もがそう思うでしょう。美しいはずのシフォン・オーランが、こんなにも醜いはずはない、と」

シフォンは羽織っていたストールを外し、左腕を見せた。

「これが証拠です」

彼女の左腕には、蝶の刺青が入っていた。ヘルフェトの右手に入っていたのと、同じものだ。

「醜い、という理由だけで、娘を地下に幽閉する親です。まともな精神を持ち合わせていれば、幼い娘の腕に家紋を入れたりしないでしょう」

彼女は顔を伏せる。部屋の奥、うんと高い位置に開いた五十センチ四方の窓——というより、鉄格子のハマった穴——から、月明かりが差し込んでいる。仄暗い部屋の中で、彼女はしとんと泣き出した。

「私の顔を知らない人々が、カーテンの向こうからちやほやしてくれるから、自分の顔を忘れていました。あなたは正直者ですね。まるで、鏡のようです」

私は、何も言えなくなっていた。ひどく同情してしまっていることに、気づかないように、認めないように、必死になっていた。

「死にたく、ありませんか」

何を言っているのだろう。ほろりと言葉が零れてしまう。

「死にたければ、楽に殺して差し上げます」

月が隠れる。部屋が不意に、闇に飲まれる。部屋の中にあるのは、私と彼女の、息遣いだけだった。

闇の底から、二本の白い腕が伸び、私の頬に触れた。

「死にたく、ありません」

ああ、駄目だ。月明かりが、再び差し込む。しわくちやに潰れた彼女の顔の、腫れぼったい瞼の向こうに、きれいな青い瞳が埋まっているのだ。

ポケットの中に入っている、小瓶に触れる。頬に添えられた彼女の手は柔らかい。少しささくれだった指先から、人の熱を感じてしまった。

彼女ほど、惨めな人間がいるだろうか。

私は、小瓶から手を放した。

「今、あきらめようとなりましたね、ベニス嬢」

私は思わず顔を上げた。空から、ボスの声が降ってきたのだ。五十センチ四方の天窓から。グリシアが顔をのぞかせている。

「鉄格子を外します。上手に避けてくださいね、ベニス嬢」

ボスが強く蹴り上げると、鉄格子は簡単に外れた。外れた鉄格子は、無機質な音を立てて床に落下する。ただの穴となった窓から、腰に紐を結んだグリシアが、ゆっくりと降りてきた。グリシアが、シフォンをぎゅっと抱きしめる。

「おーけー、ぼす」

グリシアの声を合図にして、グリシアが引き上げられていく。何が起きているのか、まだ飲み込めない。

「ベニス嬢、貴方の自分勝手な行動のおかげで、ターゲットを発見することが出来ました。本当に感謝しています」

ボスがにこりと笑う。

「怒ってます……？」

「いいえ、ちっとも」

ボスは一つのジッポライターを投げ入れ、穴からロープを下した。

「カーテンに火を放ってください。鉄格子の回収も忘れずに」

「怒ってますよね」

「怒ってません。そのロープから、自力で上がってきてください」

ボスが、珍しく怒っていた。私は鉄格子を回収し、カーテンの裾に火をつけた。火はみるみるうちに広がり、炎がとぐろを巻いた。ロープを素早く登り、窓にたどり着く。

私が地上に顔を出したとき、ボスはシフォンに口づけていた。

「な、なにを――」

私は、まともな言葉を発することができなかった。二人が唇を話すと、ボスの舌が、シフォンの唇の上を這うようにして現れる。

「少々、毒を飲んで頂きました」

シフォンは、ぐったりとうなだれ、ボスにもたれている。

「これで、しばらく目を覚まさないでしょう」

ボスの背後で、グリシアが眠そうにしている。私は、鉄格子をはめ直してから、ボスに向き合った。

「ボス、もう彼女を殺さなくてもいいんじゃないかしら。彼女は、火災で跡形もなく燃えた。それで、いいじゃない」

「.....あなたがそう言うと思って、彼女を引き上げました」

「じゃあ——」

「しかし、残念ながら、彼女を野放しにすることは出来ません。殺した証拠として、彼女からは腕を頂かなくてははいけません。ベニス嬢、この火災は、メイドたちによってもみ消されてしまうことでしょう」

「なぜ——？」

「その方が、メリットが大きいからですよ」

ボスは、シフォンを抱き上げて、移動を始める、私とグリシアはそれを追って屋敷の裏口へ向かった。

裏口で、ラクトが待っていた。足元に、ピクニックシートが広げられている。ボスはそこにシフォンを寝かせると、グリシアにメスを手渡した。ラクトは、シフォンの左上腕をきつく縛り上げた。

「さて、始めましょう」

ボスが、腰に巻いてあるホルダーの中から、一つの小瓶を取り出した。胸元から引き抜いた万年筆からは、細いシリンジが姿を現す。その先端に針を取り付けると、素早く小瓶の中身を吸い上げた。

針が、シフォンの左腕に吸い込まれていく。彼がピストンを押し下げると、何の抵抗も無いかの様に、毒が彼女を侵していく。薄笑いを浮かべた彼は、月明かりを背に受けながら、恭しくシリンジを引き抜いた。

「ボス、何をいれたの」

ラクトが尋ねる。

「永久麻酔、とでも言いましょうか」

ボスは針を抜くと、シリンジだけを万年筆型ケースにしまった。

グリシアとは、よく打ち合わせてあったようだ。彼女は、そのメスで、腕を落としていく。腕の肉が五センチほど輪切りに抜かれると、白い骨が姿を現した。

「力仕事は、私がしましょう」

ラクトは、携帯している工具箱から、のこぎりを差し出した。ヒトの骨は、案外簡単に、「切れて」しまうらしかった。

*

「確かに、オーラン家の家紋ですわ。ああ、これが、愛すべきわたくしの妹ですのね」

シフォンの左腕を見て、ヘルフェト・オーランは無垢な子供のように喜んだ。そこには、あの日彼女の部屋で垣間見た狂気が、にじんできているように思われた。

「それでは、こちらが約束のものですわ」

ジェラルミンケースが七つと、山の権利書だった。

「この山は、何のために貰ったの？」

ほほ笑むボスに、小声で尋ねた。

「この山は、特殊な毒草の宝庫なのです。以前から、欲しいと思っていました」

目当てのものが手に入り、ボスは上機嫌だった。満足げに帰っていくヘルフェト・オーランを見送ると、私はようやく緊張感から解放された。

「シフォン・オーランの本当の姿を知っていたのは、彼女の両親とメイドのみだったようです。ラクトの情報網にかからないとは、相当厳密に隠されていたようですね」

メイドたちが結束し、秘密を守ることで、どのような「メリット」があったのだろうか――。ふと、ヘルフェトの若い執事たちと、腰に据えられていたムチを思い出す。

「もしかして、ヘルフェトの縁談を破断に導いていたのは、メイドたちなの――？」

ボスは何も言わない。頭の中で、メイドたちの言う「シフォンお嬢様は、ヘルフェトお嬢様より美しい」という言葉がこだました。

地下から上がった火の手について、巷に噂が流れることはなかった。内々に処理されたのだろう。

店の奥から、「きゃあ」と叫び声が上がる。

「目が覚めたようですね」

可愛らしい叫び声の主は、自分の身にかけてられた魔法に気づき、歓喜していた。

「わたくしの、顔が」

彼女はぼろぼろ泣いていた。自分の切り落とされた左腕よりも、新しくなった自分の顔に、目が行ったらしい。

「知り合いに、腕のいい整形外科医がいますね」

店長は、彼女に微笑みかける。

「左手を頂いたお礼です」

「ああ、ああ、なんと申せばいいやら――」

飛び切り美しい顔、というわけではない。至って普通の、どこにでもいる顔である。しかし、彼女には十分すぎる贈り物だったらしい。ぱっちり開いた彼女の目には、姉に似たサファイアの輝きがあった。彼女は、自分が一週間の仮死状態にあったことなど、知りもしない。それどころか、姉に命を狙われていたことも、自分の存在がメイドたちに利用されていたことも、知る由もない。

「シフォンさん、きれいだね、ベニス」

グリシアが言う。私は素直にうなずいた。

彼女はいつまでも、鏡に映った自分を眺めていた。

おわり

おまけ

「ねえ、ベニス。ベニスの行き先をボスに連絡したり、屋敷から裏口までの足跡が残らないよう丹念に雪かきしたり、簡易手術の準備をしたりしたのは、誰だと思う？」

ラクトが頬を膨らましながら訴える。

「冷蔵庫に、ラクト用のモンブラン買ってあるわよ」

「ほんとに！」

少年は台所へ飛んで行った。

あとがき

今回は短めに仕上がりました。最後までお読みくださりありがとうございます。ヘルフェトのお部屋でのシーンは自主規制致しました。脳内補完よろしくお願ひします。Ⅲを書くつもりなので、未公開の情報がいくつかあります。ご容赦を。

みなさん、原稿は余裕をもって書き始めましょう（お察してください）

立てど座れど歩けども（如月 香）

立てど座れど歩けども

如月 香

少女が二人、裸体を晒し絡み合っていた。

辛うじて木造と分かる程度に崩れた^{あばらや}荒屋の中、それは清かな^{さや}月光を照り返し白く輝く。敷かれたシートが上で密やかに、しかし艶めかしく蠢く少女たちに幾つもの皺を拵えられ、それでもなお彼女たちを木板の逆剥けから守る。それらの白の上に、鴉羽が舞い乱れていた。

風が木の葉を鳴らす。消え入るようなそれは、やがて響く声を掻き消すほどになる。

不意に、一人が大きく震える。軀を突き動かす何かに耐えるため、繋いだ手に力が入り、背を反らす。他方は震えごと彼女を包み込むように、片腕を背に回し、矮軀を引き寄せた。

葉擦れが小さくなる。揺れ弾み、溶け掠れていた木漏れ月が、その模様が分かるほどに落ちていた。

痺れが抜け切らない風の少女が、自分を抱きしめる女性の瞳を、期待するように見上げる。見上げられた方もそれに気づき、そっと背を曲げて、僅かに汗の滲んだ額に口付ける。かんばせを赤くした少女が、拗ねるように胸にそれを埋めると、彼女を抱き寄せていた手が^{おとがい}頤に添えられた。

目を覚ましたのは、日も中しようかという頃だった。瞼を差す光を避けようと軀を^{よじ}振る。逃れられなさそうで、諦めてゆっくりと目蓋を上げた。

彼女の^{おっぱい}胸が眼前に広がる。自分のものと比べて、虚しくなる。垂直の日差しが左の目尻から入り、網膜を焼く。

「おはよ一、^{ももこ}百子」

「――おはよう、^{かおる}香」

彼女――香が伸びをする。深い吐息が、汗でべたつく髪を撫でつける。

「ね、しよ」

抱きしめるように私の後ろに回されていた手が、指が、背を這う。否応なしに送り込まれる触感に、鳥肌が応えた。唇に残る感触が思い出され、口腔が乾く。

「朝一がそれ。^{ゆうべ}昨夜散々やったでしょ」

声が漏れそうになるのを殺す。気づいているのかいないのか、香はへらへらと笑いながら^{のたま}宣う。

「いいじゃんいいじゃん、どうせすることもないじゃん」

言いながらも、背を^{まさぐ}弄る手は止まらない。脇腹に差し掛かり、反射的に軀が跳ねる。^{くすぐ}擦っただけのはずのそれは、羽箒のような厭らしいタッチのためか、それとも私の軀がおかしくなってしまったのか、甘い痺れに変換され脳に刺さる。

「ダメ。そろそろ食料も獲れなくなってきたし、移動しなきゃ」

「えー」

色欲に塗れようと食欲はなくならないとは、最近になって知ったことだ。口寂しさに負け、口

元に差し出された指を啜える。塩辛いのと私の味がしたので、思わず僅かに咽る。

「お腹空かないの？」

私は空いた。汗の塩味が心地よい。甘噛みしているうちに齧りとってしまいそうになり、舌で押し出す。吐き出された、唾液に濡れた指を、香は自分の唇に添え、そっと舐めた。

「空くから百子を食べる」

非生産的すぎる。舌と右人差し指にかかる銀色の橋が、ひどく扇情的に映る。

「栄養摂れないでしょ」

心は満たされても肉体は満たされない——いや、肉体は満たされても胃は満たされない。彼女と私で湿った指が、私の顔の輪郭をなぞる。

「カロリーゼロでヘルシー」

「人を蒟蒻みたいに言わないでよ」

蒟蒻、食べたいなあ。

「とか言って、躰は正直だぜ」

言われ、気が付くと、彼女の左手が私の下肢の付け根に差し掛かっていた。ぞわぞわと背に電流が走る。

「うるさい、退いて」

「ちえー。しかたないなー」

言って、指は何の感慨もなく離れていった。官能の入り口に立たされた躰が、宙に放り出される。脳を蕩かす温度を溜息とともに吐き出そうとして、結局甘い靄は晴れないままだった。

「ほら、早く水浴むよ」

主に、私を蝕む火照りを冷ますため。

「はーい」

彼女の手を握り、歩き出す。風がほとんどどない陽気に、掌の汗が心配になった。

夜。結局移り住む場所は見つからず、今日も荒屋の床にシーツが広がる。

「それじゃ、おやすみ」

香に背を向け、目を閉じる。

「ええー、そりゃないぜはにー」

彼女の右手が私の前に伸び、柔らかい感触が背中に^お押しつけられる。

「誰がハニーよ」

「ちょっと躰浮かせて」

素直に応じると、シーツと脇腹の間に出来た隙間を通り、左腕が回される。両腕で出来た輪が引き絞られ、背中の柔らかい感触がより強く密着した。心地よい締め付けが、安心を誘う。

「んうー、いい匂い」

首筋を吐息が撫でる。普段髪に守られているそこは、温い風を敏感に感じ取り、胸を高鳴らせる。

「変態っぼいよ」

それを悟られたくなくて、口が尖る。

「変態だからね」

「ひあっ」

柔らかく^{ぬめ}滑る何か——おそらくは舌——が項に触れる。その感触は、私に声を上げさせるのに十分なほど官

能的だった。

「百子は敏感さんだねえ」

頬が熱くなる。言外に色好きと言われているような気がして、しかし反論もできず歯噛みする

。

「るさい、馬鹿」

私を抱き寄せていた腕が緩み、右手が去っていく。途端物足りなくなり、残る腕に掌を添え、胸元に抱き寄せる。

「寂しがっちゃって、可愛い」

引かれた右手は、裾をめくり上げ、私の背中に添えられた。声が漏れる。鋭敏になった皮膚が直接^{なす}擦られる。これだけで昂ぶる私の躰が、正直恨めしい。

「寝たいんだけど」

「どうぞー、やめないけどね」

私を抱えていた左手が、服の上を滑りだす。薄い胸を弄られ、眠気が情欲に置き換わる。

「っ、気持ちよさそう」

うるさい、と返そうとして、彼女の声が弾んでいることに気が付いた。右手とは別に、背中に当たる柔らかい^{おっぱい}ものの感触が、わずかに動いている。

「香もね」

右手が前に回される。他方に倣うように、胸に添えられ、望んでいた通り、そこを虐めてくれる。

「えへへ、バレた？」

彼女の手が動くのに合わせ、彼女が躰を揺する。私が耐え切れずに声を漏らすと、彼女からも嬌声が上がる。二人の感覚が繋がって、一つの触感が何倍にもなって思考を蕩かす。時折、崩れた壁の間を抜ける風が不意に肌を撫で、それだけで登り詰めそうになる。

「――ねえ」

先に音を上げたのは私だった。思ったよりも上擦った、甘ったるい声が出て、恥ずかしくなる

。

「んっ、もう我慢できない？」

彼女の手が止まる。発情した躰は、^{ねだ}続きを強請り揺れる。

「馬鹿」

「寝たいなんて言ってたのは誰だっけ」

左腕の上で寝返る。思ったよりも香の顔が近くて、鼓動が早まる。

「香が煽るから」

右手が背を、脇腹を、^{さす}下腹を擦る。期待に背中が痺れ、それから逃れるように香を抱きしめる。

「とか言って、ほんとは期待してたんでしょ」

してない、とは答えられなかった。彼女の手が近づく下着の中が、不快なほどに湿っていた。

「――馬鹿」

「馬鹿だよ」

*

その夜も、彼女に躰を求められた。相変わらず適当な住処は見つからず、代わり映えしない荒屋に、満ちた月を浴びるシーツが、いつものように白く広がる。

いつもと違ったのは、彼女にあってはならないものが、その体軀に似合わない大きさのものが付属していたことだった。

声をかけても、彼女は返さなかった。いつもの彼女の表情のまま、シーツに押し倒され、押し掛かれる。少し強引ではあったが、それよりも彼女と結ばれることができる、という期待で、私の頭はいっぱいだった。

いっぱいだったはずだった。

前戯もほどほどに、いよいよ彼女の熱いそれが私のそれに触れた時、突然脳天から爪先までがひとつの感情で埋め尽くされた。

怖い。蒸し暑い夏の夜に、躰が震えた。

行為の先に待ち受ける痛みに対してではなく、初めて見る男性の象徴に対してでもなく、彼女に押しえつけられているという状況に対してでもなく。

目の前の人間が誰なのかが分からなくなった所為だった。腕を押しやる指の温もりが、ほのかに香る汗の匂いが、私を見つめるいつもの深い瞳が。ただの熱になり、鼻を突く悪臭になり、瑞々しい硝子球になる。

彼女はまだ私の中に押し入ろうとしていた。不自由な腕とそれなりに自由な首を振り回し、必死で拒絶を伝える。振り回した手が鼻頭を打っても、振り乱した髪が視界を遮っても、それは平気な、いつもの彼女のような顔をしていた。

痛みを耐えるせいではない涙が零れ跳ねた。

*

目を覚ました時、私は涙を流していて、滲んだ望月が私を見下していた。大して明るくもないのに、眩しくて寝返りを打つ。

重力に引かれた涙が、^{まなじり} 眦 から溢れた。

「泣いてるの」

昼間も話していたはずなのに、ひどく久しぶりに聞こえる。視線を上げると、いつもの彼女が微笑んでいた。ひととき、泣くことを忘れる。

「よしよし、どうした、怖くないよー」

彼女の細い指が私の頭を撫でる。いつもならそれと一緒に厭らしく素肌を弄る左手は、赤子をあやすように優しく、服の上から背中を^{なす}擦っていた。

母の胸に抱かれているように、脳の奥から暖かくなる。

「――香」

「うん、大丈夫、私はここにいるよ」

ああ、香だ。そう思った瞬間、忘れていた涙が再び流れだした。

「夢ね」

「うん。初めてを盗られる夢」
「誰にさ」
「決まってるじゃない」
「あ、ちょっと安心した」
「なんで」
「私以外の誰かじゃないんでしょ」
「――」
「――」
「馬鹿」
「わはらよ」
「本気で怖かったんだけど」
「ふおえんう」
「ねえ」
「あい」
「慰めて」
「やら」
「え」
「ふう。そういうときは、愛してって言うんだよ」
「――馬鹿」
「馬鹿だってば」

日が昇る。汗でべたつく躰を動かすのも億劫だった。それでも、口吻と抱擁は絶やさない。もう感じるのが相手の味か自分の味か分からないほどに、私達は口付けをしていた。

「百子」
唇を離し、息を切らしながら、彼女が私を呼ぶ。

「香」
甘え声を上げながら、溶け合った体温を混ぜあわせるように、彼女に躰を擦り付ける。躰じゅうが彼女を求めている、擦れるだけで気持ちが高まる。接吻の続きをしようと、唇を追いかける。

「朝だよ」
「うん、もっと」
だからどうした、と言わんばかりに、行為を強請る。

「やれやれ、いつもと逆だね」
「知らない、もっと」

「はいはい」
頤に指が添えられる。呆れたような彼女のかんばせが近づいて、続きが始まった。
お腹が空いても、躰が果てても、やめる気はなかった。

終

一人称視点でえちくするのは難しいです。言い訳です。

えっ今回のテーマ『愛』じゃなかったんですか（すっとぼけ）。

参考図書（コミック）

オクターヴ（秋山はる 講談社）二〇〇八～二〇一〇年

アンソロジー

百合缶 **Feuille**（エンターブレイン）二〇一一年 十一月

百合缶 **Miel**（エンターブレイン）二〇一一年 十二月

百合缶 **Petale**（エンターブレイン）二〇一二年一月

異戦士イダテン (今畑 鏡)

「異戦士イダテン」

原案 今畑 鏡

～テレレレッ！ テレレレッ！ テツテツテッ♪♪～（軽快な主題歌『ランナウエイ・イダテン！』）

——登場人物——

- ・門田ヒラク.....空間結合能力を持つ異世界から来た青年。本作の主人公
- ・糸切セン高い認知力を持つ少女。本作のヒロイン
- ・石井キワミ.....天才科学者の少女。父の石井オサムの跡を継いで研究施設「ケルベロス」の所長をしている
- ・ゴット・ストリングス.....神の糸おじさん
- ・雷帝ブリッツ.....異世界転生でテヘラン国を救った救世主。名の通り雷を操る。転生人間。正義の味方。英雄。

——オープニングナレーション——

【異戦士イダテン＝門田ヒラクは異世界人間であるッ。彼の故郷を滅ぼしたスディーレンは世界掌握を企む悪の秘密組織であるッ。異戦士イダテンは世界と平和のためにスディーレンと戦うのだッ！】

——第Ⅱ話——『雷帝ブリッツ！ 恐怖の停電ショー』

1

辺り一面が真っ暗な中、門田ヒラクは糸切センの手を引いて逃げていた。ときおり出る月明りのみが二人の足元を照らす。

辺りのビルの照明から街灯からネオンサインから全ての明かりが消えていた。停電である。「ウーイ」「ウーイ」と奇怪な声が響く。スディーレンの работник、バンデッドの声だ。

門田と糸切はバンデッドの声から離れるように裏路地をジグザグに走る。門田は空を見上げた

。あいにくの曇りのせいで星が見えない。どの方角に進んでいるのかわからなかった。

「ウーイ！ こっちにはいないぞ」

「向こうを探せ。きっとまだ遠くには行っていないはずだ！」

「ウーイ！」「ウーイ！」

（くっ.....追いつかれるのも時間の問題か）

おそらくバンデッドは五人。隊長を含めると六人だろうと門田は予想していた。

気が付くと、門田と糸切は立ち止まる。行き止まりだった。二人は息を切らした。

「ねえ、どうして私を助けてくれるの？ 私を無視して逃げればよかったのに。あなた一人だったらスディーレンから逃げ切れたはずよ」

糸切は息を整えながら言った。

「それは嫌だ。俺はもう目の前の人があいつらにやられるのを黙って見たくないんだ！」

門田は糸切に家族の面影を重ねていた。優しくあった母、時に厳しかった父、愛おしい弟。その全てを、故郷の星まるごとを滅ぼしたのがスディーレンだ。そして門田一人だけが助かってしまった。

(もう、俺一人だけが助かるのはたくさんだ)

「ウェーイ！ いたぞ！」 「ウェーイ！」 「ウェーイ！」

「しまった。追いつかれたっ」

門田の糸切の前には三人の全身がバンデッドがいた。黒ずくめのタイツを全身にまとっている。手には先端がU字型に曲がった長さ三メートルほどの刺股を持っていた。

門田にも糸切にも三人のバンデッドを相手取るほどの力はない。このままやられてしまうのも時間の問題だ。

「私、あなたの力に賭けるわ」

「えっ、俺の力？」

「ええ。私にはわかるの。あなたはここから逃げ出せる術を持っている。だって、あなたの運命線は綺麗なもの」

確かに、門田には空間を結合する能力を持っている。その力で偶然にも彼一人だけ助かったのだ。

「でも、俺の能力は欠陥品だ。入口はできても出口が作れない。ひとつ間違えば五次元の海に飲まれちゃうぞ」

「それでも、私はここであきらめたくない！」

ここで易々とバンデッドにやられるか、一縷の望みに賭けて五次元の海に飛び込むかを門田は天秤にかけた。

三人のバンデッドは刺又を構えると二人のもとへ一斉に突進してくる。

「バンデッドにやられるくらいなら！ 開け！」

門田は叫んで右手の手刀で空を切った。すると、グワンと空間が裂けた。

「手エ、離すなよ！」

門田と糸切は五次元の海へ飛び込んだ。

五次元の空間は、例えるならば生物が存在しない海である。海だということは当然空気がない。そしてどこからともなく潮の流れに似た空間流がある。

その五次元の海の中で、門田は左手で糸切の手を握り、右手の手刀で必死に出口を開けようとしていた。しかし、出口が開くことはない。

ゴボゴボと門田の口から空気が漏れる。糸切を見ると、ぐったりと気を失って空間流に体を預けていた。

門田の視界は霞みがかかった。それでも右手を動かす。

この少女を助けたいその一心だった。だが、今の自分にはここから出る方法がわからない。だんだんと手の感覚が無くなっていく。

(そろそろ、俺も限界か.....)

ふと、門田の右手に白い糸が絡まった。それは二人に差し伸べられた救いの手のようだと門田は思った。

門田は一心不乱に糸を掴む。そして、糸を腕にぐるぐると巻き付けると彼は意識を失った。

2

アコースティックギターの音色がする。そういえば弟もギターが好きだったなあと門田は思い出した。生きていればまた自分に一曲弾いてくれるのだろうか。

門田は後悔していた。家族を、故郷を失ってしまったこと。そしてなによりも、憎きスディーレンに一矢報いることもできずにただ流れ着いたこの世界で時を重ねていることを悔やんでいる

。
（ほら、こうして今日もまた温かい布団の中で……）

「って、ここは……どこだ？」

門田はベッドから起き上がりキョロキョロと周りを見た。隣にはブカブカな白衣を着た少女、石井がイスに座っていた。アコースティックギターを抱えて音色を奏でていた。

「どうやら目が覚めたようだな、門田くん。気分はどうだい？」

石井は手を止めた。

「あ……はい……」

「なに、そんな身構えなくてもいい。私は君の敵ではない。このラボ、ケルベロスの所長の石井キワミだ」

石井は門田に手を差し伸べた。門田も手を差し出し二人は握手した。

「俺の名前は門田ヒラクだ。どうして俺はここに？ 確か俺とあの子は五次元空間の中で……ってあの子はどこに？」

「大丈夫、糸切センは無事だ。隣の部屋でぐっすり寝ているよ」

「そうか……よかったあ」

門田はホッと胸をなでおろした。

「君たち二人を助けたのはゴット・ストリングスという男だ。来たまえ。君を彼に会わせたい」

石井は門田を連れてゴット・ストリングスの待つ指令室へ向った。

スウィーとドアが開くと、筋骨隆々の男が上裸で立っていた。下半身はパンツ一丁である。

ちなみに、このラボ、ケルベロスでは上裸の露出は認められていない。それは石井が天才科学者といえども中身は初心な乙女だからである。

「ちょっと！ 服、着なさいよ！」

石井は床に脱ぎ捨てられた服をゴット・ストリングスに投げつけた。

「ムムッ！ キワミか。ドアを開けるときはノックしてくれと言っているではないか！」

「自動ドアでノックなんてできないわよ！」

石井はドカッと丸イスに座り、手近なイスを適当に門田に勧めた。

「えーと、門田くん。このマッチョな男がゴット・ストリングスよ。あなたと糸切くんを助けたわ」

「いかにも、私がゴット・ストリングス。神の糸おじさんだ」

服を着たゴット・ストリングスは腰に手を付け胸筋をピクピクと揺らした。

「はあ……その節はどうも……ありがとうございます」

門田はゴット・ストリングスの振る舞いに圧倒されたようで小さく会釈するだけにとどめた。

「ああ……門田くんが驚いているじゃない。いい加減にしてよ」

「ムウ……私は筋肉的アイサツをしているだけだが」

「はいはい、こんなキモマッチョは無視無視。門田くん、説明始めるよ」

「はあ……」

「門田くん、あなたが寝ているときに色々調べさせてもらったわ。あなたはこの星の人間であって、この世界の人間ではない。そうでしょ？」

「えっ、どうして知ってるんですか？」

「まあ、そこは置いといて。血中記憶とか眼電トレースとか言ってもわからないでしょ。私が天才科学者だからってことにしといて」

どうやら石井は門田の経歴を知っているようだ。門田が異世界人であること、スディーレンに故郷を滅ぼされてこの世界へ流れついたことだ。

「実はね、この世界もあなたの故郷と同じくスディーレンに狙われているの。スディーレンの目的はただ一つ、世界掌握。リクルートと称して世界各地から人間を拉致しているの。そして拉致した人間を改造して転生人間として異世界に送り込み、統治活動を行っている」

「じゃあ、俺の故郷は……？」

門田ごくりと唾を飲みこんだ。

「多分、あなたの世界は転生人間によって統治（破壊）されたのだと思う」

転生人間の統治活動は平和的統治だと誰が決めただろうか。否、支配できればいいのであって破壊的統治活動だって当然あるのだ！

「ここ、ケルベロスはスディーレンの魔の手から世界を守るために日々研究しているの。門田くんには感謝しているわ。あなたのおかげで糸切くんがスディーレンに拉致されなくてすんだ。あなたの空間結合力のおかげよ」

「でも、俺の能力は欠陥品で……だから五次元空間から抜け出せなくて……」

「ムムム。私を忘れてもらっては困るな」

ゴット・ストリングスはスーっと白い紐をどこからともなく出した。そして、スイスイとあやとりをし「東京スカイツリー」と言ってツリー状の作品を編み上げた。

ゴット・ストリングスは几帳面な男なのだ。

「はいはい。あんたがいなかったら五次元空間から二人を救出できませんでした。ありがと。アリガト」

石井は淡々とあきれた様子で言った。

一方、門田は状況に追いつけず、とりあえず落ち着かせるためか「東京スカイツリー」を見つめていた。

無理もない。彼の目の前にはブカブカの白衣を着た天才科学者の少女と筋肉モリモリのマッチョが居るのだ。しかも、この二人がスディーレンに立ち向かっているというから驚きだ。

「話を戻そう。私たちケルベロスは門田くんの力を必要としている。どうか私たちの仲間になってスディーレンと戦って世界を守ってくれないか？」

話を戻すどころか、大きく躍進してしまった。

だが、この石井からの誘いは門田にとっては願ってもないチャンスだった。憎きスディーレンに一泡吹かせることができるのだ！

「おうよ。俺がスディーレンを倒す！」

即答だった。

3

深夜の住宅街。スディーレンの隊長、雷帝ブリッツはバンデット一小隊を引き連れて、今晚の獲物を探していた。リクルートである。住宅街は人影もなく、街灯のみがチカチカと彼らを照らしている。

雷帝ブリッツの全身反射板のような艶やかなスーツが光を反射する。

やがて一件の古びたアパートの前で立ち止まった。

「ここか？」

「ウェーイ！ あの部屋から生命力の強い男の反応アリッ！ ウェイ！」

雷帝ブリッツがバチンと指を鳴らした。

すると辺り一帯の街灯は電気が切れ暗くなった。

「おえ……火力発電の味がするぜえ。この味は苦手なんだよなあ。お前ら、早くターゲットを捕まえてこい！」

「ウェーイ」「ウェーイ」「ウェーイ」

バンデットたちはカンカンと金属音を立てながら階段を上って強引にドアと破って目標の部屋へ侵入した。

数分後、若い男がぎゃあぎゃああと喚きながらバンデットらに担がれてきた。

「なんだよお前ら！ この野郎ー」

男はバンデットの腕を振りほどこうと暴れている。バンデットの一人が黙らせようと男の鳩尾を刺又で殴った。

「ううう……お前ら……俺をどうしよってんだ！」

「あー騒がしい。正義の味方の俺たちはだな、この世界で平凡に暮らすお前を異世界の救世主にしてやろうってんだぞ。ありがたく思え。この童貞野郎！ ちょっと寝てろ」

雷帝ブリッツは男の頭に手をかざした。途端バリバリと電撃が男に降り注がれた。

ぎゃあ、と一声上げた男は白目をむき、だらりと唾をたらしながら意識を失った。ただ、体だけがビクビクと震えている。

「俺、魔物しか相手したことなかったから加減がわかんねえんだよなあ」

深夜の住宅街。辺り一帯が真っ暗な中、「ウェーイ」「ウェーイ」という奇怪な声だけが響く。今夜もまたスディーレンの転生人間によって一人の人間が拉致されたのだった。

まだ、異戦士イダテンは姿を見せない。

4

「昨夜を合わせると停電騒ぎは全部で十件を超えたようだな」

チツと石井は舌打ちをしてがしがしと石井は頭をかいた。

「行方不明者も増える一方だな。フンッ！」

ゴット・ストリングスは両手にダンベルを持ってトレーニングをしている。ちなみに重さは五十キロだ。今日はちゃんと服を着ている。

「これも全部きっとスディーレンの仕業だ！ 門田くんは何をしているの！」

「えーと、神の糸の巣からやっど右手を出したところですよ」

糸切はモニターを見ながら言った。

数日前から門田は特訓としてゴット・ストリングスによって全身グルグルに縛られていた。無論、門田に緊縛欲があるわけではない。スディーレンと戦うための特訓である。これをクリアすることで角谷は

一部屋丸ごと使って蜘蛛の巣のように神の糸を張り巡らせ、その中心に門田はいた。今はやっど右手が使える状態である。

「くそっ！ 早くしないと……おりゃあ！」

糸の一本一本は細く、見た目では力づくで裂けそうだが、この糸は神の糸であり五次元空間から門田らを救った糸である。裂けるわけがない。

門田は抜け出そうと体を反らせたりひねったりして糸を解こうとする。だが、足先が自由になれば左腕がさらに締め付けられ、左腕が自由になれば首が締まる。状況は拮抗しており、数日前

と見た目ではあまり大差がなかった。

「門田ボーイ、早く私のトレーニングルームを返してくれないか。このままじゃ私は筋肉中毒の禁断症状で倒れてしまうよ」

「あ、ゴット・ストリングスさん」

ゴット・ストリングスは門田の姿を見るなりムフウとため息を漏らした。

「このままではひと月経っても抜け出せないぞ」

「すみません。でもどうやっても抜け出せれないんです。あっちをやればこっちがダメになるし……ほら、さっき解けたと思った右手もまた絡まっちゃって……」

ゴット・ストリングスは門田のもとへ近づくとゴツゴツと人差し指で彼の頭を叩いた。

「門田青年よ、森ばかりに目を捕らわれるんじゃない。木を見るんだ。この糸は君の敵じゃない。フレンドさ」

そう門田に伝えると、ゴット・ストリングスは部屋を後にした。

「門田クンの様子は？」

「何もいたって正常だ。私の糸との適合率も高水準をキープしている」

石井の問いにゴット・ストリングスは淡々と答えた。

「あいつは紛いなりにも異世界からやってきた人間だ。もし変な行動をしたら糸で縛り殺しても構わない」

石井は手に写真を握っていた。写っているのは石井の父と幼き彼女と若きゴット・ストリングスである。

石井の父は現在、この世に存在しない。スディーレンに拉致されたのである。今頃どこかの世界を統治しているかもしれない。もちろん転生人間として。

石井はスディーレンを憎んでいる。だからこそ簡単に異世界人である門田を信用できなかった。それでも、門田はスディーレンに対抗できる唯一の存在なのだ。

ガラガラと食事を載せたカートを押して糸切は門田のもとを訪れた。食事の時間である。

門田は身動きできないから毎回食事を運んで食べさせるのだ。この作業は糸切が行っている。

「門田さん、お昼ご飯です」

「おお。糸切か。今日の昼ごはんはシチューか。ごめんな、手伝ってもらって。早くここから抜け出したいがどうも上手くいかない」

糸切はじっと門田を見つめた。それからスカートのポケットから紐を取り出してあやとりを始めた。

「あの、糸切さん。ご飯は？」

糸切は門田の口元まで食べ物を運ぼうとしない。糸切はぎこちない手つきで紐を何回か指にひっかけて箸を作った。

「門田さん。私、門田さんとあやとりしたいです。ご飯ならここにあります。早くこっちに来てください」

「でも……俺動けないし」

「空間を移動すればいいじゃないですか」

「っ……」

門田は言葉を詰まらせた。

わかっていたことだった。空間結合力を使えばこの糸の巣を解くことなく抜け出すことができる

。しかし、門田には勇気がなかった。溺れかけた五次元の海へもう一度飛び込む自信を持ち合わせていなかった。

「門田さん。私を助けてくれたときはできたじゃないですか」

「それはあの時は緊急だったからで、それにゴット・ストリングスさんが助けてくれたからどうにかなったわけで……俺一人じゃできなかった」

糸切は門田のもとへ近づくと思いっきり彼の頬を叩いた。風船が割れたような音が部屋に響く。

「今日も誰かがスディーレンに襲われてるんです。あの夜私を助けた門田さんはどこに行ったんですか！ 私、今の弱虫な門田さんは好きになれません！」

糸切は泣いていた。悲しいからではない。彼女なりの必死の励ましだった。

「私はここに居ます！ ほら、来てください！」

糸切は両腕を広げた。門田を受け止めるつもりだ。

門田は決意を固めた。このまま自力でこのがんじがらめに絡まった糸は時間をかければ解けるだろう。けれど、自分がここで立ち止まっている間に今日もまたスディーレンはこの世を襲うだろう。許せん！

「行くぞ！ 開け！」

叫ぶと同時に門田は五次元の海へ飛び込んだ。

五次元の海は相変わらず何もない。その中で門田は小さな光点を見つけた。

(糸切！)

門田は光点に近づいて腕を振る。だが、三次元への出口は作れない。

(作れなければ、壊すまで！)

門田は光点に向かって強引に体ごと拳を叩きつけた。

バリバリとガラスが割れた音がし、その隙間から糸切の姿が見えた。

「うおおおおお」

勢いあまって門田は糸切にぶつかる。糸切は衝撃で尻もちをついた。

「できたじゃないですか」

5

あくる日の深夜、雷帝ブリッツはバンデットを引き連れてリクルート活動をしていた。今回は工場に獲物が居るようだ。人影はなく辺りは静かだった。

「おい。俺のノルマってあと何件だ？」

「ウェーイ！ あと三件になります」

雷帝ブリッツにはリクルートのノルマがある。これは異世界転生の条件としてスディーレンから与えられた使命だ。自分の故郷である世界でリクルートをするのだ。

彼はあと三人リクルートすることで統治するテヘラン国へ戻ることができる。彼はテヘラン国では救世主として称えられている。その身に宿る雷の力で魔族を滅ぼしたセイギの味方なのだ。

「今日のターゲットはここか。お前ら行って来い！」

雷帝ブリッツの指示にバンデットが一斉に工場内に侵入した。

チカチカと消えかけの照明が光っている。

素早くターゲットのいる部屋に向かって走る。するとバンデットの一人が声を上げた。

「ウェーイ！ 一人いないぞ」

気付くとバンデットの一人が跡形もなく消えていた。バンデットは辺りを見回す。ふと視線の端に何か動いたように見えた。

「ウェーイ！ 誰だ！」

バンデットは刺又を振り回し威嚇するが何も見えない。

ポタリポタリと滴の垂れる音がした。音のする方に刺又を向けた。そこにはドブネズミがいた

「ウェーイ！ ネズミごときが、驚かせるんじゃない！」

バンデットは苛立ちをぶつけるようにドブネズミを蹴り上げた。

「ウエイウエイウエイ！」と笑うバンデットは後ろを振り返った。そこには誰もいなかった。

「ウェーイ？」だらりと冷汗が体を伝う。

「お前も沈め……」

ふと、バンデットの耳元でささやく声がした。急にバンデットの体が沈む。沈んだ先は五次元の海だ。バンデットはもがきながら上を見上げた。彼が立っていたであろう場所には、白銀のスーツをまといフルフェイスヘルメットを被った男が居た。

「遅いぞ、何やってんだ」

雷帝ブリッツはぼやく。

バンデットが工場に侵入してから五分ほど経ったがターゲットを捕獲して出てくる様子はないからだ。

「まったく、どこで油売ってるんだか……クソが！」

「お前の仲間は一人残らず倒したぞ」

急に聞こえた声に反応し、雷帝ブリッツは音源から距離を置いた。

どこからともなく現れた男は白銀のスーツをまとい、フルフェイスヘルメットを被っていた。

「お前誰だ！」

「俺は！ スディーレンから世界と平和を守る、異戦士イダテンだ！」

イダテン（門田ヒラク）は雷帝ブリッツに向かって叫ぶとファイティングポーズを構えた。

「イダテンだあ？ 貴様、俺が雷帝ブリッツだと分かってやってるんだらうなあ！」

「スディーレンの転生人間は許さん！」

「ぶっ殺してやる！」

雷帝ブリッツは両手をイダテンに構えると五万ボルトの雷撃を食らわせた。

高電圧の稲妻が閃いてイダテンに降り注がれた。白煙が立ち上り、焼けた土の臭いが立ち込める。

「フン、焼け死んだか」

雷帝ブリッツは振り返った。すると眼前にイダテンの拳があった。

まずい、と雷帝ブリッツは自らの身を電気に変えて回避行動とる。閃光が走り雷帝ブリッツの実体が消える。が、しかし。雷帝ブリッツの顔面にイダテンの固く握った拳がクリーンヒットした。予想外の攻撃だった。

雷帝ブリッツは吹き飛ばされ地面に倒れこむ。防御姿勢をとらなかったのだ。モロにパンチを食らった。だらりと雷帝の顔に鼻血が垂れた。

エレキ化で避けられない攻撃など今までなかった。魔物からの爆炎もドラゴンの鋭く尖った鉤爪もエレキ化の前では無力だったのだ。

その理由はイダテン輝く白銀のスーツにある。イダテンのスーツはゴット・ストリングスの神の糸で編みこまれたものだ。五次元の海にも耐えられる糸である。当然、電気にも触れることはできるのだ。

起き上がる雷帝ブリッツに対しイダテンは再びファイティングポーズを構える。

『油断しないで。相手がイダテンの力に気付く前に倒すの！』

「了解！」

雷帝ブリッツはイダテンに対し雷撃の散弾を放つ。だが、またも後ろをとられて背中にジャブが当たる。

「ちょこまかと動きやがってこの野郎！」

素早く動くなら雷帝ブリッツは三百六十度に稲妻を展開した。イダテンが近づいた瞬間に攻撃する算段だった。

だが、今度は空中からイダテンのキックが飛んできた。蹴りが雷帝ブリッツの肩に直撃する。雷帝ブリッツは為す術もなく膝をついて倒れこんだ。

「クソが！　なんだよお前は？　俺は救世主だぞ！　正義の味方だぞ！　テヘラン国を救った英雄だぞ！」

「だが、お前は这个世界で悪事を働いたことに間違いはない！　来い！」

イダテンが叫ぶと空間に穴が開き、そこからイダテンは大型のビーム砲を取り出した。両手で握り、腰を据えて銃口を雷帝ブリッツに向けた。

「くらえ！」

両手でトリガーを引く。バチバチとスパークしたビームが発射された。

衝撃で爆炎が立ち上り夜だというのに一帯は煌々と明るくなった。

「やったか？」

『まだだ！　避ける門田！』

炎の中で何かが輝いた。とっさにイダテンは上空に逃げた。直後に雷槍が下をズバッと駆け抜けた。

「ふはは。イダテン、貴様は馬鹿か！　阿呆か！　ハハハハハ！　格別だ。美味！」

爆炎の中から雷帝ブリッツは無傷で現れた。先ほどイダテンが与えた傷も消えている。それだけではない。全身が光り輝いていた。ビーム砲の全エネルギーを吸収したのだ。

「俺は雷を自由に操る男だぞ！　ビームが効くものか。むしろ好物だぞ」

しまった、とイダテンは身構えるが遅い。一撃目より何倍も速い雷槍がイダテンの左腕を擦った。

痛みに声を上げたイダテンは空中へと空間移動したが、

「今の俺には丸見えなんだわ」

移動直後のイダテンに雷撃が降り注いだ。雷の雨だ。慌てて防御姿勢をとるも遅い。雷撃とともに地面に落下した。

「ほらよ、逃げてみる。逃げてみる！　ほらほらほらあああ！」

続けざまに雷帝ブリッツは電磁力で砂鉄を集めると、鞭状の形に生成して振り回した。

イダテンは空間移動を試みようとしたが遅い。鞭で足を絡めとられ捕縛された。

雷帝ブリッツは全ての反応においてイダテンを上回っていた。

それもそのはず。人は電気信号で体を動かすが、今の雷帝ブリッツは常時電気そのものだ。

思考、行動全てが最速で行われるのだ。

「ほお、あの雷撃の雨を浴びても傷がついてないのか？　そのスーツ、意外と硬いな。どれ」

雷帝ブリッツは砂鉄で頭蓋骨など粉々に叩き潰せるほど巨大なハンマーを生成した。そしてイダテンの頭めがけて振り下ろした。鈍い音、痛みに耐えかねて上がる絶叫、バキとフルフェイスヘルメットのバイザーが割れた。

「ほお、雷撃には強くても物理攻撃には弱いんだな。まあ中身が人間のまんまだもんな。仕方ねーか、ハッ！」

イダテンは痛みのあまりに意識を失っていた。どろっと額から顎にかけて血が流れた。

『おい！ 大丈夫か、イダテン！』

割れたヘルメットの隙間から石井の音声が漏れた。

「なんだ？ 俺と戦っているながら女の子とおしゃべりしてたのか？ おい！」

雷帝ブリッツはバチンと指を鳴らした。ジャミングだ。石井との通信は切れてしまった。それから、イダテンのはみ出た部分（生身）に死なない程度の電気を流し込み強制的にイダテンを叩き起こした。

「おい、気分はどうだ？ イダテンさんよお。正義の鉄槌の気分はどうだ？ 痛いか？ 苦しいか？」

イダテンはひゅうひゅうと全身で呼吸する。

「せ……正義の味方は……こんなむごい事しない……沈め」

イダテンは雷帝ブリッツの足元に五次元への穴を作った。しかし、奴は沈まず空中に浮かんでいた。

「ムダなあがき！ 死ぬまで電気ショックでも浴びてな！」

「ぎゃあああああああああ」

絶えず死なない程度の電気ショックを浴び、イダテンは意識の明暗と金切声を繰り返した。

「お前を殺してから、さっきの女も殺してやるさ」

（声が聞こえる……女？ 石井さん……糸切さん……）

「そ、そんな、ことさせない」

なんでもいい。誰か。何か。助けてくれとばかりにイダテンは空間に穴をあけた。

タンっと軽い足音がした。

「来ちゃった」とイダテンの耳に聞き覚えのある声が届いた。

声の主は糸切センであった。

「い、いとき、り……？」

「なんだこの小娘は？」

雷帝ブリッツはすぐさま糸切の体を砂鉄の縄で工場の壁に貼り付けた。

「ひょっとしてイダテンの仲間か？ よくもまあノコノコと！」

雷帝ブリッツが糸切の方へと向かう。イダテンも必死の動こうとするが彼の体は言うことをきかない。

「イダテン！ 1502,5976,4793。これがこいつの弱点！」

門田はこの数字の羅列が座標を指していることに気付いた。しかし、それがどこなのかわからなかった。

「おい、小娘。俺の妃にでもしてやろうか？」

糸切はぶんぶんと首を横に振った。

「冗談だよ。じゃあ、小娘、お前から先にやってやる。怖いか？ 怖いかあ～？」

雷帝ブリッツは手のひらでバチバチと稲妻を発生させる。それに対し、糸切はじっと目を閉じていた。イダテンにこの命を委ねているのだ。

「おい、かみなりブリッツ！ 俺はこの拳でお前の顔面を殴ったぞ！ ところがどうだ。お前は俺より先にか弱い女の子を殺そうってのか？ 冗談じゃない。そんなに俺が怖いのか？」

イダテンの叫びに対し、雷帝ブリッツの額に青筋が浮き出てデカイ雷が落ちた。

「じゃあ、ご希望通りお前から殺してやるよ！」

雷帝ブリッツは一層全身を光り輝かせて空高くジャンプした。

最強の魔物を倒したとされるあのブリッツキックである。雷の如き速さと強靱さで相手を粉々にする必殺技だ。

雷帝ブリッツはイダテンめがけて跳び蹴りを行う。その時、イダテンは目の前に糸切が教えた座標に合わせて空間結合の穴を作り出した。

「貴様の魂胆は丸見えだ！」

雷帝ブリッツはキックの軌道を変えた。が、穴に近づいた瞬間、雷帝ブリッツの足先は穴に吸い込まれた。

「な、なんだこれは！ うわああああああ！」

「あなたの故郷、テヘランへ帰りなさい！」

穴の向こうは雷帝ブリッツの故郷のテヘランだった。生命は自らの故郷である世界と引力のようなもので繋がっている。無論、転生人間も例外ではない。

雷帝ブリッツは引力によってテヘランへと吹き飛ばされたのだ。

6

アコースティックギターの音色がする。そういえば弟もギターが好きだったなあと門田は思い出した。生きていればまた自分に一曲弾いてくれるのだろうか。

門田は後悔していた。家族を、故郷を失ってしまったこと。そしてなによりも、憎きスディーレンに一矢報いることもできずにただ流れ着いたこの世界で時を重ねていることを悔やんでいる。

（ほら、こうして今日もまた温かい布団の中で……ってあれ？何か一度こんなことがあったような……）

「って、おい！ ここは？」

門田はベッドから起き上がろうとした。が、激痛で起き上がることはおろか首を動かすことすらできない。隣にはブカブカな白衣を着た少女、石井がイスに座っていた。アコースティックギターを抱えて音色を奏でていた。その横では糸切があやとりをしている。

「どうやら目が覚めたようだな、門田くん。気分はどうだい？」

「俺はあのあと……」

「壁から剥がされて落ちてきた私を受け止めて気を失いました」

糸切はあやとりをする手を止めて門田を見た。

「俺は……勝ったのか？」

「生きているのが証拠です。門田さん、早く治してください。私、二人あやとりがしたいんです」

門田はふっと口角を上げてほほ笑んだ

※

イダテンの活躍で初めて転生人間の撃退に成功したッ。が、未だスディーレンの魔手は伸びているッ。明日の戦いに向けてイダテンは決意を新たにするのであったッ！

『次回予告』

世界掌握を狙うスディーレンが送り込む新たな転生人間、その名も『炎城豪！』バーナートラックを駆って人々を襲う。イダテンと繰り広げられる壮絶なカーチェイス！ 「次回、異戦士イダテン～熱狂！ 真冬で火（カ）ーチェイス」お楽しみに

あとがき

イダテンの由来は異(イ)世界転(テン)生を打(ダ)倒するヒーローから来ています。

嘘です。韋駄天からとりました。ハイ。盗難避けの足が速い神だそうです。

今回は色々と無理をしました（主に締め切り）ホントごめん！

って、毎回あとがきで謝罪してますね。すみません。

聖母（鯨沢 増穂）

聖母

鯨沢 増穂

昔から後ろ指をさされていた

素直でなくて、甘えることを知らない、愛想の一つも言えやしない……強がりの、つまらない奴だと

それがどうしても、可愛げのない女と詰られているようで

黄色い笑い声をあげ、着飾る年頃の娘たちとすれ違いざま、柔らかい香りに鼻を誘われるままショーウィンドウに姿を映す

流行りのドレスに重なって、ガラスのサッシに閉じ込められたのは、一切の媚びも厭う痩せ細った娘だった

思わず強がって顎を上げる

可愛げなんかあってたまるかと、惨めな味のする唾と一緒に吐き捨てた途端

そこに映った娘たちの一人が振り向く、その黒真珠の裏にある白い目が、マスカラの塗られた長い睫毛が、ルージュのひかれた唇の描く弧が、ふくよかな頬に含まれた愛嬌が、ああ、ああ、ああ

見えないつららを無神経に手折るや否や、気障たらしい笑みとともに深々と胸へ突き刺すのだ刹那、冷たい業火が頬を張るように緋くはじけ、じわじわと喉を塞ぐ鈍い痛みで膝が折れるぐっとくいしばって握った拳を見れば、ごわごわと波打つ剛毛に侵され、おぞましい獣の臭いが脳を抉り焼いた

可愛い女と言われてみたい

可愛げのある女となって微笑してみたい

それでも私は突っぱねるだけ突っぱねることができるという自由な虚しさを前に身体が強張る蛭に食われるような孤独が、うごめく闇となって私の足元を蝕み巣食うから

気づけば背後で刻々と波打つ、漆黒に濡れた深淵が広がる

きわどい崖の淵で渦巻く冷たい霧がこうこうと呻き、私はたまらず爪先立つしかないだけなのに

ああ、聖母に惑わされる愚かな男たち

爪が割れ苦い血の滲む娼婦のつま先にひれ伏させてやりたい

ああ、憎々しいほど自分勝手な男たち

せいぜい聖母の奏でる唄の虜になり、酔いしれるままに魔性にいざなわれ、高笑いに敷かれてしまうがいい

男たちに捨てられた無残な娼婦の屍が折り重なる街へ

私はショーウィンドウを睨み据えると踵を返し、喘ぎに似たか細い歌を口ずさみながらスカートのすそを翻し

歩いた

清教徒

鯉沢 増穂

くっと気取って伸ばした足先から、赤いパンプスが脱げて落ちる
私は私に嘘をつき、今夜初めてお酒を呑むわ
いけない娘と笑うがいい
愚かな娘と嗤うがいい
何かの拍子でこぼれたお酒が、グラスを伝って涙を流す
震える指でひとしずくすくい、コースターの裏にそっとなぞったあの人の名前
それはひどく衝動的な刻印となり、私の体が浅ましい熱を帯びて昂る
夕暮れに溶けるバーの片隅、ともにドロドロとただれる両肩を抱き
いまだ来ない彼の面影に想いを馳せわななく私は、今夜が最後の清教徒

ゼロの零乗 (夏草 こくりこ)

ゼロの零乗

夏草 こくりこ

「僕はもう、卓球をやめる。これからは、おまえ一人でコートに立つんだ……零」

二七四センチ。それが、卓球という競技における選手間の距離である。

狭い空間に、たった二人の選手とひとつのボール。この競技を行うには、なにより誰の助けも借りられないという孤独を背負わなければならない。

「だからあんたも、いいかげんその動きやめな、零」

カコン、カコンとピンポン玉を打ち合う音が響く中。ここ、『笹倉卓球場』の店主、笹倉こずえは声をかけた。相手は今、こずえの前で年配の男性とラリーを続けている少女だ。

東坂零。幼い頃からこの卓球場へ足を運び続け、今ではどの年配の常連客より常連となった高校二年生。

彼女は一度球を打ち返す事に一步後退し、まるで隣に誰かがいるかのように、前方のスペースを明け渡している。

「しょうがないでしょ、もう癖みたいなもの、なのっ！」

言いながら、零は返ってきたボールを力強いスイングで相手コートに叩きつける。そこでこずえは手を叩き、「はいはい、ゲームセット。三対〇で零の勝ちだね。そのスタイルでなまじっか強いんだから、余計にたちが悪いよ、あんたは」

「いいの。もう、私自身が直す気ないんだから」

こずえに背を向けたまま答え、零は対戦相手と試合後の握手を交わす。

「いやあ、零ちゃんも強くなったなあ。もう、ここにいる連中じゃ誰も歯が立たないね」

相手は汗を拭きながら、自分の孫を褒めるように零に微笑んだ。

「ありがとうございます。またお願いします」

「でも零ちゃん、儂ら年寄りと打つより、もっと若い子たちと打つ方が練習になるんじゃないかね？ ほら、確か零ちゃんとお兄さんも、卓球やってたんじゃなかったか？」

お兄さん。と、その言葉を聞いて、零はラケットをぎゅっと握り締めた。

東坂累。高校三年生。零と同じ高校に通い、そして今年はまだ受験ということもあって、塾にも通い始めた。当然帰宅は遅くなり、零と顔を合わせる機会も以前よりは格段に減った。そして、累はすでに、卓球をやめている。

「……兄貴」

時は、遡る。あれは、丁度今から二年前。夏も過ぎ去り、秋に差し掛かろうとしていた時期。

卓球には、ダブルスという試合形式がある。通常、一対一で行われる試合がシングルスと呼ばれるのに対し、ダブルスはその名の通り、二対二で行われる変則的な試合。

球を打つ順番が決まっており、同じプレイヤーが二度続けて相手への返球をしてはいけない。そのため、ダブルスのペアは息を合わせ、次のプレイヤーが打ちやすくなるような動きを心掛けなければならない。故に、互い

に力を引き出せる環境を作っこそ、最高の相棒と呼べる。

「――僕は零に、最初にそう教えたはずだ」

累の表情は険しかった。誰も、こずえもない笹倉卓球場で、コートを挟んで向かい合う零と累。

「い、いきなりどうしたのさ兄貴。学校終わったらすぐに笹倉に呼び出してきて。こずえさんも、いないみたいだし……」

「こずえさんには席を外してもらった。十五分ほどしたら、戻ってくる。それまでに、話を終わらせよう」

「話……？」

累は、手にしていたラケットを台の上に置いた。

「……今日限りで、僕は卓球をやめる。零、おまえとのダブルスも解散だ」

「な、何言って……」

零の言葉を遮るように、自分のラケットを見つめながら、累は続ける。

「僕にはもう、これ以上の進歩が見られないんだ。このままではダブルスで、おまえの足を引っ張るだけの存在になる」

「そんな――そんなことないよ！ 兄貴もまだ高一でしょ？ これからももっと頑張れば――」

「違うんだ！」

累の声に、微かに零の身体が震えた。今の兄から感じるのは、普段の優しさや暖かさではなく、もっと冷たく、痛々しいものだった。

「違うんだよ、零。僕は、これでも努力しているんだ。中学、高校の部活は勿論、毎日のようにここに通って、こずえさんの指導を受けている。暇があれば卓球のことを考え、時間があれば素振りをして、僕は強くなろうとしたんだ……。なのに、成果は、これだ」

累はポケットから一枚の紙を取り出した。夏の大会、男子シングルのトーナメント表。左下の方にある黄色のマーカーが引かれた『東坂累』の名前は、一回戦のところで線が止まっている。

線の脇に書かれたセットカウントは『一一三』。良い結果とは言えない。ましてそれが、小学校低学年から卓球を始め、先ほど言った通りの練習を積み重ねてきた者であれば、なおさら。

零は、言葉に詰まった。兄の言葉に押されたからだけではない。それは、零も薄々感じていた事実だったからだ。

――致命的なまでの、才能の欠如。

努力は必ず報われるとか、努力は才能を凌駕するとか。そういう話はよく耳にするが、所詮実力というものは努力と才能の足し算に過ぎない。累の積み重ねた努力は、一般人の持つ平均的な才能にすら及ばない。その差を作っているのは、ひとえに才能という先天的なものだった。

累は、それを感じた。今までは周囲の才能の開花が遅れていたこと、そして零とダブルスを組んでいたことで、だましだまし勝利を得ていたが、零と学校を離れ、一人で挑んだ試合は、残酷すぎるほどに自分の力を思い知らされた。

「僕はもう、ラケットを握らない。だから零、おまえももうダブルスにこだわる必要はないんだ。僕と違って、おまえにはシングルスでもやっていけるだけの才能が――」

「そんな話してないよ！ 才能とか、そういう問題じゃない……私は、兄貴とダブルスの試合に出たいから、頑張ってる、のに」

言いながら、零の声は弱々しくなっていた。累の顔に浮かぶそれが妹に対する、妹の才能に対する妬みだと悟った瞬間から、零の体からは、力が抜けていった。

零が口を閉ざすと同時に、累は踵を返し、玄関へ向かった。

「僕はもう、卓球をやめる。これからは、おまえ一人でコートに立つんだ……零」

零は台に両手をついて、微かに嗚咽を漏らした。

それに振り返ることなく玄関の引き戸を開け、累は外へ出ていった。入れ替わるように、こずえが中に入ってくる。零の見たことのない表情を見て、しかしこずえは零になにも聞かずに、ただ「鍵を閉めるよ」と言って、零の頬を拭った。

私のせいなのかもしれない。と、零はふとそう思うことがある。

兄がラケットを置いたのは、自分が努力せずして勝ち取った――いや、兄から奪い取ってしまった卓球の才能のせいではないか、と。

それでも零は卓球をやめようとはしなかった。今、ここで自分も兄と同じ道を辿れば、それで苦しむのは私ではなく兄だから。そして、卓球が好きだという自分の気持ちに、嘘をつきたくはなかった。

「あー、そうそう、あんたに教えとくことがあった」

零の長い思考を断ち切るように、こずえが零に呼びかけた。

こずえは自動販売機の横においてある棚から、紙切れを一枚引っ張ってきた。そこには、『交流試合』という文字と卓球台の写真、隅に住所と電話番号、西岡という名前が書かれていた。

「これは？」

「この西岡って男、あたしと古い付き合いでね。隣町で卓球教室開いてんのさ。そこの交流試合があるんだと。腕試しにどうだい？」

「隣町かあ。景品でもあれば、喜んで飛んでいくんだけどね」

零は微笑し、こずえも「同感だね」と言って頷く。帰宅の準備が整った野田にも紙を見せ、一緒にどうかと誘ってみたが、来週末は予定があるらしく、零は一人で交流試合へと向かうことになった。

白い廊下。東坂累は、そこを全力で走っていた。こんなにも全力で走るの、卓球をやっていた頃以来――二年ぶりだった。

途中、「危ないので走らないでください！」と何度も注意を受けたが、それでも累は走るのをやめなかった。一刻も早く、零のもとへ辿り着きたかった。

今から二時間前。休日にも関わらず塾の学習室で課題をこなしていた累のもとに、母親から一本の電話が入った。

耳を疑う内容。零が、交通事故に遭ったのだと言われた。

事故が起こったのは隣町。零はなんでも、卓球の交流試合に行く道中で、居眠り運転をしていた車にはねられたらしい。

嫌な想像が頭を埋め尽くし、心臓が耳を裂くほどにうるさく脈打つ。累は学習室を飛び出し、すぐさま電車で隣町の病院へ向かった。

「零！」

累が病室に駆け込むと、担当医師らしき男と看護師の女性、そして父と母が話していた。

「……累」

青ざめた顔で母がこちらを向く。医師も振り返り、累をベッドの傍まで誘導した。

「あ、あの、零は大丈夫なんですか！ こいつ、卓球やってて、それで――」

「安心してください、外傷はほとんどみられません。運動全般に関しては、まったく問題ないでしょう」

医師はカーテンを開けると、零がベッドに横たわっていた。確かに顔や腕に擦り傷がある程度らしく、累は

胸を撫で下ろす。

「ただ――」

医師は、一転して険しい表情になり、続けた。

「ただ、頭をぶつけたのか、記憶が曖昧になっているようです。今は眠っていますが、先ほどお父様、お母様と面会された時は――」

「累。さっきのこの子の口ぶり、記憶が二年前に遡ってるみたいだったわ……」

「二年、前」

母の言葉に、累の体中から、冷や汗が吹き出した。

「だってこの子、『兄貴は？ また卓球？』って、そう言ったの。あなたが卓球やってたの、二年前のことじゃない」

「勿論、それだけで記憶が遡ったとは判断できませんが、それでも次に目を覚まされたとき、同じような状態であればやはり一種の記憶喪失と診断せざるをえません。ひとまず、今日は入院という形を取って、経過をみましょう」

そう言って医師は看護師と短く会話した後、病室を出ていった。

どうしよう、どうしようと呟く母の背中に手を当て、父は「零のことは私たちが見ておく。おまえは家に戻りなさい。何かあれば、すぐに携帯に連絡を入れる」と、そう累に告げた。

帰り道の足取りは、ひどく重かった。しかし、気が付けば累は自室のベッドに横たわっていた。どうやって帰ってきたのかも、よくわからない。

ただ、自分が何もしてやれないことが悔しく、累は声を押し殺して、自分の無力さを呪った。

せめてあの時、僕が傍に居れば――

時は、遡らない。

壁にかかったカレンダーを見ると、二〇十六年と書いてあった。

ああ、本当に私はこの二年間のことを忘れてしまったんだな。と、どこか他人の事のように、零は思った。

事故が起きてから一週間が過ぎた。医師の診断のもと、週一回のカウンセリングは継続するが、外傷はほぼ完治しているため、零の記憶喪失は自宅での療養を試みることとなった。

「なんか、変な感じ。誰かが勝手に模様替えしたみたい」

零は自室に入ると、机の上や本棚をまじまじと見つめた。変わったのは家具の位置だけでなく、見覚えのない教科書や参考書が並んでいる。パラパラと何ページかをめくってみるが、書いてあることがさっぱりわからない。

「夢じゃないとしたら、結構危ないよね、これ」

テストや成績のことを考え、零は嘆息した。

「勉強くらいなら、僕が見てやるよ」

部屋の入口から、累が答えた。

「零は元々、要領がいいんだ。大丈夫だよ」

「でも、兄貴受験生になったんでしょ？ そんな余裕、あるの？」

「心配するなよ。これでも十八年、妹の面倒を見続けたんだぞ」

「……そっか」

零は教科書を閉じ、ベッドに腰かけた。それからゴソゴソと自分のバックの中を漁り、ラケットの入ったケースを取り出した。

「練習、続けてたんだよね」

「ああ。二年間、休まず笹倉に顔を出していたよ」

目を覚ましてから、何度も交わした問いと答え。

「兄貴と卓球、続けてるんだよね」

ラケットを引っ張り出し、零はその手触りを確かめる。

「……ああ。そうだ」

「ふふ。そっかそっか」

零は楽しそうに、ラケットを何度も振ってみせた。

「原因を作ってしまった身で、こんなことを言うのも気が引けるけどね」

それは、零が目を覚ました、翌日のこと。

累とこずえは、笹倉卓球場のベンチに並んでいた。

「あんたしかいない。あたしや、そう思ってる」

目を覚ました零の記憶は、やはり二年前に遡っていた。中学三年生。そして累が高校一年生の頃——夏の大会が、終わったあたりだ。

「偶然とは思えないんだよ」

「偶然、ですよ」

累は力なく、笑った。

「あたしにやどうしても、あの子が失ったものを取り戻そうとしているように見えちゃうのさ。失った兄、相棒——あんたをね」

こずえは立ち上がり、棚の中から一本のラケットを取り出す。

「受け取りな。二年前、あんたが忘れたもののひとつだよ」

旧式モデルのペン型ラケット。指の形に合うように削られたグリップと、すり減ったラバー。すべて、二年前のあの日、累が笹倉卓球場に置いていった時のままだった。

「僕に、どうしろっていうんですか」

「もうひとつの忘れもんを、取りに行くんだよ」

こずえは、無理やり累の手を開かせると、そこにラケットをのせた。

「二年前。あんたはこのラケットと一緒に、相棒への配慮を忘れて逃げた。自分の弱さと向き合うことが怖くて、あの子の気持ちを考えずに一人でラケットを置いた」

「……………」

「裏面、見てみな」

累はラケットをひっくり返す。シェークハンド型と異なり、ラバーが貼られていないペン型の裏面。

『手に取るのが遅い！ 待ちくたびれたぞ！』

色褪せた文字。名前もかかれていない。しかしわかる。十八年、何度も目にした零の字だった。

「今度こそ、隣に立ってやんな。兄なら、相棒なら——あの子が作った空白を、埋められるはずさ」

「いや——やっぱり、ダメだよ」

ラケットを握ると、削ったグリップに、累の指は合わなかった。

「まずは新しいラケット一式、揃えないと」

色褪せた文字は、滲んだ文字へ。

時は、遡ることなく、進み続けた。
そして、再び、二年の時が過ぎる。

「しかしまあ、大したもんだねえ、あんたも」

笹倉卓球場。先日からかけ始めた老眼鏡を拭きながら、こずえが言う。

「妹の勉強見続けて、自分も妹も大学進学。その上卓球の腕まで驚くほど上げちまうんだからさ」
話しかける相手は、目の前でラリーを続ける青年。

「大学は、まあ近場を選んでそれほど難関は受けませんでしたから。卓球の方は、こずえさんの指導あってですよ」

はにかみながら、ラケットを振る。

「へええ、兄貴は私との練習中におしゃべりできるくらい上達したのかあ」

青年の対面から、鋭い打球が幾度となく降り注ぐ。

「おわっ、いきなりペース上げるなよ」

「なんのなんの。この程度についてこれなくて、私の相棒が務まりますか！」

「というか、ダブルス特化で鍛えたんだからシングルスは弱いに決まって——って、うおあ！」

強烈に打ち抜かれた打球は、青年の脇を抜け、壁まで飛んでいった。

「どーよっ！」

「はいはい。まだ一対一じゃあ敵わないな」

青年はボールを拾い、サーブを打つ構えに入った。

「でも、すぐに追いついてみせるよ。僕は、零の相棒だから」

ボールを打ち合う音は、途絶えない。

そして、これはまだ、更に先の話——

「ぜえっつたい、途中でやめなきゃ私が勝ってた！」

「いやいや、それはないって。点数は僕の方が有利だったし」

全日本卓球大会、男女混合ダブルス、決勝戦。

「やっぱりこの後勝負ね！ 負けた方、夕飯おごりだから」

そこに、確かに並ぶ影がふたつ。

「はは。じゃあ、早めに終わらせて兄妹対決の続きかな」

そこに、空白は存在していなかった。

「始めようか、零」

「いつでもいいよ、兄貴」

——そして実は、そう遠くない、未来の話である。

《あとがき》

何年ぶり？ 実は二年ぶりくらいの投稿ですね。そしてこの作品の基盤を考えたのも実は二年前。おやおや今回はやけに『二年』という言葉が出てきますね——特に深い意味はないです。

どうしても自分がやってきたスポーツが書きたくて強引に終わらせた作品です。本当はもっと打ち合っている描写なんかを書いてみたかったのですが、東坂家の兄妹が勝手に暴れ出しまして、私の手を飛び出してしまいました。彼らのようなキャラクターに出逢えることは稀です。野良犬くらい稀です(ほんとに見たことない)。でするので、とても感謝しています。ありがとう。

以上、創作は楽しいけど難しいという話でした(ホントか?)。

夏草 こくりこ

ああ緒は愛より出でて相寄り.....ああ、惜しい。

落谷アツムネ

『秘密兵器クレナイ』という名前で、対戦型格闘ゲームを制作している同人サークルがある。彼らの処女作『クレナイロワイヤル』は多彩で個性的なキャラクターから一部に熱狂的で根強いファンを生み出し、この夏『クレナイロワイヤルVII』の発売をもって確固たる人気の証明に代えた。またコミケに始まり大手出版社からアンソロジーが出るなど二次創作も盛んで、それもまた魅力の一つとなっている。

青山美緒（あおやま・みお）は、そんな『クレナイ』ファンの一人だった。

新学期が始まって間もないある日のこと、高校二年に上がったばかりの美緒は紺野沙織（このの・さおり）と朝の通学路を歩いていた。

「じゃあね」

「うん」

大通りの十字路を美緒は鶴谷東（つるやひがし）高校に向かうため右へ曲がり、そのまままっすぐ鶴谷南（つるやみなみ）高校へ向かう紗絵とここで別れる。二人一緒の進学先も選べたが、美緒だけは家計を案じて学費免除を受けられる私立を選んだからだった。

朝のホームルームが始まる三分前になって美緒はやっと教室に顔を出す。知り合いのいない、居心地のあまりよろしくない場所で過ごす時間はなるべく最小限にとどめたかったからだ。机の引き出しに教科書やノートを移し、自分の席が窓際であることに安堵を感じつつ頬杖をついて外を眺める。空の青と新緑が綺麗だった。

「いやー危なかった。ギリギリセーフ」

やや息を切らせながら、ひとつ前の空席に男子生徒が腰を下ろす。ふと、机に放られたスクールバッグに彼女の目は止まった。今まで気づかなかったが、ファスナーからぶら下がったキーホルダーに心当たりがあったからだ。

「それ、カラスマ？」

話しかけてから、しまったと息を漏らした。同士を見つけたと舞い上がったものの、いま指さしたものが本当に『クレナイ』に出てくるカラスマなのかどうかまで考えが至らなかったのである。よくよく考えてみれば同人ゲームの知名度などたかが知れているのだから、何か格好の似ているもっと有名なキャラクターの可能性だってあったのだ。

そう考え出すと軽率に会話を切り出したのが急に後悔となって押し寄せる。なぜ後先考えずに話しかけてしまったんだ私の馬鹿.....その逡巡、およそ二秒。

「あ、あの」

「ああ、そうだよ。もしかして『クレナイ』知ってる人？」

予想よりも勢いよく食いつかれて、思わず竿を放った本人がのけぞる。

「あ、うん」

「そうなんだ。俺の周りで初めて会ったわ」

「わ、私も。やっぱり同人ゲームだから、分かってくれる人が中々いないんだよね」

「そうなんだよな」

それが、彼女と藍原吉紀（あいほら・よしのり）との最初の会話だった。

休み時間、吉紀のポジションは常に人だかりの中心だった。男女問わず好かれていて私とは全く違うな……と美緒は教室の真ん中にできたグループを眺め、それでいて我関せずとノートにせっせと落書きを溜めていた。

「カラスマ、か」

彼女はアカネというキャラクターが好きだった。『クレナイ』の女性陣の中では今のところ最年長で（公式では二十七歳と発表がある）性格は男勝り、二次創作の世界では姐さんと尊敬されることもあればババアとからかわれることもある。そんな格好いいところも不憫なところもひっくるめて、アカネは彼女のお気に入りだった。実のところ、慕われることやちょっかいを出されることに対してさえも一種の憧れを抱いている面が大きかったのだが。

自由帳はアカネが占領しているようなものだった。様々な表情や動き、シチュエーションで描き分けられる一人の女性。ほかのキャラクターと喋ったり、肩を組んだり、美緒が思うままにポーズを決める。

「青山」

不意に声をかけられて、尻尾を踏まれた猫のように上体が跳ね上がった。

「次の授業コンピュータ室だぞ、行こうぜ」

吉紀の視線が一点で止まる。

「……お、アカネじゃん。好きなんだ？」

「あ、うん」

首を縦に振る。

「上手いな」

「そんなことないよ」

「ううん。俺って全然絵のセンス無いからさ、描けるのって本当に尊敬するんだ」

「うーん……」

自分の落書きが、上手だと初めて褒められた。それでも慣れない贅辞に返しがうまく決まらない。

「あ、授業遅れちゃうね」

「そうだった。ほら、とっとと行くぞ」

「うん、ちょっと待ってて」

急かされるのも悪くないな、と美緒は思わずニヤニヤしてしまうのだった。

次の日、美緒は吉紀に倣ってキーホルダーをつけていくことにした。スクールバッグの同じとこ

ろに、しかしカラスマではなくアカネのを。違いにいち早く気付いたのは紗織だった。

「美緒、そんなキーホルダー持ってたっけ？」

「うん……眺めるだけでもいいけど、やっぱり使わなきゃ勿体ないかなって思って」

「そっか。何のキャラ？」

「ゲーム」

「ふうん。よく分かんないけど、カッコいいね」

「ありがとう」

いつものように別れる。彼女は雲一つない青空めがけて溜息をつきながら、また始業ギリギリになって飛び込んでくるだろう彼が自分の些細な変化に気づいてくれることをこっそり願った。

教室に吉紀の姿は見えない。思った通りだった。

「よし、二分前！ いやー今日も危なかったぜ」

やっと来た。それから彼女のほうへ振り向いて、

「おはよう、青山」

「ん、おはよう」

それだけ交わすと、彼はまた机に向き直った。

彼女の失意を汲み取ってくれるほど世間は優しくなく、いつものようにHRが始まる。微熱をおして学校に来た時のような、妙な怠さとやるせなさが彼女に纏わりついて離れなかった。

柳の下のドジョウが云々。

六時間目、現代文の授業を受けていた美緒はそんなフレーズをぐるぐる頭の中で繰り返していた。幸運はそう立て続けに舞い込んでくるものではないと自分自身を丁寧に説き伏せ、納得させる。それは、彼女が今まで生きてきた中で得た一つの処世術だった。

「……はい、じゃあ今日はここまで。気をつけて帰るように」

あとは家に帰るだけ、と荷物をまとめる。ひとたび吉紀と話し楽しさを知ってしまった、彼女の動きはいつになく遅い。

「青山、これから暇か？」

ワンテンポおいて顔を上げた。吉紀だった。

「ん……うん」

諦めていた矢先、喜びよりも驚きが勝って気の抜けた返事になる。

「もし都合よかったら、うち寄って行かないか？」

「え？」

「ごめんな、いきなり。ちょっと、どうしても『クレナイ』で戦ってみたくてさ」

そういうことか、とここにきて彼女は冷静を取り戻した。しかしそれと同時に焦る。

「あ、えっと……私、原作プレイしたことないんだよね」

「あれ？」

「その、同人誌とかMAD動画しか見たことなくって」

「ああー、そういうことか」

蔑まれても仕方がない、と美緒は腹をくくった。

「じゃあさ、折角だし始めようぜ」

「え？」

「うちコントローラ二つあるし。どう？」

「.....行きたい」

「よし、そうと決まればさっさと行くぞ。ほら、早く」

また急かされている、と彼女は誰にも理解されない幸せを噛みしめていた。

美緒は玄関に入ってすぐ左の部屋に通された。

「適当に座ってて。飲み物取ってくるわ」

ベッドに腰を下ろすのが何となく躊躇われて、美緒は絨毯の上に膝をついた。自分の部屋にはない、ゼラニウムの匂いが鼻をかすめる。

「あれ、ベッド座って良かったのに」

「あ、その、何となく」

「遠慮しなくていいんだよ、俺が呼んだんだから」

「.....うん」

ベッドに座りなおし、それから勧められた麦茶を口にして深く呼吸をした。

「よし、『クレナイ』やるか」

吉紀がパソコンを立ち上げる。

「はい、コントローラ」

「ありがと」

「ⅠからⅦまであるけど、どれにする？」

「できればⅣがいいかな」

「わかった」

アカネが初登場した『クレナイロワイヤルⅣ』は、美緒にとって一段と強い思い入れがあった。と言っても彼女がアカネの存在を知ったのは、元々は動画サイトにあがっていたMAD動画がきっかけだったのだが。

「お手柔らかにお願いね？」

「わかった」

美緒はアカネにカーソルを合わせ、OKボタンを押す。対して吉紀はカラスマを選んだ。カラスマはクセがあって上級者向けという話を思い出し、不安げに彼の顔を覗き込む。

「あ、言っとくけど俺カラスマ全然使いこなせないから」

「そうなの？」

「ああ。純粹に好きで使ってるだけ」

.....本当かな、と美緒は不安を拭えずにいた。

「青山さ、けっこうセンスあるよ」

「そうかなー？」

操作方法もロクに訊かないまま始まった対戦だったが、美緒は吉紀が想像していた以上に呑み込みが早かった。キャラクターの使いやすさに差はあれど、吉紀が五勝に対し初心者的美緒は二勝をあげていた。

「うーん……何か、思い通りに動いてくれるんだよね」

「そりゃ愛だな、アカネへの」

「そうかなー？」

ちょっと休憩、と美緒が言うと吉紀はウィンドウを閉じた。それから彼女は大小さまざまなマンガが綺麗に並んだ本棚の方に目をやってそれから彼を見た。

「読んでいい？」

「いいよ。気になってたんだろ？」

「ばれてた？」

「ああ」

手に取った同人誌は、その界限ではとても人気の作家のそれだった。

「そういえばさ、青山ってコミケ行ったことある？」

「ううん、無いよ。藍原くんは？」

「去年、二回とも行った。千葉の親戚に泊めてもらってね」

「へえ……すごい……」

「ああ、すごかったよ。これも現地で買ってきたし」

VIIのケースを指で叩く。

「ほああ……」

「ところで、青山は同人誌どうやって買ってんの？ やっぱりこの辺だとネット？」

「そうだね。それにお小遣い少ないからあまり買えないし」

「バイト始めたら？」

「お父さんがさせてくれなくて」

「そっか。……ちょっと借りてく？」

「いいの？」

「ああ。そのうち返してくれれば」

「……ありがとう！」

その日、美緒は五冊ほど本を借りて彼の家を去った。彼女が初めて会話をしてから数日しか経っていない、それもクラスの人気者の男子から本を借りる日が来ようなど誰が想像できただろうか。

吉紀は放課後もアルバイトや友達とのカラオケに駆り出されて、次に美緒との都合がついたのはちょうど一週間後だった。

「はい、ありがと」

借りていた本を手渡す。

「どういたしまして。面白かった？」

「うん」

「なら良かった」

「そういえばね、私も買っちゃった」

美緒は一枚のあるケースを取り出した。

「え、『IV』買ったんだ？」

「うん。コントローラもね」

「言ってくれれば貸したのに。これインストールしたらディスク要らない奴だぞ？」

「知ってるよ。でも自分だけの欲しくなっちゃって」

「.....なるほど」

「あと私、すごく特訓したから。ほら、やろ？」

「おう、いいぜ」

ディスプレイにスタート画面が現れる。前と同じように美緒はアカネを、吉紀はカラスマを選択した。

「じゃあ行くぞ？」

「オッケー」

その日は十七回戦って美緒は六勝十一敗、勝率だけ見れば宣言通り彼女は確かに強くなっていった。

「.....これヤバいな」

「何で？」

「俺も鍛えなきゃ」

「でもまだまた追い越せないよ」

「いや、半年もしたら抜かされるわ多分」

.....半年もしたら。

その言葉に美緒はぴくりとした。この楽しい時間がこれからずっと続いていくことを考えると彼女の胸はときめいた。

「ううん、もっと時間かかるよ。だって、半年たったら藍原くんだって今よりもっと強くなるでしょ？」

「そうかな？」

「そうだよ」

半年でも一年でも二年でも、いつまでもいい。いや、いつまでも続けと美緒はこっそり願った。

「.....そろそろ帰るね。本、また借りてっていいかな？」

「ああ、いいよ」

「ありがと」

手繰り寄せた糸を離さないように、美緒はその本を大切に鞆にしまった。

美緒が吉紀の家に通うようになって三ヶ月が経ち、気付けば二学期に差し掛かっていた。

「美緒、おはよう」

「おはよう。久しぶりだね」

休み中には二人でよく出かけていたものの、夏期講習で美緒より一足先に学校が始まっていた紗織とは一週間ぶりの再会だった。

「美緒、あまり寝てないでしょ」

「昨夜は課題で修羅場だったからさ。そういう紗織こそ元気ないんじゃない？」

「そりゃもう学校始まってし」

「そっか、辛いね」

「自称進学校だから仕方ないよ」

別に羨ましいと思ったわけでないにもかかわらず、どこか胸の疼く言葉だった。

「じゃあね、また」

「うん」

放課後に塾がある紗織とそうでない美緒とは、これが一日の別れの挨拶となる。どんどん歩いていく姿を目で追いつつ、美緒は徐々に彼女との距離が開いていくのを感じずにはいられなかった。

「.....じゃあ、授業はここまで」

六限が終わると、美緒は吉紀に声をかけた。

「吉紀くん、今日いい？」

「あー.....悪い、今日は無理だわ」

「バイト？」

「いや、親と塾の見学に行かなきゃいけないてさ」

「塾？」

「ああ。ちょっと成績が」

「そっか.....」

「ごめんな。明日は空いてるから」

「じゃあ明日ね」

「ああ。空けとく」

誘いを断られること自体は、別に今回が初めてというわけではなかった。時にはバイトであったり、別の友人との先約だったり、むしろ首を縦に振ってくれたことの方が少ない。初めに誘ってきたのはそっちのクセに、と不満ながらも彼には彼の世界があることを思って今まで引き下がってきた。

「.....どうしよっかな」

何となくまっすぐ家に帰るのが躊躇われて、その日は少し遠くの大きな書店まで足を伸ばして帰ることにした。といっても学校から家とは反対の方向へ自転車で十五分ほどで行ける場所だっ

たが。

「いらっしやいませー」

一角に、赤い背表紙の厚い本がずらりと陣取っている。何度か見かけたことがある、赤本というものだった。手に取ったことはなかったが。

「塾か……」

高校を出たら地元で公務員をするつもり的美緒には縁遠い場所だった。特に目的もなく、学費や下宿代を親に負担させてまでわざわざ進学するのは申し訳なかったからだ。

「あ、そうだ」

消しゴムが小さくなってきていたのを思い出し、ついでにFのシャー芯を手にとってレジを通る。店を出ると正面のハンバーガーショップに吸い込まれそうになったが、家で待っている夕飯を思い出して振り切った。それが自分でも分からないうちに面白くなってきて、こみ上げる不思議な笑いを嘔み殺しながら家路を辿った。街並みは紅く、空はようやく紺色が忍び寄る頃だった。

次の日は相変わらずゲームをして、たまに同人誌を読んで、また気が向いたらゲームをしていた。その繰り返しに美緒は一種の安らぎを感じ、学校にはない自分の居場所をくれた吉紀に、一種の感謝と忠誠さえ覚えていた。

「塾、どうだった？」

「ああ、結構いい所だったよ。少なくとも図書館で勉強するよりは集中できるし」

「そっか」

主を椅子に座らせ、美緒は吉紀のベッドで仰向けに同人誌を嗜んでいた。

「吉紀くんは大学行くんだもんね」

「ああ、そうだよ」

「どこ行くの？」

「東北大」

聞いたことだけはあある名前だった。

「ふうん。頭良いとこなの？」

「旧帝大だしな」

「何それ」

「なんだ、旧帝大知らないのか？」

反応にムツとする。

「大半の人は知らないんじゃない？」

「まあ確かに関係ない人には関係ないか」

吉紀はフォローのつもりだったが、それは却って美緒の癪に障った。

「で、行けるの？」

「今はまだ足りないけど一年半で何とかするよ」

「本当に何とかなるのかしら」

「どういう意味だよ？」

「だって大学に進むなら鶴谷南の方に行くでしょ、普通は」

「しょうがないだろ、向こうは落ちたんだから」

「ああ、滑り止めなんだ。じゃあなおさら絶望的だね」

地雷を踏んだ、と気づいた時には手遅れだった。

「.....あのさ、帰れよ」

「ごめん言い過ぎた」

「いいから帰れ」

「.....ごめん」

返すつもりでいた本を持ち帰ってきてしまったのに気付いたのは、自分の部屋で布団に顔を埋めてからだった。

次の日から、かつてそうだったように静かな日々が美緒のもとにまた戻ってきた。朝は紗織が隣にいてくれるものの、学校に着けば一日最低限しか話さないで家に帰る。休み時間はずっと自分の席で自由帳と向き合い、吉紀を目で追うことすら億劫になり、しまいには自然に視界に入ることすらなるべく意図的に避けるようになった。酷い掌返しに見えるかもしれないが、それは美緒にとって最大限の気遣いでもあった。自分と関われば彼が嫌な思いをしてしまうに違いない、嫌なことを思い出すに違いない.....そんな自意識過剰が彼女にそうさせたのだった。

「美緒、どうしたの？」

当然、紗織が何も思わないわけがない。

「どうしたって、何が？」

「いや、最近全然元気ないから.....って言うか別人だよ？」

「そうかな？」

たしかに最近思うように眠れている気は自分でもしない。しかしそれくらいである。それ以外は普段通り何ら変わらない振る舞いをしているつもりだった。

「放課後、一緒にクレープ食べに行こうよ。最近あたしが忙しくて行けてなかったし、ね？」

「ううん、紗織に申し訳ないよ。私なら大丈夫だから」

「美緒.....」

ちょっといい気になっていたのだ、と美緒は自身を責めた。申し訳なく思いながら、それでいて吉紀に誠心誠意の謝罪ができないまま秋は過ぎていった。

「青山」

雨に代わるものが降り始めたころ、久しぶりに彼女を呼ぶ少年の声がした。

「今日、うち来れないか？」

「.....行く」

道中の二人を、雪の踏み固められる音だけが包む。久しぶりに歩く道のりは少しだけ遠く感じた。

「だいぶ前の話だけどさ」

美緒をベッドに腰掛けさせると吉紀は切り出した。

「ごめんな、あんなことになって」

「.....ううん、元々は私のほうが悪かったから」

こんなに簡単に仲直りができるなら、もっと早く私から話しかければ良かった.....そんなことを美緒は思った。

「.....『クレナイ』しないか？」

「する」

コントローラの感触が懐かしい。それと同時に、美緒は吉紀が隣にいるときの安心感に浸れる喜びを取り戻して内心小躍りしていた。

「.....なあ、美緒」

ベッドに座りながら同人誌を読んでいると名前を呼ばれた。

「ん？」

「俺が持つてる『クレナイ』のグッズ、全部お前に託したいんだけどダメかな？」

「.....え？ いきなりどうしたの？」

「俺さ、東北大狙ってるって言っただろ？」

「うん」

「それでケジメってわけじゃないんだけど、ちょっとゲームとかから離れなきゃって思ったんだわ」

「えっと、それってもう一緒に遊べないってこと？」

「.....分かんない。でも、ひと段落したらまた始めるかも」

「ひと段落って何時？」

「うーん.....少なくとも卒業してからかな」

まさしく青天の霹靂だった。

「ごめんな」

「ううん、仕方ないよ。でも卒業したら会えるの？」

「.....とりあえず、盆と正月には帰ってくるよ」

「そっか」

「ああ。そしたらまた遊ぼうぜ」

「約束だよ？」

「ああ。その代り、腕なまらせんなよ？」

「吉紀くんこそ、次やった時私に一回も勝てなくなっても知らないからね？」

「あ、それは保証できんわ。だってお前強いもん」

「えー？」

「そもそも俺、今日の時点で二勝四敗だかん？」

「うん。でも吉紀くんとじゃなきゃ『クレナイ』できないし」

「じゃあ布教すればいいよ」

「私そんなにコミュ力ないし」

「大丈夫だよ」

「うー……」

ゲームソフト七本、同人誌二十冊、その他アンソロジーコミックが五冊。吉紀から美緒に託された紙袋の中身である。

「大切にしてな」

「うん」

親に何て言おうか……そんなことを考えつつ、吉紀との糸がまだ強くつながっていることを確信した美緒の足取りは足首まで埋もれそうな雪の中でもしっかりとしていた。

「お、いらっしやい」

その週末、吉紀は紗織を家に招き入れていた。彼女とは二学期の初めに塾で出会ったところから急速に仲を深め、今では付き合っただけで二か月を数える。

「あれ、何かモノ減った？」

「ちょっと友達にあげた。ゲームとか」

「へえ、何で？」

「勉強するのに気が散るからさ。でもちゃんと信頼できる友達に預けたから大丈夫」

「まあ、吉紀がそれでいいなら私は何も言わないけど」

吉紀は机に課題を広げた。

「さて、始めますか」

紗織と一緒にキャンパスライフを手に入れる為、吉紀に道草を食っている暇など無い。

あとがき

どうも落谷です。今回は秋の製本版に出したものの手直しとなっております。初めましては始めまして、お久しぶりはお久しぶりということで。

みんな少しずつ悪人要素をプラスしたつもりですが、さて。

ちなみに『秘密兵器クレナイ』なる同人サークルは存在しません（二〇一五年十二月現在）。あしからず。

・今回、下敷きにしたもの

絶望少女達『恋路ロマネスク』

覚和歌子『F』

小人 (Puney Loran Seapon)

小人

Puney Loran Seapon

面倒くさい。

最近、こう思うことが増えた気がする。

俺は^{くさかべせいじ}草部 誠司。高校二年生だ。

高校二年生にもなれば、日々の宿題が多すぎるとかなんやらで、こう思う機会も増えてくる。というか、俺は増えてきた。

「せーじ！　せーじ！」

今も通い慣れた通学路を歩いて学校に向かってはいるものの、これが既に面倒くさい。

今は夏休み。

にも関わらず、何故俺が学校に向かっているのかと聞かれれば、それは今日が登校日だからである。補習だと思った？　ざあんねえんでした。俺は学校の成績はいいんだ。期末テストだって、順位は上から数えた方が早いんだよ。今回は150人中20位前後だったかな。

「せーじ！　せーじ！」

それにしても、なんで夏休みに登校日なんて何故作るのか。せつかくこっちは学校のことなんか忘れて遊び倒そうとしているのというのに……あ？　宿題？　んなもん、夏休みが始まる前に全部終わらせたわ。

あー……ほんと面倒くさい。そして何より、

「せーじ！　せーじ！　ねえ聞いているのっ？　返事しろー！」

「だあー！　うるせえ！　耳元で叫ぶな！」

俺の肩で先程から声を張り上げている、この小人が一番面倒くさい。

見た目は女。だって髪が長いし。体長、お世辞抜きで顔は整っている方だと思う。カテゴリズするなら、純和風といったところか。

何より目を惹くのは、その体長。頭のとっぺんからチョココンと生えているアホ毛を含めて、およそ九センチちょっと。俺の握りこぶしより少し大きい程度だ。小さくて、寧ろ目を惹くことはないとか言っちゃいけない。まさにお人形さんだ。幼稚園児にでもプレゼントしたら、さぞ喜ぶことだろう。……こんなにうるさくなければ、だが。

見れば分かると思うが、こいつは普通の人間では無い。どうやら俺以外の人間には見えていないようなので、人間かどうか疑わしいが……まあとにかく、ここまでちんちくりんな奴など、そうは存在しないと切り切っていいだろう。

この小人の名前は『トッキー』。命名俺。小人には名前が無かったのだ。最初は『三寸法師』にしようと思ったんだが、本人が嫌がった。本人曰く、「なんかダサイ」とのこと。体長的には、ちょうど『一寸法師』の三倍だから、いいと思ったんだが……まあそんなこいつも、『トッキー』が実は『ちっこい』のアナグラムになっていることに気がついていないというのは内緒だ。

「せーじ！　せーじ！　ねえってば！」

「だから俺の名前は『せーじ』じゃなくて『誠司』だ！　いい加減、ちゃんと発音しやがれっでの」

今は周りに誰もいないからいいが、もしいたら、俺はさぞかし怪しい人物に見えただろう。何せ、傍から見れば、一人で大声を出して叫んでいるのだからな。

全く……どうしてこんなことになったのか。俺は、こいつと出会った日のことを思い出していた。

【捨て犬だと思ったら】

あれは四月六日のことだ。今後後輩になる一年坊主どもの入学式があった日のことだったから、よく覚えている。あの日は雨がひどく、俺はイライラしながら帰路についていた。

なんでイライラしていたかって？ そりゃ、俺の名前に『誠』の文字が入っていることについて、クラスメイトたちに「お前には似合わない文字だよな」と笑われながら突っ込まれたから……ってのもまあ無くはないが、その腹いせにクラスメイト全員の机の向きを、こっそり前後逆にするというイタズラが、なんの証拠も無いのに俺がやったとバレてしまったから、というのが一番の理由だろう。

おかしい……俺がやったとバレないように、俺自身の机も含めて全部前後逆にしたっていうのに……何故バレた。クラスメイトの奴らときたら、「こんな地味で陰湿なイタズラをするのはお前しかいない」とか言いやがる。全く……これで俺が犯人じゃなかったら、一体どうするつもりだったのか……。

そんな感じで、俺はこの理不尽な気持ちをどうしてやろうか、と新たなイタズラを考えながら、住宅街を歩いていた時だった。

「おにいさん、おねえさん、ひろっておくれよう……」

ふと、何だか物悲しそうな、女の子の声が聞こえてきた。

あー……これはあれか。きっと、捨て犬か何かを見つけた小学生が誰かに助けを求めているのだろう。それにしても、声が聞こえたのはかなり下の方からだった気もするが……なんてことを思って、声のした方を向いてみると、だ。

そこにいたのは、ポロポロの衣服を着ている小人だった。

何故か『拾って下さい』と書かれたダンボールの中にはなく、『ひろってください』と汚い字で書かれた、自身の倍くらいの大きさのプラカードを持って。

【放置プレイ】

一瞬、自分の目を疑ったのは言うまでも無い。そりゃそうだ。小人なんて空想上の存在だと思っ
ていたんだからな。

正直、あんなプラカードなんて持たずとも目立つような気が.....それどころか、悪い人に見世
物にされる気さえする。あ、小さすぎて目立たない、とかか？

だが不思議なことに、道を行き交う人々は、誰一人として小人に気がついている様子は無い。
黙って突っ立っているならともかく、あんなに頑張っ
て声を張り上げているのだから、そっちの
方を見るなりなんなりしても良さそうだが.....ここまで無反応だと、もしかしたら俺にしか見え
ていないのかもしれない。

そんなことを考えた俺が、ちょっと頭が痛くなる。確かに友達はいないが、それにしたって幻
覚は無いだろう.....そんなに寂しかったのだろうか、と溜息を吐きたくなってしまった俺を、誰
が責められようか。

「おにいさん、おにいさん、ひろっておくれよう！」

先程からずっと「おにいさん、おねえさん」だったのが、ついに「おにいさん」一人だけにな
った。しかも、小人は俺を見ている。顔を輝かせて。

よく見ると可愛い顔をしているじゃないか、とこの時の俺は思ったが、取り敢えず無視するこ
とにした。

否。正確には、取り敢えず遠くから観察することにしたのだ。幻覚なら、そのうち消えてなく
なるだろう。

「おにいさん、おにいさん！ まっておくれよう！」

背後から聞こえてくる声を無視して、俺はその場を後にする。

近くの電柱の陰に身を隠し、こっそり小人がいた方を覗いてみると、小人は思いの外しょげて
いた。どうやら追いかけてきたらしい。馬鹿だな。歩幅が全然違うんだから、追いつけるはずも
なかろうに。きっと、自分が見える人間に初めて出会ったのかもしれない。

暫くすると、小人は再びプラカードを持って、また「おにいさん、おねえさん、ひろっておく
れよう」と声を出し始めた。だが、明らかに涙声だ。

やがて、目からポロポロと大粒——といっても、小人だから大した大きさではないが——の涙が
落ち始め、その場に蹲ってしまう。

雨の中、傘もささずにあんなことをやっているのだから、上から下までグショグショだ。

そんな姿を見ていたら、俺は何だか.....

やべえ、そそる。

そう思った。

【強肩】

やがて夜になったが、小人はまだ続けていた。あれから少ししたら、健気にもまた自分が見える人を探し始めたのだ。

だが結局、俺以外にあの小人が見える人は見つからなかったようだ。

よく考えてみると、あのプラカードって一体なんの意味があるんだろうか。あの小人が見えないと、プラカードも見えないよな？ 何というか……ちょっとマヌケだ。

まったく、仕方がない。

「おい、チビ」

ここまで来ると、あの小人が幻覚だ、ということを忘れてしまっており、そして不覚にも、俺は声をかけてしまった。

「お前、何して――」

「あー！ さっきのおにいさん！ さっきはよくも無視してくれたなーっ？」

「あん？ いや、まああれは――」

「これでもくらえっ！」

「うおっ？ あぶねっ！」

この小人、さっきまで相棒だったはずのプラカードを投げつけてきやがった……！ しかも、顔まで飛んできたぞっ？ なんつー肩していやがる……！

「お前なあ……」

「ちょーさびしかったんだからなー！ えぐっ……えぐっ……」

たしなめようとした俺に、小人はそう叫んで俺の足をポカポカで叩く。

叩きながら、小人は泣いていた。

……流石にちょっと、悪いことをしたかも知れない。

「……悪かったよ」

「えぐっ……また来てくれたから、ゆるす」

「……ん」

こんなところで回想を終えた俺は、細く息を吐く。

結局この後、俺はこいつを家に連れて帰った。びしょ濡れだった服を交換——といっても、適当な布切れを使った即興の服だが——したり、食事——意外なことに、トッキーは人間と同じものを食べる——を与えたりしたのだが、俺の家は、小人にとって初めて見るものばかりだったらしく、滅茶苦茶はしゃいでうるさかった記憶がある。

他の人にこいつの声が聞こえていたら、間違いなく近所迷惑だろう。

その日以来、トッキーは俺の部屋に住み着いている、というわけだ。

「せーじ！　せーじ！」

ちなみに俺は一人暮らしだ。アパートの部屋を借りている。

高校生にして一人暮らし、という、響きだけで勝ち組な感じがするのだが、こいつが来たせいで一人暮らしではなくなってしまった。……あれ？　トッキーは小人だから、俺ってまだ一人暮らしか？

「せーじ！　せーじ！」

……さっきから頭の後ろでトッキーがうるせえ。てかなんか頭が痛い。いや、頭つつーか、毛根が……

「せーじ！　せーじ！　みてみてー！」

振り返るがトッキーはいない。こいつもしかして……

「きゃはははは！　今のもういっかーい！」

「……こうか？」

「きゃははは——きゃあっ？」

思いっきり頭を左右にブンブンと振ると、トッキーは吹っ飛んで地面に激突する。一瞬「あれ、やばくね？」とか思ったが、トッキーは何事もなかったかのように立ち上がった。

後で聞くと、俺の予想通り、トッキーは俺の後ろ髪にぶら下がって遊んでいたらしい。「どうして見てくれなかったのか」とプンスカ怒っていたが、そんなところ目視できるかボケエ。

てかこいつ、見た目はちっこいが、それなりに重いんだよ。髪の毛がちょっと抜けたわ。

おしおきとして、デコピンをかましてやった。

【土砂降り】

「……うへー、ひで一雨」

学校も終わり、家に帰りたい俺だったのだが、今は雨が降っていた。二時間程前から降り出し始めたのだ。天気予報では、今日は傘はいらないはずなんだが……こりゃ、ひどい外れ方をしたもんだ。

一向に止む気配は無い。それどころか、だんだん強くなってきている。今はけっこうヤバいが、

帰るなら、早いほうが良さそうだ。

意を決して、俺はこの土砂降りの中、丸腰で突っ込む覚悟をする。一応、制服が濡れるとあれだから、体操着に着替えた。

それにしても、夏休みなのに学校来なきゃいけないとか、せつかく来たのにこの有様だとか、一体俺が何をしたって聞きたくなる仕打ちだ。百歩譲って登校日はともかく、この雨は「お天道様仕事しろ」と言いたい。

そういえば、トッキーと初めて会ったのも、雨の日だったな。

感慨に耽っているうちに、俺は自分が住んでいるアパートにたどり着いた。……やべえ、夏なのに超寒いんだけど。

玄関で靴を脱ぎ捨てて、俺は脱衣所へと飛び込む。全てを脱ぎ去って、まとめて洗濯機の中に放り込んだ。

水と洗濯用洗剤を入れて、スイッチを入れた。

「うきやあああ！」

「あ、やべ」

ポケットにトッキーを入れっぱなしにしたままだったことを、完全に忘れていた。

【チョロイン】

「……あー、トッキー？」

「ふーんだ！　せーじなんて知らないもん！」

慌てて洗濯機を止めて、中からトッキーを取り出したのだが、それからこの調子である。

トッキーが濡れないようにしたのだが、本人の希望で、カバンの中ではなくポケットに入れていたのだ。曰く、「カバンの中は暗くて狭くて何か押しつぶされそうで超怖い」んだとか。ちなみに洗濯機に放り込まれるまで、トッキーは眠っていたらしい。

流石に洒落にならないミスだったので、俺もこうして反省している次第である。だが、お詫び

として飴玉を一個献上しても、許してはくれないようだ。

まあ、一瞬顔が輝いたのは見逃さなかったがな。

「トッキー」

「ふーんだ。せーじの声なんか聞こえませーんだ」

「.....チョコ欠片もやるよ」

「えっ？ ほんとっ？」

「俺の声、聞こえないんじゃないのか？」

「.....」

「.....」

「.....チョコくれたからゆるす！」

やべえ、トッキー超チョロイ。

悪いのは俺なのだが、ついついこう思ってしまった。

ちなみに本当に許してくれた。悪い奴に騙されたりしないか、将来が少し心配になったのは言うまでもない。

【お風呂】

で、その日の夜のことだ。トッキーが、一緒のお風呂に入りたがってきた。

一応言っておくと、トッキーはちゃんと毎日お風呂に入っている。ただいつもは、桶にお湯を入れて、その中で体を洗ったりとかしているのだ。ちなみにたまに、お湯の代わりにホットミルクとか紅茶とか入れて、ミルク風呂だとか紅茶風呂とかにする。お前はどこぞの目〇おやじかと突っ込んだが、トッキーは「おやじじゃないもん！ 女の子だもん！」と、俺の突っ込みを理解しているのかいないのか微妙な反応を返してきた。

ところで、この時お湯ではなく水とか入れておくと、大変愉快的な反応をしてくれるのだが.....今日はそれはおあずけだ。

アパートの風呂なんて大して広くないものの、それはあくまで人間基準。小人のトッキーにし

てみれば、充分広い。てか広すぎるレベルだ。

「きゃっきゃきゃ♪」

相変わらずはしゃぎまくるトッキー。しょっちゅうはしゃいでいるが、こいつは声が枯れないのだろうか.....

「はしゃぐのはいいが、溺れんなよ？ 助けねーぞ？」

「いや、たすけてよっ？」

ちなみにトッキーは、いつぞやのプラカードをビート板がわりにして、バスタブの端から端までを泳いで横断しまくっていた。すごい体力である。この小さい体の、一体どこからこんな体力が出てくるのだろうか.....

そんな俺の視線を感じたのだろうか。トッキーは頬を赤く染め、泳ぐのを止めると、体を隠す仕草をする。

「せーじ？ なにジッとみつめてんのっ？ せーじのえっちー！」

「いや、お前の裸に興味はねえ」

「がーんっ？」

そりゃ、いつも桶で風呂に入るときにトッキーは裸になっているわけだし、今更な話だ。てか体が小さすぎて、色気を感じない。

「むう.....きょーみないのかー.....せーじのベッドの下に、女の人のはだk」

「なんで知ってんだお前っ？ あっ！ 小人だからかっ？」

これからは隠し場所は高いところにしよう。

【くるくると】

「おら、お湯抜くぞ」

「あー、ちょっとまってー！」

俺がそう言うと、トッキーは慌てて風呂の中にダイブする。危険だからやめなさい。

このまま何かするのか、そう思っていたのだが.....

「せーじ！ お湯ぬいて！」

「.....ん？」

「新しいあそびを思いついた！ せーじ、みてて！」

何だかよく知らんが、言われた通りにする俺。

最初は何だかよく分からなかったが、排水口のところで小さな渦潮が発生しているのを見て、もしやと思う。

「あーれー」

案の定、渦潮のところでトッキーがくるくる回り始める。

.....何がしたいんだ、お前。

正直な感想がそれだった。まあ、本人が楽しければそれで.....あ、排水口にはまった。

「せーじ！ せーじ！」

「……ん？」

トッキーが焦ったように俺を呼ぶ。嫌な予感がしたものの、一応返事をする俺。

「ぬけなくなった！」

「ほんとに何がしたいんだ、お前は……」

【視線】

トッキーの服を買うことにした。

うちに来てから今までは、俺が布切れで服を作っていたのだが……やっぱ素人の手作りってダメだわ。すぐに糸がほつれやがる。

そういうわけで、トッキーの新しい服を買いに来たのだ。これからだんだん寒くなっていくだろうし、そうなるとうちにある布切れで作った服じゃ寒くてヤバいだろうから、そこら辺の事情も含めている。

とは言え服屋を探しても小人の服なんて売っているわけがないから、代わりに俺は今、おもちゃ屋にいた。ここなら、トッキーのサイズに合う服が見つかるだろうと思ったからだ。

高校生男子が、傍から見れば一人でおもちゃ屋の人形売り場にいるのは結構あれな感じはするが、この際仕方がない。トッキーと話しながら「あれがいい」とか「いやそれはサイズが」とか話しているのも、傍から見ればブツブツと独り言っているようにしか見えないのだが、仕方ないったら仕方がないのだ。

……さっきから定員の目が痛い。何だか見張られている気さえする。当たり前っちゃ当たり前か。

うう……早く帰りたい。

「せーじ！ これはどうっ？」

「お前、さっきからそんなんばっかだな……」

トッキーが選んでいるのは、さっきからお姫様が着るような、キラキラとしたドレスばかりだった。やはり小人と言えど、女の子というのは、こういうものに憧れるものなのだろうか。

だが、これでは冬の寒さがしのげない。まあ、おもちゃの服の防寒機能がどれほどのものかは知らないが。

「もっと、街の女どもが着ているような感じにしろよな」

「んー……じゃーこれっ！」

トッキーが選んだのは、人形に着せるにしちゃあ、少し地味すぎるものだった。確かに一般女性が着ている感じではあるが……もっと派手なのでいいんだぞ？

「なんか、せーじの作った服っぽい！」

「……地味で悪かったな」

「……？ わたし、せーじの作ったふく、きれいじゃないよ？」

「……………」

思いがけない一言に、俺は思わず黙る。

冬までに、絶対裁縫の技術を上げよう。そう決意した。

こんな風に、俺の日常はトッキーのせいで大変面倒くさいことになっている。今では、学校でついうっかりトッキーと話していたせいで、クラスメイトからは変人扱いされていじられるようになってしまった。中には、可哀想な目で俺を見る人もいる。また机を前後逆にしてやろうか、このやろう。

とは言え、まあ……面倒くさいが、悪くは無いと感じているのも確かだ。

「せーじ！ せーじ！」

ちなみに最近出来た癖があり、裁縫の本を読んでいる時に特に多い。それが……

「せーじ！ せーじ！ くすぐったいって！」

「いや何が……って、あ。またやっちまった」

こいつを無意識に指でいじくることだ。

「せーじ！ せーじ！」

今日もまた、こいつの声が耳元で響き渡る。

【あとがき】

お久しぶりです。Puney Loran Seaponです。

今回は二つあるので、順番に書いていきましょう。

一つ目は小人のお話です。A○チャンネルとかき○いろモザイクとかご○文はうさぎですか？とかゆ○式とか、あんな感じの四コマ漫画っぽい雰囲気が出せたらな、と思って書いた次第です。まあ、漫画じゃなくて文章なので、限界はあったかもしれませんが.....それでも楽しんでいただけのなら幸いです。

もう一つは詩です。というか、詩のつもりで書きました。そう言えばまだ詩は書いていなかったの、挑戦してみました。ナゾナゾとか言っちゃいけない。

では、また！

黒棲まう千年楼閣 Je m'appelle Nuit. (高天美月)

黒棲まう千年楼閣 Je m'appelle Nuit.

Forgotten in his reich from shadows -
Banned forever, one thought -
The Lord of evil was given name and place
Of the seventh sea, shelter of the 7th key.
Who was betraying us? I guess you know!
There would be more than one name to name!
Now he, whose name is many, searches for the one....
The one strong enough to survive as his terrestrial hand.
Enticement and promise will crown a king -
A puppet on a string - for a 1000 years,
...So they sing.....!

(The King For A 1000 Years / HELLOWEEN)

夜。

星はみな眠っている。けれども息をしているか？ 耳を澄ませば、綿のように積もった^{つきかさ}月暈の陰に息を殺しているだけかもしれない。しかし^{まぶた}瞼は開いたままだ。瞼を開けたまま眠っている、きっと朝まで。朝が来れば.....、そのときまで。

はたして、月は彼女たちの死を^{みと}看取るのか？ 棺桶に墓標、いくつあっても足りないだろう、それこそ星の数だけ必要だ。それに埋める場所もない。宇宙は無限であるはずだが、埋葬だけはできない。永遠に漂うのみ。しかしそれも錯覚かもしれない。つまり、動いているのか留まっているのか、誰にも判断できないからだ。

結局のところ、自分が生きているのかどうかさえ、誰にもわからない。漂う者と留まる者と、どちらが生者でどちらが死者なのだろう？ そして自分は、漂う者か留まる者か、どちらなのだろう？ どうなりたいのだろう？ だけど、いつもそう、願いというのは^{めやに}目脂と同じで、涙の後に残る^{かさぶた}瘡蓋みみたいなものだ。泣くことを忘れてしまえば、もう願わなくて済む。^{あくび}欠伸のときにだけ、ほんの^{かす}微かに思い出す、それくらいで丁度いい。けれども、それができないのだ。何故なら、願うことと生きることはほとんど同義だからである。

全く、なんて哀しいのだろう、人間というやつは.....。私は嘆息したが、美人のように冷たい^{ガラス}硝子は曇らない。強情なのではない。ただ室内が温かいだけだ。けれどどうにも振られた気分だ。彼女は海のように沈んだ夜空を透過する以外には、ただ私の顔を映すだけなのだ。とはいえ、そもそも、窓に映っているのが自分の顔だと、どうして断言できるだろう？ 自分で自分の顔を見ることができないのに。

いずれにしても、もう見返すことはできない。たとえば石畳の上を歩いても足跡は残らない、

それと同じこと。自分の影のようには、過去というものは残らない。過ぎゆく刻^{とき}にすべて濾過されてしまう。純粹なものは得てして見えない。見えたと思ったときにはもう消えてしまう、雪の結晶のように。だから純粹というのだ。自分の姿が見えるのは、自分が不純ということ。影はつまり、落ち葉のように堆積した不純物、垢みたいなものだ。そういう意味では、自分と影の違いはほとんどない、と言ってもよい。

純粹なもの、すなわち彼女の姿は、瞬^{またた}きの間に永久に遠ざかってしまった。夜を支配するために人間が創り出した黒いカーテンによって、浅^{あさはか}幕な思惑だ、視界のすべてを暗幕に覆ってしまえば、闇^{まと なび}を纏い靡かせることができるというのは。だいたい、闇が見えるということは、光があるという逆説だ。「見える」とはそういう意味だからだ。要するに、「見えない」ということこそ闇の本質なのだ。だから、今見えている闇は真の意味で闇ではない。不純である。

お蔭で、うっすらとだが自分の影が肥大^{かも}して醸^{かも}し出される。急に現実に引き戻された気分だ。「幻滅」とはこういうときのための言葉だろう。それは忘却に熟成されたワイン^{かおり}の香がする。あるいは、埋葬された遺体が微生物に分解され、すでに地中に跡形もない寂寥^{せきりよう}の懐古か。しかしいずれもただの自然現象だ。人間が減^かびてしまえば幻も霧散する。幻滅するために人間は生きているのかもしれない。

背後で暖炉が燃えている。微小だが部屋の温度を上げている要素だ。それが私の影をスクリーンに踊らせるが、当然ながら自分自身は踊っていない。あくまでも、途方もなければ情もない、距離^{せきら}という無慈悲によって暴かれた私の赤裸^{せきら}に過ぎない。影を持たないものはなく、また創り出すこともできない。影とはどこにでも付き纏う代物だ。影という不純から切り離された純粹を生み出すには、それ相応の、いや、それ以上の犠牲を伴うことになる。それでは結局、彼女の生贄になったのは誰なのだろう？

それにしても醜^{たび}い形だ、と影を見る度^{たび}いつも思う。というよりも、形があるから醜^{たび}いのだろう。「美しい形」というのはやはり、どこか矛盾^{はら}を孕んでいる。第一、「美しい」とはどういう意味なのか？ たとえば、美しい型が存在するとすれば、美しいものを量産することが可能だ。しかし、直観だがこれは間違っていると思う。大量生産が可能なのは美ではない、という意味だ。では、ハードではなくソフトの問題なのか。つまり、形に宿る精神ということだ。どちらかといえばこちらの方が主流だろう。古来よりの伝統と言ってもよい。あるいは悪癖。それが崇^たつてかは知らないが、現実として、今となってはソフトでさえ量産化できる。どのように取り繕^とっても、ただの電気信号に過ぎないからだ。こうなってくると、もはや美とは呼べないだろう。

人間に美はけっして創れないのだ。これも直観だ。諦めとも言える。人間は、時間やコスト、エネルギーなどを無視すれば、この世に存在するものはすべて作ることができる。だとすれば、この世に美なるものは存在しないことになる。だが、別にそれでよいのではないか？ 何の問題があるだろうか、と私は思う。ただ、まあ、強いて言うなら、生きているうちは少なくとも、美を体験することはないだろう、と許すことはできる。

それでもときおり、美なるものの片鱗を味わうことはある。いや、それは味わうというほどの確固たる感触ではなく、風が落ち葉を吹き払った名残、あるいは瞼の裏に刻まれた夕陽の眼差し^{こぼ}のようなものだが、生きていれば少なくとも一度はあるはずだ。それは天から零^{こぼ}れ落ちた砂の破片^{かけら}かもしれない。煌めきながら、砂時計のように、天国から舞い落ちてくるのだ。それが、奇跡的に体内の弦に触れるときがある。眠りから醒めた後も自分が自分のままである、という奇跡よりも、よほど奇跡的だ。

天女^{つまび}が琴を爪弾いたように、軽やかに弦が震える。瞬間、時間が止まり、音色だけが澄み、精神が軀を離脱するだろう。眩暈^{めまい}。散逸。崩壊してゆく軀を俯瞰^{ふかん}するだろう。そしてほんの少しだけ、天国に近づくだろう。雲間から差す光が、自分を、すべてを、灰すら遺さずに、燃やし尽くしてしまうだろう。

これがおそらく「美」なのだろう。

しかし結局は白昼夢だ。生きて以上はこれが精々、というところ。見えたと思ったものは
かげろう 陽炎か、もしくは後光に過ぎない。嵐の原因は蝶の羽撃きであるという錯覚のように、それ自体はけっして
ぬけがら 本質ではない。蛻ですらない。湖面に反射する波紋は誰が起こしたのか、知ることはできないのだ。しかし現実
には、生きながらにして悟った者もいる。だがそれに触れた者は皆、事実気が狂れてしまったのではないか。たと
え錯覚だったとしても、美は我々が存在するより上位の次元にあるのだから無理もない。負荷がかかりすぎる。
不可逆の導きなのだ。

突然、影が爆ぜた。咄嗟に両手を見るが、傷一つついていない。影が爆ぜたのは私自身の崩壊に因るもの
ではない。つまり原因は光源にある。暖炉の薪だ。骨が弾けたような音もそこからした。眼にしなくてもわかる
。何故なら、ここは私の屋敷だからだ。

一瞬だ。そう……、こんなことを考えてしまったのは、四季が巡るように一瞬のこと。そして
、地球の自転のように帰納的である。

パスイヴァだ。

すべては彼女がカーテンを閉めたせいだ。それ故に私は幻滅したのだ。しかし弁護をしよう。
今日の私は寛容なのだ。そう、「そもそも誰のために地球は回っているのか？」という具合に。

そこで初めて私は振り返った。先ほどまでの闇とは対照的に、南瓜のような 橙色 の光が目映く
部屋を染めている。思わず眼を細めてしまう。どうも光は苦手だ。しばらくして眼が慣れてくると、逆光の
ひらがた 人形が見えた。私はようやく認識した。水晶玉に映る未来のような光の中に、パスイヴァがいた。同時に、逆
光だと思ったものは彼女の色だということにも思い至った。まるで魔女だ。ファンタジイのキャラクターみた
いだ。円錐型の帽子を被り、箒を持っていたら、完璧だっただろう。しかし、魔女を名乗るには、彼女は若す
ぎる。これは少々レトロなイメージだろうか。彼女は私など見向きもせず、本を読み耽っている。この点にお
いては、時代がマッチしているといえるだろう。右眼のモノクルもそれを助長している。

とはいえ、彼女は魔女ではない。人間だ。

しかし、魔女も人間も非常によく似ている。「魔」とは得体の知れないものを指す。科学的に
解明できないものが、古来そのように呼ばれていたのだ。つまり、科学者は魔を信じない。いや
、信じる信じないの問題ではない。彼らにとって魔とは、技術的にまだ解明できていない現象で
しかない。いつかは解明できるのだ。信じようが信じまいが、現象はすでに眼の前で起きていて
いることなのだから当たり前だ。人間の判断は現象に影響しない。逆に言えば、魔とは人間が生
み出すのである。魔と幻は同じものだ。すなわち、結局のところ、現在、魔など存在しないので
ある。絶滅した、ということだ。

それはいったい、何を意味するのか？

人間の多くは科学者ではなかった。専門的な知識や設備を有していなかった、という意味では
ない。科学的ではなかった、ということだ。彼らの大多数は、不可思議を不可思議のまま放って
生き、そして不可思議だけを遺して死んでいった。不可思議は地層のように堆積し、それに埋も
れるようにして、人間は化石となったのだ。人間は、不可思議を放置するという生き方を、これ
までずっと許容し続けてきたのだ。信じられない。どうして彼らは、不可思議に眼を瞑れるのだ
ろう？ 私にはかえってそれが不可思議に思えてならない。

しかし、そうなると、私自身も人間なのではないか？ 当然の疑問が頭を過る。何かを不可思議
に思う。不可思議を抱えたまま生きる。それが人間であるならば、私が彼女を理解し得たとき、初めて、私は人

間という呪縛から解放されるだろう。同時に、彼女も人間から解放されるはずだ。何故なら、人間にとって最も不可思議な謎とは、まさに自分自身であるからだ。自分自身のことを理解したとき、その瞬間、人間は人間でなくなる。自然に還る、もしくは、無に帰す、というところだろうか。

だから、人間が生きる、ということは、「わからない」という名の夜を歩き続けることと同じなのだ。行きつ戻りつ、ときには立ち止まり、堂々巡りを繰り返すだろう。それでも、やがて朝が来たとき、人間は死を迎える。朝日のシャワーが人間を洗い流してゆく。けれども……、太陽はすでに存在しない。だから私には、記憶の中にある太陽の後ろ姿から、彼女の美貌を想像し羨むことだけしかできない。きっと、いつか彼女が振り向いて、微笑から零れた光に酔い痴れたい。けっして叶わぬ願いであると重々承知していつつも、私には、それを夢想^{ゆめみ}て眠るしか方法はないのだ。

私は、つまり、依然として彼らと同じ存在なのだ。

「それは違います」パスイヴァが口を開いた。しかし視線は書物に落としたままだ。もしかして、私がそこにいると思っているのだろうか。「いえ、違います」

「何が？」私は聞き返す。

すると、彼女はこちらを一瞥^{いちべつ}した。本当に、一瞥しただけだ。「一つめは、ご主人様が人間ではないということ、二つめは、ご主人様がここにはいない、ということです」

「私はここにいるよ」彼女の言い回しが面白いので、思わず笑ってしまった。

「ここ、とはどこですか？」

「それはパスイヴァが言ったんじゃないか」

「この本の中にはいない、という意味です」

「本の中とは？」まさか、物理的な意味ではないだろう。

「空想ではない、という意味です」生真面目に彼女は答える。そして再び私を見た、時間を凍らせるような瞳で。「つまり、私^{わたくし}の眼の前にご主人様がいます」

「しかし、大抵のものは空想だ。違うだろうか？ 自分の見ているものが空想でないと、どうして言える？ 自分自身は空想の産物に過ぎない、と思ったことはないか？」

「ご主人様は先ほど、自分はここにいるとおっしゃいました。それが真実です」

「こことはどこか、と聞き返したのは君じゃないか」

「ご主人様の考えること、私の考えるここがたとえ異なるとしても、矛盾はない、という意味です。真実とは、ですから、私にとって、という意味なのです」

「つまり、試した？」

彼女は二秒ほどの沈黙^{のち}の後、悩ましく首を傾げた。藍色の髪が揺れる。「そういうことです」

「相変わらずだね」

「ご主人様に似たのです。おそらくは血筋かと」無表情だからわかりにくいですが、これはきっとジョークだろう。「私を創ったのはご主人様ですから、少なからず影響はあるでしょう。これこそ、ご主人様の存在が空想でないことの証拠では？」

「私が存在する、とパスイヴァが妄想しているだけかもしれないよ」

「しかし、私はここに存在しています。つまり、誰かが私を創ったのです。そうでなければ、私はここに存在していません」彼女はそして、子供を寝かしつけるように優しく本を閉じた。けれ

ども僅かな風に乗せられて埃が宙に舞う。私はそれを見ながら、ではその埃は、誰が創ったのだろう、と考えた。パスイヴァはやはり藍色の瞳で私を見つめる。「はたして、人間が人間を創ることは可能でしょうか？」

私は彼女の問いに、眼球の底が疼くのを感じた。瞳にキスをされたような寒気だ。それは鋭くも優しい寒気。薔薇の手向けのような接吻。

パスイヴァの問いは、まさに根源的だ。たとえば、ただの土を花瓶に変えることができるのは人間だけだが、しかし、人間を創ることは、人間に可能なのだろうか？

「それでは、人間の数があそこまで増えた現象を、どう説明する？」私は答える代わりに聞き返した。

「生殖機能の話ではございません。それは、ご主人様もご承知のことと思いますが」パスイヴァは即答する。「それに、人口が増加していたのは、私が生まれるより遙か以前の現象です。歴史の教科書でも過去の出来事として掲載されています。つまり……、人口は事実、減少したのです。たとえ、ご主人様のおっしゃる通りだとしても、人間はいつしか、人間を創ることができなくなりました」

「その理屈から言えば、君は人間でないし、私は人間だ、ということになる。それだけのことではないか？」

「いえ、私は人間です」

「ああ……、」私は声を漏らした。

そう、結局のところ、人間の定義は、「自分がどう思うか」という点にしかないのか。だとしたら、なんと脆いのだろう。そんなものを、はたして存在すると言ってよいのだろうか。

しかし、自分以外の誰かがどう思っている、最終的には、自分で決定するしかない。そうして、「自分は人間である」と定義すること、それこそが人間の尊厳だ。魔女と人間の差はそこにある。彼女はそれを十分に弁えている。だから、私は彼女に敬意を払わなければならない。

パスイヴァは人間である。

それでは……、

私は、いったい、何者なのだろうか？

パスイヴァは私を人間でないと言った。つまり、私は魔である、ということだろうか？ しかし、彼女が何と言おうと、私が、自分を人間である、と定義すればよいだけの話だ。それならば矛盾は生じない。

けれども……、私の思考にブレーキをかけるのは、やはりパスイヴァの言葉だ。

人間を創ることは、人間に可能なのだろうか？

もちろん、生殖機能の問題ではない。それは彼女の言う通りであるし、私も理解している。私が一番理解している。そう……、何故なら、外でもない、私が彼女を創ったのだから。

誰が言ったのかももう憶えていないが、「我思う、故に我あり」とはまさに卓見である。帰納的に言えば、「彼女思う、故に彼女あり」でもある。私にとってもパスイヴァの存在は疑うべくもない事実だ。そして同時に、彼女は歴とした人間である。これもまた、一分も疑う隙のない事実なのである。

そこで、再び元の問いに立ち返ることになる。

人間を創ることは、人間に可能なのだろうか？

可能であるならば……、どれだけ問題は単純だろうか。しかしながら、私の予感や直観は、どちらかといえばこれに否定的である。つまり、人間に人間は創れない、という意味だ。人間に美を創ることができないのと同じように。

それでは、人間でなければ、いったい、何者だということのか？

だが……、事実は揺るがない。私がパスイヴァを創ったのであり、パスイヴァは私によって生み出されたのだ。事実は感情に影響されない。影響されるのはいつも感情の方だ。直観というよりは、だから願望に近いのかもしれない。願望こそが、私を堂々巡りへと誘うのだ。

私の願いとは何だろう？

願うことを、いつの日か、忘れてしまうことだろうか？

けれどもそれは、割れた花瓶を割れる以前に復元することができないように、哀しくも二律背反の事象だ。

私は人間であるか、

それとも……。

ふと見ると、パスイヴァの視線は膝の黒猫に注がれている。夜……、あるいは闇のような猫だ。月の瞳がパスイヴァを見上げている。

そう、月は……、一つだ。

黒い眼帯が^{むらくも}叢雲のように左眼を隠している。雲の下は^{うつ}虚ろ。^{せきがん}隻眼の夜。

パスイヴァは夜をそよ風のように撫でている。それを見て、私は、猫もあながち悪くない、と考えた。

「確かに、私にはご主人様のことは何も知り得ません」パスイヴァの唇が再び開いた。「ですから、ご主人様の言葉で言えば魔ということになりましょうが、しかし、私の言葉ではより適切なものがございます、それは……、」

「いや、その先を言う必要はない」私は遮った。

彼女の言葉は、なんと甘く熟れた言葉だろう……。

^{リン}林檎は何故赤いのか？ それは流れ出た血に濡れているからだ。

とめどなく流れるのは誰の血か？ それはパスイヴァの血だ。

傷つくのは私の方だ。

私だけでいい。

「言う必要はない」私は繰り返した。「言わなくてもいいんだ」

「承知しました」彼女は頷いた。

「もう少し無意味な話をしよう、たとえば……、」

「失礼ですが、意味のある話が存在しますか？」パスイヴァは鋭く言った。

「まあ、確かにそうだ」彼女の切り替えの早さには、たまに驚かされる。「君はさっき、歴史の教科書の話をしていたが、学校に通っていたっけ？」

「これはご主人様がお使いになっていた教科書です」そう言って、彼女は先ほど読んでいた本を私に見せた。

そういえば、確かに、本棚にあったような……。いや、どうだっただろうか。それよりも、彼女はどこでそれを見つけたのだろう？ 私ですら憶えていないものを見つけ出すとは、何というのか、子供の成長を見守る親の心境がわかる。

「どういう意味ですか？」彼女は怪訝な眼で私を見る。

「意味がないと言ったのは君だろう」

「そういう意味ではございません」

「じゃあ、どういう意味？」

「意味には二種類の意味があるという意味です」

「それ、ジョーク？」私は吹き出した。「ああ、なんだかわからなくなってきたね」

「私にはわかります」

「あ、そう……」

「今夜はお客様がいらっしゃいます」そう言ってパスイヴァは歴史の教科書を再び繙いた。

「それと、何の関係があるの？」

「その方は剣士なのだと伺いました」

「剣士ね……」随分と懐かしい言葉ではないか。「え、じゃあ、それは誰から聞いたの？」

するとパスイヴァは溜息をついた。その吐息でドライフラワーが作れそうだ。もちろん、花などなくても吐息だけで、である。「ご主人様から伺いました」

「ああ、そうか……、そういえば、そうだったね」本当はすっかり忘れていた。もう時間の感覚が薄れてきているのだ。「もしかして、呆れてる？」

「そのお言葉で、呆れると諦める、という二つの言葉の共通性に気がつきました。たいへん勉強になります」彼女は恭しくお辞儀をした。「データベースに記録します」

「いや、そんな情報、記録しなくていいから……」

「記録完了です」私の制止など無視して、機械音声で彼女は告げた。「消去するには、認証コード十六桁を入力してください」

「どこに？」私は、彼女の躰を見渡しながら、随分古い機構だな、と思った。

「それはセクハラですか？」パスイヴァは急に元の冷たさに戻る。機械よりも冷たいというのはなかなか暗示的ではないか。

「えっと……、どっちが？」

「どちらだと思えますか？」

「いや、そう、悪かった、謝るよ」

「何をですか？」

そのとき、ちょうどノッカーの叩かれた音が部屋に響いた。夕立の前触れに轟く雷のように、静寂に研するノックの音で、かつて存在したという、藁人形ワラニンギョウに五寸釘ゴスンクギを打ち込む女性のイメージが想起された。藁も釘も見たことはないが……。考えているうちに、パスイヴァはすでに席を立ち、ドアを開けて出て行ってしまった。

それにしても、来客とは、いつ以来だろう。思い起こそうとしても、答は一つしかない。つまり、前の来客以来である。ただ、その来客が誰だったのかさえ、もう憶えていない。いや、そ

もそも、この屋敷に客が来たことがあったらどうか？

今夜のゲストは剣士だという。そうパスイヴァが言っていたのが、元を辿ると私の口から出た言葉らしい。いつ、そんなことを言ったのだったか……。パスイヴァに聞けば秒単位で答えてくれるだろうが、まあ、大した意味がないので聞くことはないだろう。パスイヴァの冷たい視線を浴びるだけである。そもそも、聞くこと自体を忘れる可能性の方が高い。いずれにしても、件の剣士が実際に訪れた暁には、すべてが許されるのだ。しかし、たとえ許されなかったとしても、いつも通りである。

パスイヴァは剣士を知らないが、私は剣士を知っている。実際に逢って、会話をしたことがある。しかし、当然ながら、剣士はここよりもずっと遠い場所に住んでいる。距離的にも、時間的にも。だから、剣士と最後に逢ったのはこの私ではない。矛盾するようだが、私は剣士と初めて逢うことになるのだ。

やがて眠りから目覚めるように、正面の扉が再び開いた。

「失礼致します」

パスイヴァに連れられて部屋に入ってきた男は、恭しくお辞儀をすると、私に向かい合うようにして座った。パスイヴァは彼が着席した後に音も立てずに座った。暖炉の火が、男の横顔に陰影を浮かび上がらせる。波打つ紋様を見ていると、変な喩えだが枯山水を思い出す。

「夜分に申し訳ありません」男は頭を下げる。夜分とはどういう意味か、それはよくわからないが。「私はマツバと申します」

マツバはまるで老人のように見えた。風貌は明らかに、パスイヴァよりも年老いている。浅黒い肌と対照的に、肩甲骨まで届くほど長い髪は灰のように白い。よくある甲冑姿ではなく、纏っているのはぼろ切れで、お世辞にも服とすら言えない。だから剣士としては不自然だ。よく見ると、彼の瞳は、吹き荒ぶ嵐に身を切られ、もう飛ぶことのできない鴉のように、深く、そして蒼かった。

それに……。剣士の条件ともいえる剣を、彼は腰に差していない。

「あなたのお名前は、何とおっしゃるのですか？」マツバは続けて尋ねた。

「パスイヴァと申します」

「パスイヴァさん……。ですね？」マツバはワインを含むように、舌で彼女の名を転がす。「ああ、それは、アリスに感謝を申し上げねばなりませんね」

彼の答で、私はようやく、マツバの素性を推し量ることができた。臃げだが、彼のイメージは、剣士というよりは牧師に近い。落ち着いた物腰。切れ味のあるユーモア。だが……。懺悔を聞くような牧師には見えない。むしろ、懺悔をする牧師だ。霧に翳る灯台のような、憂いの眼差しが、私にそう思わせる。

「そのお名前は、どなたがお呼びになるのですか？」

「ご主人様がそうお呼びになります」

「ああ……。それは、素敵ですね。自分の名前を呼んでくださるお方がいるというのは……。とても素晴らしいことです。どんな宝石よりも価値があります」

「その通りでございます」パスイヴァは頷いた。「私には、ですから、身に余る光栄です」

「そんなことはありません……。あなたにこそ、その名前を呼ばれる価値がある、ということです」マツバは言った。「それでは、あなたの膝元で眠っている、その猫の名前は……？」

「トラツグミと申します」

「トラツグミ？ ああ……、ええ、存じております」 マツバは頻りに頷きながら、再び問いかける。「それでは、どなたがその名前と呼ぶのですか？」

「ご主人様がそうお呼びになります」

「素晴らしい……、思った通りだ」 マツバは声を漏らし、真っ黒に塗り潰された天井を見上げると、彼は恍惚の表情を浮かべた。「この屋敷は、私がかつて存在したどこよりも、世界が凝縮されている。まるで天国みたいだ」

「ありがとうございます」 パスイヴァの声は、眠りの森に響き渡る鐘の音のように聞こえた。そして、彼女の瞼がゆっくりと閉じられ、長い睫毛が優しく接吻を交わす。「マツバ様」

「ああ……、」 マツバは右手で眼元を覆った。「今日、死んでもいい」

「今日、とはいつですか？」

「私が生きている間は、ずっと、今日です」 マツバは姿勢を戻すと、蒼い瞳でパスイヴァを見つめた。彼女も彼の瞳を見つめている。「ですから、私が死んだ後は、昨日になります」

「しかし、私には、マツバ様が生きていても死んでいても、同じ今日です」

「はたしてそうでしょうか？ 確かに、この地球……、いえ、それを包み込む膨大な宇宙からしてみれば、私の生死など取るに足りないでしょう……、しかし人間にとってみれば、その比重は絶大です。たった一人の人間と出逢うだけで……、いえ、たった一つの真実を目の当たりにするだけで、すべてが変わるのですから」

「そのような経験がおありですか？」

「ええ……」 マツバは頷くと、左腰をちらりと見た。しかしそこには何もない。

「剣と何か関係があるのですね？」

「ええ……、」 マツバは、煙草から煙を吐き出すように息をついた。「私は遠い昔、剣士を名乗っていました。今は……、ですから、私は剣士ではありません。そうですね、若気の至り、とでも言いましょうか」 そう言って彼は笑った。「私が幼い頃には、すでに剣士など古い時代でした。だいたい、法律でその存在すら否定されているのですから。しかしね……、私は、こう言うのも何ですが、自分を、この世で最後の剣士だ、と思っていました。私以外のすべての人間が……、人間には見えなかった。魂を失った人形にしか見えなかったのです。私にとっては、人間とは、書物に見るような剣士しかあり得ませんでした。彼らが振るう剣には魂が宿っている。いえ、剣こそが魂であり、彼ら自身が剣なのです。剣士はけっして人間しか斬らない。それも肉体を斬るわけではありません。人間の魂を斬るのです。剣は飾りではなく、人間である証です。人間は、戦わなければ、人間たり得ないのです。剣士こそが人間なのです。しかし……、私の周囲にいたのは、戦うことを忘れた、人間の形をした骸だけでした。ですから、私は……、故郷を離れることにしたのです。何故なら……、戦わなければ、自分を、人間とは呼べないからです」 マツバはそこで、自虐的に微笑んだ。「しかし私は無知でした。愚かだったのです。ほんの僅かでも良識があれば、誰でも気がつくはずのことに、ずっと気がつかなかったのですから……。つまり、私は、たとえ戦いの果てに命を落とすことになっても、自分は人間として死ぬことができる……、とまるで剣士であることが名誉のように考えていました。しかし、考えてみれば、この世のすべての剣士を斬り終えたとき、私はいったいどうなってしまうのか……？ もう二度と、戦うことができないのですから、私は、その瞬間、人間ではなくなってしまうのです。信じられるでしょうか、人間でなくなることを忌避し、戦い続けた果てに待っているのが、こんな残酷な事実だということ……」

マツバは再び左腰を見た。彼の眼は、きつと、そこに剣を見ているだろう。

「そう……、つまり、剣士であることは名誉などではない、ということです。いえ……、この言

い方は正確ではありません。ある種の冒瀆だ……、つまり、この世に剣士は存在しないのです。言い方を変えれば……、人間は剣士にはなれない、ということです。何もかも、私の思い上がりに過ぎなかった」

「それはどういう意味ですか？」

「すべては……、」放心したように答えるマツバは、遠く壁の向こうを幻視し、過去を蘇らせているのだろうか。「あの巨大な……、天を貫く大剣を目の当たりにしたとき……、終わりを迎えたのです。それとも、あれが始まりだったのか……。あの大剣は、人間にはけっして振るうことはできない。あの、地に深く突き立てられた大剣は、まるで十字架だった……。地球に突き立てられた墓標だった……。目映い光が……、刀身に反射する、太陽の真っ白な光が、私を洗い流してゆく……」彼はパスイヴァを見ると、唾を飲み込んだ。「あの剣を振るうことができる存在は、ですから……、」

「その先を言う必要はありません」パスイヴァは私を真似て、マツバの言葉を遮る。

「ええ……、そう……、その通りです」

「それで、マツバ様はご自身の剣を……？」

「私はその地で……、自分を埋葬しました。私の剣は、私の墓標となりました。私は……、一度死んだのです。そして再び生まれました、人間として……」

マツバはそこで一度眼を瞑り、しばらく何も言わなかった。

部屋は静寂に包まれた。暖炉で薪が弾ける音だけが、脈拍のように疼いている。彼の顔に刻まれた影は、その度に何度も爆ぜ、再生を繰り返した。幾度めかの再生の折、彼は再び、ゆっくりと眼を開いた。

奇跡的にも、私の知っている、あの、深く……、蒼い瞳だ。

「私は、あの大剣の持ち主を探して旅を続けました。いえ、旅というよりは放浪……、それとも漂流でしょうか。風が吹く方へ向かって、ただ……、歩き続けました。それは確固たる自信があったのではありません。けれども……、躰は自然に動くのです。躰は知っていたのです。憶えていたのです。私が行くべき場所……、還るべき場所を」彼は舌で唇を舐めた。「やがて私は……、この屋敷へと辿り着きました。長い年月の果てに、ようやく……、そう、この屋敷のご主人にお逢いするべく……」

言い終えたマツバは、溜息をつくど、語るべきことをすべて語ったからだろうか、幾分か肩の荷が下りたようだった。彼は机に身を乗り出し、パスイヴァをじっと見つめる。

「パスイヴァさん、それで、本題なのですが……、この屋敷のご主人はどちらにいらっしゃるのですか？」

マツバは……、まるで何でもないことのようにそう尋ねた。

もしもこの場に振り子時計があつたら、沈黙は、振り子が三往復する長さだっただろう。

「私なら、ずっとここにいるではありませんか」

「え？」マツバは眼を見開いた。

「あなたはずっと、私と話していたのです」私は、パスイヴァの声で答えた。

「そんな……、」マツバは椅子を蹴って立ち上がった。彼の視線はパスイヴァに釘づけになって

いた。「じゃあ……、あなたは、いったい……？」

「私はトラツグミです。私が、私を……、そう呼ぶのです」

マツバはただ茫然と立っているだけだった。いや、立っているというよりは、机に身を委ねて^{ゆだ}いる、という感じだ。

「あなたは、この屋敷が世界を凝縮しているようだ、と言いましたが、それは正確ではありません」

私はパスイヴァの声で言う。

「この屋敷には、答はないのです」

マツバは震えている。きっと、寒さのためではないだろう。

「あなたが求めている答だけは、ここには……、」パスイヴァは首を振った。「いえ、どこにもないのです」

マツバは汗を流している。暑さのためではないはずだ。

「あなたを洗い流す朝日は、けっして差すことはないのです。あなたは死んでなどいない。死ぬということはそんなに簡単なことではないのです。死ぬことができないのですから、当然生まれ変わることもない。あなたはずっと、あなたのままです。これからもずっと……」

「しかし、」マツバはようやく声を発した。冬のように^か嘎れた声だ。「しかし、あの剣を照らしていたのは……、」

「どうしてそれが太陽だと言えるのですか？ あなたは自分の顔を見たことがありますか？ どんな存在でも、自分の顔さえ知るものはないのです。水に映る顔を見て、ああ、これが自分の顔なのだ、と信じるしかないのです。それと同じこと。すべてはあなたの空想に過ぎないのです」

「しかし、あそこに月が……、」

「あなたにはこれが月に見えるのですか？」

マツバは眼を見開いた。

彼の蒼い瞳には、私の瞳が映っている。

「風が……、あなたをここまで導いたのですね？」私は彼の瞳……、そしてそこに映る、私の瞳を見つめながら言った。「しかし、風はどこから吹くとしても、結局は、自分に向かって吹くものです」

「ええ、それが……？」

「ですが、風はすべて……、この屋敷に向かって吹くのです」

「それでは……、あなたは……、」

「その問いもまた風と同じ。自分に向かって問いかけているのと同じこと……」

そう言い終えたとき、

一陣の風が部屋を舞った。

完全な密室であるにもかかわらず、木枯らしのような鋭い風が、どこからともなく駆け抜けてゆく。

その風に、暖炉の火は跡形もなくかき消されてしまった。

残されたのは一面の闇。

そして月の淡い光だけ。

しかし、回廊に靴音が反響するように、風の^{かんげき}間隙を縫って、言葉はいつまでも、彼の鼓膜を愛撫し続ける。

「私はどこにでもいるし……、どこにもいない」

マツバは何も言わない。

「それはあなたも同じ」

マツバは何も答えない。

「風は吹く、そして、どこへ行くのか……？」

マツバは、何も言葉を発さなかった。

ふと見ると、マツバの躰はいつの間にか、人形のように力を失い、椅子に^{もた}凭れかかっている。そのまま彼は微動だにしなかった。彼の蒼い瞳は何も見えていない。瞬きすらしない。もう二度と。

涙……。

涙のように細い銀色の糸が、何本も彼の躰に繋がっている。まるでマリオネットのようだ。誰が操っているのか、無数の糸に引っ張られるようにして、彼の躰が浮かび上がる。

肩。肘。頭……、一瞬、彼と眼が合った。しかしすぐに^{うつむ}俯いてしまった。眼が合った、と思ったのは気のせいだったのか。

糸はするすると引き上げられ、彼の躰も、ゆっくりと空に吸い込まれてゆく。

空……。

彼が遠ざかってゆく先を見上げると……、

天井はすでにそこにはなく、

ただ黒い、

どこまでも黒い、

夜が広がっている。

海のように終わりのない夜を漂うように、

マツバの躰はどこまでも昇ってゆき……、

やがて、

穴のように開いた白い星に吸い込まれていった。

音もなく、

跡形もなく、

彼は消え去った。

マツバはようやく、

永い眠りについたので。

それは……、私の^{そば}傍にいたパスイヴァも同じ。

彼女ははたして、私の存在に気がついていただけるか。きっと……、気がついていただける。

けれども、最期までそれを口に出さなかったのは、人間の優しさと言えるだろうか。まるで雪の

^{ひとひら}一片のように、優しさとは^{はだ}膚に触れた瞬間に^と融けてしまうが、冷たさの感触だけは確かに残り続けるものだ。

足元には、彼女の掛けていたモノクルが落ちている。私はそれを拾い上げると、彼女の真似を

して右眼に掛けてみた。

度が合っていない。

私は諦めてモノクルを外した。

そう……、

パスイヴァはもういない。

彼女も眠りについたので。

永い眠りに。

そして……、

私だけになった。

静寂。

闇。

いや……、

月だ。

夜は月が唯一の明かりだ。

窓硝子に映った、月だけが……。

そう、いつの間にかカーテンが開いている。

誰が開けたのだろう……、パスイヴァだろうか。

すべては、彼女がカーテンを開けたせいだ。

それ故に、私は幻滅したのだ。

しかし、すべては一瞬のことだ。

私にとっては……、

何もかも、

一瞬のこと。

冷たい窓硝子の向こうには星が眠っている。

あまた
数多の十字架が舞う夜だ。

夜。

そう……、

私こそが夜なのだ。

千年も昔からずっと、

私はけっして朝の来ない夜だ。

(黒棲まう千年楼閣――了)

修羅が靡く (松本惇暉)

修羅が靡く

松本惇暉

夜が明けかかっていた。自分の周りの色が黒から灰色へ、さらに灰色から白に変わっていった。ゆっくり濁りがなくなっていくような感じだった。曇の日ってのは、こうもすっきりしないものかと、今さら気づいた。

屋上に立つと、いろいろなものがよく見える。まあ、五階建てだから、そう大層なものじゃないが。

繁華街特有のゲバゲバしい看板と、高さの揃わない小さなビルの集合がそれに拍車をかけている。そのビルの屋上にいる自分がいかがわしい看板の一部に思えて、どこかおかしい気もする。

「朝焼け、見たかったな」

隣で馴染の声がした。横目で覗くと、黒音が柵にもたれて人のいない下の道路を見下ろしていた。彼女の白いヘアバンドが、ぼんやりと浮かび上がって見えた。俺はぶるりと身震いした。四月の夜はまだ冷える。

「まだかな」

また黒音が呟いた。脈絡もなく、子供じみでいた。そのとき、黒音のスマホが鳴った。俺は黒音と相手の会話に聞き耳をたてた。

「あと二十分で封鎖が完了する。もう少し待機だ」

「だいぶ手間取ってる」

「店から客を追い出すのに苦労してな。大変なんだぞ。酔っ払いや、大人のお愉しみ中のやつを誘導するってのは」

「ふうん」

黒音はニコリともせず唇を動かさず。俺は鼻で笑った。黒音は決して笑わない。それどころか、表情がない。自分にとって、必要ではない。これは黒音の口癖だが、笑わない理由を訊かれたら、きっとそう答えるに違いない。

「まあ、耳を澄まして待ってろ」

プツンという響きを残して、通話は終わった。黒音が大きく息を吸って。吐いた。切り換えたのだろう。緊張を全身に滾らせているのは、並大抵の努力では足りない。そもそも、緊張を楽しむほどでないと到底無理だ。

俺もまた、鼻から息を吸って、肺に空気を満たす。残念ながら新鮮で澄んだものじゃないが、背に腹は代えられない。まあ、血や硝煙の匂いがしないだけ、よしとしなければならないだろう。

それに、こういう空気を少しばかり変える方法がない訳じゃない。俺は胸のうちで独りごちると、学ランの左ポケットから缶コーヒーを探り出した。

「はい、いつもの」

いつもの台詞を添えて、黒音に差し出す。ほのかに温かい缶コーヒーが妙に愛おしく感じる。

自分は感傷的なのだと思う。今の状況じゃあ、あまりにも安い。

黒音は黙って缶を右手で受け取り、左手に持ち替える。そして、俺がついさっきやったように、右手でセーラー服の胸ポケットに差し込む。そのポケットは不自然に膨れていた。

「はい」

黒音から俺に向かって缶コーヒーが差し出された。しかも、同じ銘柄のものだった。

毎度のことだが、律儀なやつだと俺は微笑む。受け取りながら不器用なやつだとも思う。人一倍、無愛想なのに、礼儀を尽そうとする、彼女はなかなかややこしい性格している。どこか、おかしい。

二人同時にブルタブを引っこ抜いて、かすかに湯気が立つ。俺は一気に半分飲む。苦い。喉と胃に蛇が巣食った気分になる。コーヒーの後味がなぜか自分の感覚に直結している。

ふと、黒音はどんな後味を感じているのだろうと、疑問が湧く。口に出して確かめようとすると、「ねえ」という彼女自身の声で出鼻を挫かれた。俺は中途半端に唇を曲げたまま、漠然と彼女の瞳を見た。

黒音は湯気に載せるように、言葉を継いだ。

「最近、封鎖に時間が余計にかかっている気がする」

「この街は路地が入り組んでるし、そもそも人の数が多いから。三十分で封鎖できたんだ、褒めるべきじゃないかな？」

俺は灰色に汚れた空を見上げた。今日は、雨かもしれない。星が、見えない。

「そう、なのかな？」

黒音は意味もなく缶を振る。赤いパッケージが、滲んだサイレンのように見える。俺は向かい側のビルと見比べる。灯りが点けばなしの、清潔な壁紙と机が並んでいる、人のいないオフィスがやたらに眼につく。

「静か、だ」

黒音と俺の声が合わさった。それが芝居じみていて、俺はふっと鼻から息を吐き出した。隣はうんともすんとも言わない。ただ、赤い缶を見つめている。もしも、俺と彼女の間を空気を喩えるならば、波が消えて静止した海にいるみたいだった。

「……待ち切れない、なあ」

俺の口が勝手に動いた。誘うような言い方になった。それにつられたのか黒音がくしゃみをする。鼻を中心に皺が寄って、彼女の顔が少し縮んだように感じる。かさぶたができて、剥がれ落ちていくところを見ている気分になる。あの、絶妙な満足と不安が自分を浸した。

自分のスマホが震えた。メールが届いていた。

「待機中の各位に通達。封鎖完了。並びに規制解除。目標が指定のポイントに到達しだい、行動開始。以上」

俺はもみあげを搔きながらメールを読んだ。コーヒーを飲み干して、空き缶を下に置く。黒音は長い黒髪をかき上げて、こくこくと飲む。かすかに動く喉仏が艶やかだ。

「さて、と。準備するか。そう言っても、来るのを待つだけなんだけど」

俺は呟いて、両手を組んで腕を空に向かって伸ばす。ついでに、首を前後に振る。黒音は缶か

ら口を離して、眼をつむる。生暖かい風が吹いて、皮膚を湿らせる。自分のいる屋上が、プールか海岸に囲まれているような気がした。

「ねえ、潤一は、聞こえる？」

黒音が俺に問いかけるまで少し間があった。それがずいぶん長く感じた。俺も耳を澄まして、音を集める。

「……ああ、確かに」

ウーン、ウーン、グーン。かすかに鳴っている。いや、唸っている、か。黒音のほうはどう捉えて深く掘っているのだろうと俺は思う。また、笛を力の限り吹くように唸りが広がり、自分たちを包む。

「近づいて、来る」

そう言って黒音は眼を見開いた。俺は薄目を開けて考える。目標が自分たちの真下に到達するまで、どのくらい時間があるのか。十分？ 三分？ いや、

「五分」

黒音に先を越され、ちょっとばかり口惜しくなる。俺たちの取り巻く音が、急に膨らみ、唸りから轟きが変わった。そのうえ、コンクリートについての黴の匂いに、焦げた匂いが混じり始めた気もする。

自分に滾る緊張を破裂させるまで、あと少し。俺は黒音に向けて微笑を送った。きっと、同じだろう。彼女は瞬きをして、黒から灰色に変わりつつあるアスファルトを見下ろした。

スーハ。スーハ。規則正しい息遣いが、心地よいカウントダウンになる。それに乗っかって、袖を捲る。鼻歌でも歌ってやろうか？ 今日は良い仕事ができそうな気がした。

俺は缶を拾い上げて、ポケットに突っ込む。ついでに、黒音のほうに視線を転がす。彼女もまた、左腕の袖を捲り上げていた。袖を折りながら、腕に踊っている錆色の斑点を睨んでいた。

黒音の足元に缶が置きっぱなしになっている。俺は苦笑した。忘れんなよ。一応、俺たちは《公社》の人間なんだから。我ながら細かいと思いつつ、俺はしゃがんで彼女の足元に手を伸ばす。

「あ。ごめん」

腕を撫でながら、彼女は言った。

「はいはい。いつも通り、っと」

俺は肩をすくめて缶をポケットに放り込む。ポケットが両方とも膨らむと、腹も膨らんだ気がする。なぜか誇らしい。子供のときからずっとそうだった。三つ子魂百までも。諺を思い出して頬が緩んだ。

俺は両腕を柵のうえに載せて、右腕と左腕を見比べる。右には斑点、左はケロイド。蛇と泥。どうしても傷一つない、黒音の右腕がうらやましくなる。醜いってのは、清濁合わせてやっかいなもんだ。自分で言っというて、虚しい。

金属が擦れる音がして、俺は顔を隣に向ける。黒音が柵のうえに両足を載せて下を覗いていた。風に吹かれて、ふわりとスカートが揺れる。俺も足をひっかけて、柵のうえに乗る。唸りがはつきり大きくなった。

「来た」

黒音がちょっと左斜めに顔を傾けて、瞬きをした。俺は彼女の視線を追いかける。こっちに近づいてくるものがある。朱い球だった。そこで、眼を細くして俺は捉える。あれは眼だ。だって、黒い点が真ん中にあるじゃないか。

「嫌な眼」

ほら、黒音も同じことを考えていた。彼女は続けて、

「あんなに集まって、濃みたい」

吐き捨てた。背筋が冷える姿だった。俺は肩をすくめて、その通りだと思った。どろどろとしたあいつらの身体の表面は、斑点やケロイドにあまり変わらない気がした。自分たちと似てるかもしれない。と、俺は思い、

「ぼちぼち、行くか」

と呟く。黒音は黙って頷いた。俺はちよろりと唇を舐めて、真下を見る。無数の眼がうねうねと波打ち、行進している。灰色だった道路は真っ赤に染まっている。人間を吸い込む底なし沼に見える。坊主が見たら、業じゃ！ 地獄じゃ！ と言って失神しそうな風景だ。

「一、二、三で行こう」

黒音はいつものように、指揮棒を指すように手首を振って俺に言う。

「一、」「二、」と俺と舞花の声が重なって、

「三」で、柵を握っていた左手を離す。

俺は柵を蹴って身体を躍らせる。途端に、風が襟口や袖口から入って来て、皮膚と毛を撫で回していく。身体が内側から膨らんでいく感じ。視界一杯に赤と黒点が見えたり隠れたりする。薬物中毒はきっとこんな感覚なのだと、変に昂る。

身体が反転する一瞬、舞花に眼をやる。

長い黒髪が吹き上げられて、仏像の、阿修羅に彼女はなった気がした。

そう思うのは、斑点まみれの皮膚を裂いて、左腕から刀の柄が突き出たからに違いない。彼女は右手で柄を握って、抜き払う。わずかに濡れた刃が輝く。植物が土から芽を出す、あのときとそっくりだ。俺も、彼女と同じように右腕から棍を抜く。やっぱり少しだけ濡れている。

もう、地面はすぐそこだ。俺は身体を捻り、着地の体勢を整える。

黒い点が、無限の弾丸に見える。それが自分に突き刺さるような錯覚を生む。

足の裏に重い衝撃がやって来たのと寸分たがわず、棍を赤い眼に突き刺す。色の分からない液体が、拳や頬にかかる。握り返して、俺は抉り取るように引き抜き、自分に向かって来た触手を斜めに薙ぎ払う。

折れた触手の断面から、錆色の灰のようなものが散る。

まるで俺たちを喰って、消化しようとしてるみてえだ。

視界の端で、黒音が触手を三本まとめて、袈裟懸けに叩き斬っているのが映った。

俺は腰を折って、後ろから突いて来た触手を避ける。ついでに棍を軸にして、振り上げた右足でそれを蹴り飛ばす。一回転。自分が球になった気分だ。

潰れる音と裂く音が混ざり合い、おかしいハーモニーができる。黒音の獣じみた刃筋が、それ

を加速させる。右に、左に、身体を躍らせて触手と眼を斬り裂いていく。相変わらず、自分を顧みない危なっかしいやり方だ。

身体のとこが欠けても、きっと気づかない。

俺は触手を躲しながら、黒音の後ろで立ち昇ったひとときわ太い触手に向かって走った。彼女も真一文字に刀を振るい、そのまま俺に向かって駆けてくる。

彼女も、俺も、型に無理やり嵌め込んで、はみ出したものがある、といった動き。

交差、すれ違い。目の前の敵を、俺は打ち据えて、黒音は斬り裂いて、

錆色の灰が吹き上がる。白んだ空が一瞬だけ暗くなった気がする。火山の噴火を思わせるほど、錆色の灰が激しくそこらじゅうに撒き散らされる。

空気を揺らす心配がぷつぷつと消えた。眼が捉える景色から触手がいなくなった。

俺は辺りをぐるりと見回した。ただ、生気を失った眼がいくつも転がり、その中に自分と黒音が立っているだけだ。彼女の頬は黒く薄汚れている。俺は燻る炭のようだと思った。彼女の中に力強い焔がある、と感じる。それが痛々しくても、暖かく虚ろで無理やり美しいと思わせる。

おまえに近づきすぎると、火傷しそう。

もうすっかり夜が明けていた。

俺は黒音と一緒に、死んだ眼の山を下りた。並んで歩きながら、俺は彼女の熱の籠った瞳と鈍く輝く刃を見比べた。まだ、斬った余韻が残っている。

「どうしたの？」

俺の視線に気づいて、黒音は話しかけてきた。俺は眼だけでなく、顔全体をまじまじと眺めた。

俺は思っていることをすぐに言葉に置き換えることができなかった。その間に、湧き出るように車が何台も軋みをあげて停まり、人が降りて来た。誰もが防弾チョッキや防護服を着ている。

「ねえ、なにか言いたいことがあるんでしょ？」

黒音がせかした。が、脳味噌の中で意味を持たない言葉がいくつも結びついて離れていった。俺は立ち止まって、足元を見下ろした。

当たり前のことだが、赤い眼玉を踏んでいた。

防護服を着た連中が、俺たちを追い越していく。これから眼を焼いて本物の灰にするのだろう。そのとき、俺は彼らがつけているゴーグルが眼にとまった。

頭の中で心地よい痺れが走って、一本の糸ができた気がした。俺は肉が焼ける嫌な臭いを嗅ぎながら、黒音に言わなくてはいけないことを声にした。

「黒音。おまえって、やっぱり眼と眼の間、離れてるなあ」

黒音は眉を少しだけ上げて、またくしゃみをした。俺は満たされた気分になって、微笑んだ。

§

門を越えてしばらくすると、麻美先輩が楽しげにしゃべり始めた。

「やっぱりさ、BPMは、上がれば上がるほど気持ちいいんだよ」

「そういうもんですか？」

僕は歩きながら先輩の背中を見ながら呟いた。するとすかさず先輩は立ち止まり、振り返って

、分かってないな、という表情を浮かべた。僕はいつも通り肩をすくめた。

「先輩は、自分が演奏するとき、疲れたくないとか思わないんですか？」

「いや、全然」

「うわあ……」

「だってさ、やるからには、気持ちよーく全部出し切らなきゃだめじゃない？」

「……言い方が卑猥なんですが」

僕がそう言うと、先輩はぺろりと舌を出した。確信犯だ。普通の人がこんな仕草をしたら、相手は絶対に怒る。が、彼女の場合は例外で、不思議とさっぱりしていて、不快な感じがない。どこか乾いているというか、澄んでいるというか。

「ま、その話は置いといてさ」

先輩は右の人差し指を立てて、自前の唇に当てた。その先は秘密って訳か。僕はため息をつく。時々、先輩の年が分からなくなる。こういうことをされると、途端に大人びて見える。

たかが高校生、されど高校生、かもしれない。

「そういえば、ここって昔は商店街だったんですよね？」

「へえ、よく知ってるね」

「一応、この街の出身ですから」

「まあ、今は跡形もなく消えちゃったけど」

先輩は乾いた笑いを浮かべて、亀裂の入ったアスファルトを蹴って歩き出す。それにしたがって、項でまとめた栗色の髪が揺れた。

真昼のせいか、髪の毛が浮き上がって、馬を見ているような気分になる。

自分はおぼろな記憶と眼に映っている風景を照らし合わせる。どちらも、輪郭が歪んで、今にも崩れそうなところは共通している。ただ、一つだけ大きく違うところがある。

それは、色だ。今、前から後ろに流れていく景色には、色がなかった。

雨風に晒されて白っぽくなったコンクリート製の建物と、黒く煤けた瓦礫の山。鉄筋が剥き出しのものもあって、どこか人間の歯を連想させる。見ているぶんには飽きない、廃墟の森だった。

。

もちろん、人間なんてどこにもいない。

「ねえ、今日も遠回りしよう」

歩きながら、先輩が誘った。僕は黙って肯き、輝いている先輩の瞳を眺めた。

天気予報が外れて晴れになったせいで、背中に薄く汗が出た。雲一つない青空が、余計に目の前を灰色にさせた。僕はふと、子供のころの鬼ごっこを思い出した。

……鬼さんこちら手の鳴るほうへ……

「なに考えてるの？」

「いや、別になにも……」

「ははん。それは嘘だね。あたしの勤がそう告げている！」

先輩は横目で僕を睨んだ。いつものほほんとした物言いをする癖に、痛いところを突いてくる。アンバランス？ ズレ？ 自分の中に、そういった感覚が巣食う。こうなると、先輩はしつ

こい。僕はあきらめて正直に言うことにした。

「子供が喜びそうな場所だな、って思ったんです」

僕は少しだけ言葉を変えて応えた。説明するのが面倒臭い。むしろ都合よく誤解してくれたほうがいい。先輩は鼻をひくひくと動かして、舌で唇を舐めた。

「確かに、かくれんぼにはうってつけだね」

「いかにも、先輩やってそうですね。今でもやってたりするんじゃないですか？」

「残念だけど、あたし、かくれんぼ嫌いなんだ」

「へえ、似合うのに」

「アレが空から墜ちてきたとき、家の中で、弟と一緒にかくれんぼしてたんだよ」

先輩はまるで木になっている果実を鷲掴みにするように、手を頭のうえにかざした。かざした先には、雲で霞んだ太陽があった。太陽と核を重ねているとしたら、笑えない冗談だ。袖がずり落ちて、先輩の手首の斑点がよく見えるのも、僕にとっては目の前に蠅が飛んでいるようなもの。

自分の親父の、黒く爛れた背中を思い出す。

きっとそのせいだろう。アーケードの屋根だったに違いない、今にも折れそうな、鉄骨に僕は眼がいった。鉄骨は蛇のように溶けて絡み合っていた。影が幾何学模様を組み合わされて、腐りかけの獣を思わせた。僕はいやらしさを感じた。

「あとちょっとで、柱に潰されそうになってね。お父さんとお母さんが助けてくれなかったら、間違いなく死んでたね」

先輩は、灰色の雨でどっちも死んじゃったけど、とつけ加えてアハハと笑った。僕は口の中に針金を突っ込まれた気分になった。胃の内側でなにかが暴れている気配もする。恐ろしく、憂鬱になった。

「いつも思うんですけど、先輩は、どうして笑えるんですか？」

「えー、だって、笑っていないとやっていけないよ？ それに、死んだ人たちに失礼だし」

僕の棘のある言葉に、先輩は振り返らずに切り返す。

「失礼って、どういう意味ですか？」

「今日はずいぶん噛みつくね、周は」

また、先輩は澄んで乾いた声で笑った。自分がムキになっていることは、とっくの昔に分かっていた。飢えた犬みたいな顔をしていることも、分かっていた。なんとなく、先輩の言い分も分からなくはなかった。それでも、先輩から納得できる答えを聞きたかった。

急に視界全体が明るくなった。一瞬で影が消えた。

アーケードを抜けたことに、すぐに気づけなかった。いつの間にか、自分が行き止まりのトンネルに入っているような錯覚を起こしていた。

とにかくまぶしい。日差しが自分の胸のどこかを揉みほぐしていく、そんな感覚が湧く。

「やっぱりさ、生き残っちゃって、申し訳ないって感じ、するんだ」

先輩は地面から突き出ている錆びた鉄骨のそばにしゃがみ込んで、足元に生えている黄色い花を見つめていた。自分も黙って見ていると、先輩は手を伸ばして花を摘んだ。黄色が眼に刺さる

ようで、自分は眼を逸らした。

「だからさ、ちょっとでもいいから、なんかこう、行動してないと気が済まないんだよね」
自分も痛いほど分かる。心臓を握り潰される、気分。

「死んだ人の分まで、ってことですか」

「それってさ、死んだ人を都合良く利用してるみたいでさ、あたし好きじゃないんだよね。それに、なんだか必要以上に被害者ヅラしてる気もするし」

先輩は立ち上がって、何事もなかったかのように歩き出す。花を指で挟んだままで。

「あたしさ、死んだ人のうえに座って生きてると思うんだ。だからこそ、自分に向かって来ることに言い訳しないでいたいんだ」

どこからともなく風が吹いて、花が散った。名前も知らない、雑草の花がどうしようもなく物哀しく見えた。自分で反吐が出るくらい、感傷的になっていた。あーあー、してやられた。

先輩はずるい。うまく自分たちの弱点に話を運んでいくんだから。

「先輩、それを言っちゃ、おしまいですよ」

「まーたつまんなそうな顔してる。こういうときこそ、笑わなきゃ。ほら、スマイル」

先輩はニカッと、悪戯小僧のような笑みを浮かべた。それをやられると、ますます自分は敵わない。自分がきつとお人好のせいなんだろうが、なんとなく先輩を許してしまえる気になってしまう。

僕としては、苦笑するしかない。

「その調子その調子」

先輩は満足そうに茶化した。

自分は大きく息を吐いて、耳の裏を搔いた。しばらく、お互いに話すこともなく、ただ足を動かし続けた。

「ねえ、周。ちょっとあそこの廃ビルまで競争しない？」

先輩の人差し指が前後する。

「ああ、大丈夫です」

さっきの話のせいだ。身体のがうまい具合に抜けて、自分でも驚くほどあっさり引き受けられた。それに、先輩の気紛れは今に始まったことじゃない。

「よし！ 位置について……」

先輩がクラウチングスタートの真似をしたので、自分も仕方なくそれに従って膝を地面につける。そうしないと、後から文句を言われてしまう。

「一……二……」

否応なく自分の眼に、コンクリートの破片とアスファルトの亀裂で、でこぼこになった地面が侵入して来る。こんなところを走れるもんか、とも思う。なんとなく、恥ずかしい。

と、考えたとき、先輩の栗毛のポニーテールが自分の鼻先を掠めた。「あっ！」と言う暇もなく、先輩の背中がどんどん遠ざかっていく。自分も一拍遅れて、地面を蹴って駆け出す。くそっ！ またしてやられた。

すっかり忘れてた。先輩が大の悪戯好きだったこと。

道に無造作に転がっている瓦礫や車が、ひどく邪魔だ。いちいち、跳んで避けなげなきやいけない。皮肉にも、仕事で培った技術が役に立つ。意識しなくても、身体が勝手に避ける。このとき、自分は意識ってやつがいい加減なものだと感じる。

もう、この頃自分が機械じみてきて、まったく嫌になる。規則正しく障害物を越えていくのは、なんだか不恰好で気持ちが悪い。

先輩がビルの横についている、崩壊寸前の螺旋階段を駆け登っていくのが見えた。自分も、ちょうど一階分の差を保って、先輩を追いかける。あっという間に屋上だ。

自分が屋上に飛び込んで、先輩の姿を捉えたと思ったら、また裏切られた。

視界いっぱい蒼白い炎が広がった。自分の両の掌から、それこそプログラム通りに、使い古した短剣が突き出してくる。考える暇もなく、柄を握って眼の前にある炎を払う。

ブンと空気が震えて、あっけないほど簡単に炎は散り消えた。

本気の、三割くらいか。自分は無意識に計算していた。

「いやーさすがだね」

先輩は片眼を閉じて、肩に薙刀をもたれさせていた。刃が真昼の日光に照らされて、ギラリと輝いた。さすがに自分はうんざりして、その場に座り込む。今日は散々だ。せつかくの日曜日なのに。

先輩は自分の隣に腰を下ろして、体育座りをした。相変わらず、これから楽しそうなことが起きることを期待している表情だ。そんな顔つきをされるのが、自分は一番苦手だった。

これはやけくそ、どうにでもなれ、だな。

僕は剣を離して、焦げ臭いコンクリートに寝転がった。先輩が首を伸ばして覗き込んできた。思わず、自分の口が動いた。

「あーもうその笑い引っ込めてくださいよ……怒りたくても怒れない」

「怒って自分が自分でなくなっちゃうより、マシでしょ？」

ああ、もう。言い返せねえやと、僕は胸の奥で呟く。

自分を嘲っているみたいに、見上げた空は群青だった。

§

「ほれ、終わったぞ」

「ありがとうございます」

教授からマリーに、拳銃が二丁渡されるのを視界の端で見た。すぐに自分の視線はメンテナンス待ちの武器が並んでいる棚に戻った。教授が仕事をサボっているせいか、棚は満杯だった。

「そういや、他の零班の連中はどうした？ 一昨日メンテナンスの通知をしたんだが」

「あ……たぶん忘れてます」

「まったく、いい加減マリー君を見習ってほしいね。すぐに来てくれるのは、君ぐらいなもんだ。いくらみだし者だって言っても、限度ってやつがある」

「この後会うので、しっかり言っときます」

教授の渋い顔に対して、マリーは微笑みを浮かべて応える。

いつも通り、だ。彼女は教授と世間話を続けながら、左右の手に一丁ずつ、銃を握って軽く構

えた。きっかり十秒そうすると、手首を利かせて、銃を一回転させる。すると、手品のように銃が皮膚に喰いこんで、手の中に吸い込まれる。

これを見て、吐瀉物と洗面器を思い出すのは、きっと自分だけだろう。

マリーは三回両手を握り返すと、教授に「じゃあ」と会釈をして、自分には眼で合図を送ってきた。それに応えて、自分はギターケースを肩にかけて部屋の扉に手を伸ばした。

「ああそうだ。兵吾、おまえの得物は、今日中に終わるから、明日の朝、取りに來い」

教授の言葉に自分は「了解」と呟いて、軽く敬礼をした。彼女もそれに習って、実に締りのある、気持ちの良い敬礼をした。

つくづく思う。自分と比べて彼女は良くも悪くも純粹だ。

「銃がないと、やっぱり変な感じ、しますか？」

部屋から出て、窓から西日が差し込む廊下を歩いていると、隣のマリーが唐突に問いかけてきた。自分は横目で彼女の顔を眺めつつ、足元に出来た影を見ていた。

「身体の感覚はまったく変わらないんだが……丸腰っていう事実が不安にさせるな。自分を」

「なんだか自分だけ返してもらっちゃって、気が引けてしまいます」

マリーは眼を伏せて、いかにも申し訳なさそうに言った。自分はこれっぽっちもそんなことを気にしていない。馬鹿にしているのかもしれないが、彼女の銀髪が夕日で照らされて、熟れた柿のようだという事しか思っていなかった。

「別に、そんなことはない」

そう言いながら、自分は玄関の窓口にいる警備係に頭を下げる。外に出ると、新鮮な春の空気が肺に流れ込んでいく。天気予報が外れたせいで、燃えるような夕焼けだ。自分は背筋を伸ばして、たった今出てきたビルを振り仰ぐ。

ガラスが鈍く光るせいで、魚の鱗に見える。失敗した、焼き魚ってところかもしれない。

ポケットの中で、ケータイが震えた。

「はい、もしもし、西脇です」

「あー兄貴？ そっちの用事終わった？」

「終わった。まあ、あと二十分ぐらいでそっちに行く」

「マリーも一緒？」

「そうだ」

マリーは自分たちが出てきたビル目と鼻の先にある、分厚いコンクリートの壁を眺めていた。壁は憎たらしいほど鮮明に染まって、捨てられた街を囲っている。

「どうしょっかなーもうこっちにみんな来てるんだよね」

「先に練習してればいい。時間がもったいない」

「分かった。そうする。で、来るついでに――」

「コンビニに寄ればいいのか？ なにを買ってあげればいいのか？」

「ちよいとお待ちを」

妹の音が遠ざかって、複数の人間が話し合っている気配がする。落葉がこすれるような音だと、今さら気づいた。マリーはまだ壁を見ている。

「ええっと、食べ物は全員おにぎりでもいいって。だからそれを人数分×2」

「あいよ」

「あと飲み物は、黒音と潤一がブラックコーヒーで、あたしと周が烏龍茶」

「了解」

電話を切って、自分はマリーの肩を叩いた。彼女は壁に流し眼を送りながら、歩き出した。

「麻美から電話で、食糧を調達して来いだとさ」

自分の言葉に、マリーはようやく視線を正面に戻して頷いた。まだ、あそこに帰ることを彼女は諦めていない。壁を見つめていた時間の長さが、それを証明していると自分は思った。

素晴らしいな、郷土愛ってやつは。

「そういえば、さっき言っておけば良かったですね。教授からの伝言」

「そうだな……あいつら、すぐに大事なことを忘れるから」

歩きながら、自分はだんだん暗くなっていく空に何度か眼をやった。毒になるほど眩しかった。仕方のないことなのに、夕日が忌々しくて堪らなかった。自分にとっては色が濃すぎる。

「兵吾先輩は、どうして楽器をやろうとしたんですか？」

「いきなりどうした？ こんな質問をするなんて、マリーらしくない」

「いえ、大した理由はないんです。歌うときの参考になるかもしれないと思って。それに、まだ先輩の口から聞いたことがないので」

マリーは律儀にそう言って、はにかんだ。

自分は考えた。しかし、なにもはっきりとしたものは頭に浮かんで来なかった。せいぜい、きっかけぐらいしか思い出せない。あとは、自分自身を根元のほうで縛りつけているような、窮屈な感覚があるだけだった。

「……とあるバンドのライブDVD、だな……バンドメンバーが飛んで跳ねてぶっ壊すようなやつなんだが、それが自分の内側にある芯まで合ってる気がした。……とにかく、自分で真似したくなった。身体が勝手に動いてた」

「よく見てる、あれですか？」

「そう。Story of the yearのツアーファイナル」

「なるほど。いつも、なにか例えるときに、先輩はそれを引き合いに出しますもんね」

マリーの言葉は、弾丸が頬を掠めたときのように、自分の胸を疼かせた。一つのこと执着するのはみっともないと、暗に言われている気がした。自分でも、病気じゃないかと自覚しているから性質が悪い。

分かっているのにできないってのは、もどかしくて、そして虚しい。

「平凡だろ？」

「いえ、そんなことはないと思いますよ」

「そうか？」

「そうです」

自分は意外だった。こんなに力強くマリーが否定するとは、予想していなかった。

自分は「ほう」と息をついたきり、返す言葉を失って、コンビニの看板のほうへ眼を逸らした

。彼女がああいうふうにした訳を訊きたい一方で、訊くのは野暮な気もした。

コンビニで買い物を済ませてからも、ずっとマリーの表情を盗み見していた。

「やっぱり訊いとくか」

一人で呟いて、自分はマリーを見下ろした。こういうとき、自分と彼女の身体つきの違いを、哀しいほど意識させられる。

マリーは、独り言が聞こえたのか、真面目な顔で自分を見上げていた。

「どうして、さっき平凡じゃないなんて言ったんだ？」

「だって、先輩には確信があるじゃないですか」

「確信？」

「はい。心の底から、楽器を弾くことが自分自身にとって必要なだって、自信を持って言い切れる」

「それは、やってることの意味を、ちゃんと理解しているってことか？」

「そんなところですよ」

マリーが首を縦に振った。自分は喉になにか固い物がかかっている、苦い感覚に襲われた。それがなんなのか考えているうちに、問う言葉が生まれた。

「じゃあ、マリーはなんで歌ってるんだ」

「自分でも、分からないんです。ずっと探しているんですけど」

身体が冷えた。自分はマリーの禁忌に触れて、彼女の大切にしている場所を踏み荒らした。彼女から楽園を奪った気もした。甚だしく、礼儀と義理を欠いた行為だと思った。

夜が深くなって、橙色はほとんど消えて自分の周りは黒に塗り込められていった。

続けるべき言葉が、どこかに逃げてしまった。商店の灯りに照らされるマリーの銀髪が、行く手を遮る壁に見えた。身体の中身がいつの間にかすべて流れ出して、自分は抜け殻になった。

「そんなに落ち込まないでください。私、気にしてませんから」

「それでも、謝る。すまなかった」

「いえ……」

少し困ったような声だった。マリーの表情は闇に溶け込んでしまって、もう読めなくなっていた。自分の思い過ごしだったと認めてしまうのは、きっと都合が良過ぎる。

いつも使っている貸スタジオのある雑居ビルが視界に入った。途端に、自分の持っているギターと気分が重くなった。早く弦にピックを叩きつけて、この腐った気分を忘れたいという欲が、身体中に充満した。

なんと、浅ましい。

階段で地下一階に降りると、すぐにスタジオの入口がある。

「ああ、これ……先輩の一番好きな曲じゃないですか」

顔馴染の受付のお姉さんに指定された部屋の前に立つと、かすかに音が響いて来た。

その音に押し負けないように、自分はドアノブを回し、開ける。

.....guess it's too bad that everything we have is taken away.....

taken away と口ずさみながら、コンビニの袋を置いて、ケースから **Strato** を取り出す。鼓膜を

引きずり出すような轟音が自分を叩き潰そうと纏わりついて来る。

.....Hero, Hero, this world you'll never know.....

マリーが小刻みに首と爪先を上下させて、リズムと波長を合わせている。自分もコード運びを頭に描きながら、台風のように楽器を持って暴れている四人を眺めた。

.....They're taking it away !

潤一が海老のように背中を丸めて叫ぶ。黒音が長い髪を振り乱しながら、Precision Bassを振りかざして目の前の空間を斬る。周はPRSを掻きまわしつつ回し蹴りをする。

そして、麻美がSJCのcustom Drumsを噛みつくように殴りつける。

まるで山を駆ける修験者だ。己の内側にある地獄を鎮めようとしているが、うまくいかない。だから、自分を殺そうと、極限まで力を奮って、楽器にしがみついて交わろうとする。それすらも、自分たちには難しい。

耳鳴りを残して、曲は終わった。

この部屋にいる誰もが、うえを向いて息をついた。

「よーし！ 続けてもう一曲！」

そう言って、自分はStratoを掲げて四人の輪の中に入った。潤一がマイクをマリーに投げ渡して、場所を空けた。彼女は微笑みを浮かべて、マイクを握り締めた。

「なにか良いことでもあったんですか？ 先輩」

周が不思議そうな顔つきで、自分に尋ねて来た。自然に苦笑が生まれる。どっちかって言うと、悪いことがあったんだが。

「いや、今、兵吾はきっと機嫌悪いよ」

黒音と潤一の声が重なった。その通りだ、と自分は胸のうちで呟く。声のしたほうに眼をやると、二人とも滴る汗をタオルで拭っていた。顔の造作はまったく違うのに、仕草や趣味嗜好がどこか似通っている。自分はそれがおかしくて堪らない。

「早く準備してよ兄貴一。あたしすぐにおにぎり食べたいんだから」

のらりくらしとした麻美の言葉に、この場にいる全員が吹き出す。だらしなくドラムセットに寄りかかっているのが、暑さにやられた日本猿のようだ。

あの黒音さえ、ほんの少しだけ、唇を曲げた気がした。

「あいよ。カウントどうぞ」

そう言って自分が準備運動かわりのチューニングを終えると、麻美が起き上がる気配がした。蒸れた空気が、さらに詰まり滾る感覚が、一瞬で自分の爪先からうなじまで走る。

規則正しく、三回乾いた音が響いて、身体に獣の唸りにそっくりの轟音が突き刺さる。

ここからは、勝てない勝負だ。いつまでこのレールに乗ってられるか。前のめりに、意地汚くしゃぶり尽せ！ それが、他人を打ちのめすってことだ。

自分は転がり続ける。

今、自分の周りで、弾いて破裂しているやつらと混ざり合って、螺旋になる。

そして、硝煙と血の匂いを嗅ぐ。

〈終〉

付記

以下の楽曲から歌詞を引用させていただきました。

Story of the year 『And The Hero Will Down』

箆笥集（三） （松本惇暉）

箆笥集（三）

松本惇暉

今、どこにいる、馬か

声を失い 忘れることを忘れた 騎手は

墜ちて 鞭で崩れた文字を 踏み

掌と 頁を突き通して 血が溢れ染み入る

肥料と

虞美人草になった

蹄の痕

宙吊りになって

第一幕

やあ また会った 白黒のピエロ

今度は誰に笑われるんだい もう繰り返すのは飽きただろ。

笛はすっかり錆びついている 半分剥げ落ちている

化粧は 葬式の準備かい。

決して おまえは笑わないのに

第二幕

夕刻に すべてを
終えることが できなかった 少女に
ぶらんこ乗りは 肩を貸して 歩く。
哭く。
どこにでもある豎琴が

第三幕

群青が 追いついて 溶かし まやかしになる。

案山子 2016年冬号

<http://p.booklog.jp/book/104188>

著者：新潟大学文芸部

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sindaibungei/profile>

今回の執筆者

哲 文部蘭

三ツ葉葵 七乙女昂 文月遼、

夏村晋 幼夏 如月杏 今畑鏡 鯉沢増穂

夏草こくりこ 落谷アツムネ Puney Loran Seapon

高天美月 松本惇暉

製本版 発行：2016年 1月20日

電子書籍版 発行：2016年 2月15日

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/104188>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/104188>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ